名神高速道路内遺跡調査会調査報告書　第５輯

中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う

大蔵司遺跡・真上遺跡発掘調査報告書

平成10年７月

名神高速道路内遺跡調査会

名神高速道路内遺跡調査会調査報告書　第５輯

中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う

大蔵司遺跡・真上遺跡発掘調査報告書

平成10年７月

名神高速道路内遺跡調査会

大蔵司・真上遺跡の遠景（平成 5 年撮影）

大蔵司・真上遺跡周辺航空写真（平成 5 年撮影）

はしがき

名神高速道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査も昨年度をもって現地調査を終了しましたが、この間多くの遺跡の調査を実施し、その成果についても調査報告書として順次刊行してきたところです。これらの成果が地域の歴史研究の進展にいささかなりと寄与しているとすれば、我々関係者一同望外の喜びであります。

今回の報告は平成5年度から3年間にわたり発掘調査を実施した、高槻市所在の大蔵司・真上両遺跡の成果をまとめたものです。両遺跡は隣接し、その内容もまた関連することから、本書にとりまとめて報告しますが、真上遺跡の調査では今回はじめて弥生時代の住居跡を確認することができました。また、両遺跡ともに古墳時代以降中世におよぶ長期にわたる耕作地としての利用が明らかになり、とりわけ真上遺跡における中世の土地利用の変遷は、文献に残る「真上荘」について、考古学的に復原する手がかりが得られたものと思われます。本書も地域の歴史研究の資料として今後末永く利用されんことを願ってやみません。

最後になりましたが、今回の調査を実施するにあたり、日本道路公団大阪建設局をはじめ、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会、その他地元関係各位には多大なるご協力を頂きました。ここに深く感謝の意を表する次第です。また、本調査会職員一同、残された業務に全力を傾注し、責を全うする所存であります。今後とも関係各位のより一層のご支援をお願いするものであります。

平成10年7月

名神高速道路内遺跡調査会
理事長　鹿　野　一　美

緒　　言

大阪府の北東部にある高槻市は、古来、肥沃な三島平野を母胎にした人々の営々とした努力の積み重ねにより大いに栄えてまいりました。その結果、幾多の多彩な埋蔵文化財がのこされ、歴史の宝庫とも呼ばれています。かねてより著名な今城塚古墳は真実の継体大王の御陵と考えられ、阿武山の古墓には藤原鎌足が埋葬されているのではないか、といった意見もあります。ところで昨年に発見されました安満宮山古墳とその出土鏡は、耶馬台国論にも多大な影響をあたえたところであり、さらに本年の６月には高槻城におきまして、高山右近時代のキリシタンの集団墓地がはじめて確認されるなど、センセーショナルな話題が全国をかけめぐったことは記憶に新しいところであります。また一方では、名もない幾多の集落遺跡が市内の各所で発見されていて、ここに暮らしていた人々が地域の歴史と文化を育んできたのも大きな歴史的事実であります。

さて今回、名神高速道路内遺跡調査会で調査されました大蔵司遺跡につきましては、服部谷に存する武内神服神社にまつわる祭祀場として著名な遺跡と聞き及んでいるところであり、また真上遺跡につきましても、弥生時代後期の集落が埋蔵されていると考えられるものでありました。どちらの遺跡も高槻の古代を識るうえで看過できない重要な遺跡であり、その実態究明にいたる調査は長年の念願でもありました。

本報告書にもありますように、このたびの大蔵司遺跡の調査では自然流路の検出により、古代の集落の南限についてあらたな知見が得られたほか、可耕地の拡大が中世以降になされたことが判明しました。また真上遺跡の調査では、弥生時代後期の竪穴住居がはじめて確認され、これまで不分明であった集落の実態を追究する手掛かりが得られました。このように両遺跡の調査成果は、今後の本市並びに三島地域の歴史復元にとって、貴重な資料となるものであり、ここにその詳細について報告する次第であります。

最後になりましたが、今回の調査の実施にあたりましては、日本道路公団大阪建設局をはじめといたします関係各位に、多大なるご協力をいただき、ここに深く感謝の意を表する次第であります。

平成10年７月

高槻市教育委員会
教育長　溝口　重雄

例　　言

1．本書は中央自動車道西宮線（名神高速道路）拡幅工事予定地内の大阪府高槻市に所在する大蔵司遺跡・真上遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、大阪府教育委員会・高槻市教育委員会の指導のもとに、名神高速道路内遺跡調査会が実施した。調査および報告書作成に要した費用は、日本道路公団大阪建設局が全額負担した。

3．調査は名神高速道路内遺跡調査会技師大塚　隆、尾関眞二を担当者とし、平成５年度から７年度まで行なった。本書の執筆・編集は大塚が行ない、遺物の写真は小倉　勝が撮影した。

4．調査には国土座標を用いた。本書で用いた方位は座標北、標高はＴ．Ｐ．値である。図化は航空写真測量を利用した。

5．調査の実施から本書の作成に至るまで、下記の諸機関・諸氏にご指導、ご協力を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略）

文化庁、日本道路公団大阪建設局、大阪府教育委員会、茨木市教育委員会、島本町教育委員会、高槻市教育委員会

伊藤美幸、大船孝弘、鐘ヶ江一朗、加山順一、高橋公一、土光淳志、中村律子、橋本久和
原口正三、松本守邦、水野武治、宮崎康雄

特に名神高速道路内遺跡調査会理事、小野山節先生には、本書の作成にあたって有益なご助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。

6．調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏の参加があった。

稲津ゆち子　岩城恵　岩本淳子　大石知世子　岡山雅信　佳川記子　梶原健司　片山実希
亀井美佐　川地ちぐさ　川尻康代　河原善之　岸本晋一　木村知絵　瀬川大介　高木祐志
武村雅代　辻井一美　永田景子　永田淑子　西村典昭　藤本礼子　前上一　前田和子
前田幸美　馬　蘭　三浦晃二　森光泰志　吉岡果名子

本　文　目　次

はしがき　　名神高速道路内遺跡調査会理事長　鹿野一美

緒　　言　　高槻市教育委員会教育長　溝口重雄

例　　言

第Ⅰ章　位置と環境 …… 1

　第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 1

　第２節　これまでに行なわれた調査と歴史的環境 …… 3

第Ⅱ章　調査の契機と経過 …… 11

　第１節　調査の契機 …… 11

　第２節　調査の経過 …… 11

第Ⅲ章　調査の成果 …… 15

　第１節　大蔵司遺跡の調査 …… 15

　第２節　真上遺跡の調査 …… 22

第Ⅳ章　総　　括 …… 57

　第１節　大蔵司遺跡 …… 57

　第２節　真上遺跡 …… 59

遺物観察表 …… 63

挿　図　目　次

図１　淀川低地の地形分類と大蔵司・真上遺跡の位置 …… 2
図２　大蔵司遺跡と真上遺跡の周辺にある遺跡 …… 3
図３　大蔵司遺跡で過去に調査対象地となった場所 …… 7
図４　大蔵司遺跡のこれまでの調査で確認された遺構 …… 8
図５　大蔵司・真上遺跡における調査地区の設定図 …… 13・14
図６　第Ⅲ章の第１節で使用する挿図索引 …… 15
図７　大蔵司遺跡第４調査地区の壁面図と平面図 …… 16
図８　大蔵司遺跡の壁面図　(a)第１、(b)第２、(c)第７調査地区 …… 18
図９　大蔵司遺跡の平面図と土層図　(a,c)第３、(b,d)第５調査地区 …… 19
図10　大蔵司遺跡の出土遺物　（１～28)第４、(29)第５調査地区 …… 21
図11　大蔵司遺跡第６調査地区の壁面図と平面図 …… 22
図12　第Ⅲ章の第２節で使用する挿図索引 …… 23
図13　真上遺跡の壁面図　（ａ)第１、（ｂ)第２調査地区 …… 26
図14　真上遺跡の壁面図　(a)第３、(b)第６、(c)第７調査地区 …… 27
図15　真上遺跡の平面図　第１～３調査地区の第１・２面 …… 28
図16　真上遺跡の出土遺物　（１～３)第２、（４～６)第３、（７～34)第４調査地区 …… 29
図17　真上遺跡第４調査地区の壁面図 …… 31
図18　真上遺跡の平面図　第４・６～８調査地区 …… 33
図19　真上遺跡の平面図　第９～11調査地区 …… 34
図20　真上遺跡第４調査地区の水利施設 …… 35
図21　真上遺跡第４調査地区で検出した溝の遺物出土状況 …… 36
図22　真上遺跡第４調査地区で検出した竪穴住居の遺物出土状況 …… 37
図23　真上遺跡第４調査地区の溝から出土した遺物（その１） …… 38
図24　真上遺跡第４調査地区の溝から出土した遺物（その２） …… 39
図25　真上遺跡第４調査地区の竪穴住居から出土した遺物 …… 41
図26　真上遺跡第４調査地区の遺構から出土した遺物 …… 43
図27　真上遺跡第５調査地区の設定場所と土層柱状図 …… 45
図28　真上遺跡の出土遺物　（１)第７、（２～７)第６、（８～30)第８調査地区 …… 46
図29　真上遺跡の壁面図　（ａ)第８、（ｂ・ｃ)第９調査地区 …… 48
図30　真上遺跡第９調査地区の平面図　第１面 …… 51
図31　真上遺跡の出土遺物　（１～４)第９、（５・６)第10、（７～12)第12調査地区 …… 52
図32　真上遺跡の壁面図　（ａ)第10、（ｂ)第11調査地区 …… 53
図33　真上遺跡第12調査地区の壁面図 …… 54
図34　真上遺跡第12調査地区の暗渠 …… 55

表　目　次

表１　大蔵司遺跡で過去に行なわれた調査の一覧表 …… 6
表２　調査時の地区名と報告書用の地区名の対照表 …… 11
表３　調査期間と面積一覧表 …… 12
表４　真上遺跡第４調査地区の土坑（１～６）、柱穴（１・２）、ピット（１～20）法量一覧表 …… 32
遺物観察表(1) …… 63
遺物観察表(2) …… 63
遺物観察表(3) …… 64
遺物観察表(4) …… 64
遺物観察表(5) …… 65
遺物観察表(6) …… 65
遺物観察表(7) …… 66
遺物観察表(8) …… 66

図　版　目　次

巻頭図版１　：大蔵司・真上遺跡の遠景（平成５年撮影）
巻頭図版２　：大蔵司・真上遺跡周辺航空写真（平成５年撮影）
図版扉　大蔵司・真上遺跡周辺航空写真（昭和30年撮影）
図版１　大蔵司遺跡　上　左：第１調査地区の地山層の状況（北から）
上　右：第３調査地区の暗渠（北から）
中　：第６調査地区の畦（東から）
下　左：第５調査地区の落ち込み（南から）
下　右：第７調査地区の地山層の状況（東から）
図版２　大蔵司遺跡　上　：第４調査地区の畦（西から）
中　左：第４調査地区の畦（西半部）
中　右：第４調査地区の畦（東半部）
下　左：第４調査地区の足跡（右足）
下　右：第４調査地区の足跡（動物）
図版３　真上遺跡　上　：第１・３調査地区の遺構（第１面）
中上左：第３調査地区の南壁
中上右：第１調査地区の北壁
中下左：第３調査地区の遺構（第１面・北から）
中下右：第１調査地区の遺構（第２面・東から）
下　左：第３調査地区の遺構（第２面・北から）
下　右：第１調査地区の遺構（第３面・東から）
図版４　真上遺跡　上　：第２調査地区の遺構（第１面）

中　　：第２調査地区の遺構（第２面）
下　左：第２調査地区の北壁・西半部
下　右：第２調査地区の北壁・東半部

図版５　真上遺跡　上　　：第４調査地区の遺構（第１面）
中　　：第４調査地区の遺構（第１面・左側のみ第２面）
下　左：第４調査地区の遺構（溝の出土遺物・北から）
下　右：第４調査地区の遺構（竪穴住居の出土遺物・東から）

図版６　真上遺跡　上　左：第４調査地区の遺構（暗渠・北から）
上　右：第４調査地区の遺構（暗渠・北から）
中上左：第４調査地区の北壁・東隅
中上右：第４調査地区の第１面より下の堆積状況
中下　：第６・７調査地区の遺構（第２面）
下　左：第６調査地区の遺構（第１面）
下　右：第６調査地区の遺構（南西隅部分）

図版７　真上遺跡　上　　：第６・７調査地区の遺構（第２面）
中　左：第７調査地区の北壁
中　右：第６調査地区の北壁
下　左：第５調査地区の地山層（西から）
下　右：第５調査地区全景（西から）

図版８　真上遺跡　上　　：第８調査地区の遺構（第１面）
中　　：第８調査地区の遺構（第１面・西半部）
下　　：第８調査地区の遺構（第１面・東半部）

図版９　真上遺跡　上　左：第９調査地区の遺構（第１面検出時・西から）
上　右：第９調査地区の遺構（第１面での作業・西から）
中上　：第９調査地区の遺構（第１面）
中下左：第９調査地区の溝（西から）
中下右：第９調査地区の溝（北西から）
下　左：第９調査地区の溝（北から）
下　右：第９調査地区の暗渠（北から）

図版10　真上遺跡　上　　：第９調査地区の遺構（第２面）
中　　：第９調査地区の北壁
下　左：第９調査地区の南壁（北から）

下　右：第９調査地区の南壁（北から）

図版11　真上遺跡　上　　：第10調査地区の遺構（第１面）

中上左：第10調査地区の南壁（東半部）

中上右：第10調査地区の南壁（西半部）

中下左：第11調査地区の暗渠（東側）

中下右：第11調査地区の暗渠（中央）

下　　：第11調査地区の遺構（第２面）

図版12　真上遺跡　上　左：第12調査地区の遺構（第１面・西半部）

上　右：第12調査地区の遺構（第１面・西から）

下　左：第12調査地区の暗渠（東から）

下　右：第12調査地区の南壁（中央付近）

図版13　：大蔵司遺跡の出土遺物（図10）

図版14　：大蔵司遺跡（図10）と真上遺跡（図16）の出土遺物

図版15　：真上遺跡の出土遺物（図16・23）

図版16　：真上遺跡の出土遺物（図23・24）

図版17　：真上遺跡の出土遺物（図24・25）

図版18　：真上遺跡の出土遺物（図26）

図版19　：真上遺跡の出土遺物（図28）

図版20　：真上遺跡の出土遺物（図28・31）

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境（図１）

今回の調査対象となった大蔵司遺跡と真上遺跡は大阪府高槻市のほぼ中央に位置している。大阪府の北東部にある高槻市は、大阪湾から淀川を約20㎞遡った付近の右岸域を占める。市の面積は約105.31㎢を有し、人口は約36.4万人（平成10年４月時点）を数える。大阪や京都の都心部からの交通の利便性から、ベッドタウンとしての開発が続いている。

大蔵司遺跡と真上遺跡の所在地を中心に地形的環境を見ておきたい。両遺跡が所在する高槻市は、京都盆地と大阪平野の接する地域にあり、地理的に重要な位置を占めてきた。京都府下を流れてきた桂川、宇治川、木津川の三河川が集まって淀川となって流れだす地点は、男山（京都府八幡市）と天王山（大阪府三島郡島本町）に挟まれた幅約３㎞の狭隘地形である。このため、古くから交通の要衝として栄えてきたことは言うに及ばず、現在でも国内の主要な幹線道路や鉄道が集中していて、西日本と東日本を結ぶ役割をはたしている。

高槻市の北半は、古生層によって形成された丹波高地に連なる北摂山地と、そこに付随する千里山丘陵、奈佐原・南平台丘陵、高槻丘陵といった丘陵からなっており、南半は大阪平野北部を形成している淀川低地である。丘陵から平野にいたるまでの部分は、市域の西側には丘陵から続く富田台地が大きく南側に張り出しているが、東側にはこのような台地が見られず、丘陵と平野の比高差がきわだち、その境界も顕著である。市域の平野部は淀川低地と呼ばれているが、地形区分では沖積低地であり、谷底平野や扇状地、氾濫平野、後背湿地、自然堤防と高水・河川敷からなっている。

大蔵司遺跡と真上遺跡が展開している場所は、市内の中央を南流する芥川が造り出した河岸段丘と扇状地の上である。図１には市域南部の地形分類を示した。この図から大蔵司・真上の両遺跡は、芥川によって形成された服部谷の谷口付近に立地していることが判る。

大蔵司と真上の両遺跡の立地条件を詳細に観察すると、地形区分上の洪積段丘低位面と扇状地から構成されているが、西側にある大蔵司遺跡は段丘面と扇状地にまたがっていて、東側の真上遺跡は扇状地の上に立地していることがわかる。

生活する場所としての適あるいは不適を地形のみで判断するならば、大蔵司遺跡は段丘上にある西半が好条件を持ち合わせているが、真上遺跡は真如寺川が形成した扇状地の上に展開しており、地形的にみて好条件を満たすような立地条件ではないといえるだろう。

これらのことから考えると、大蔵司・真上に生活の痕跡を残した人々は、絶えず安定地盤の確保を迫られ苦労したであろうと容易に想像させる。

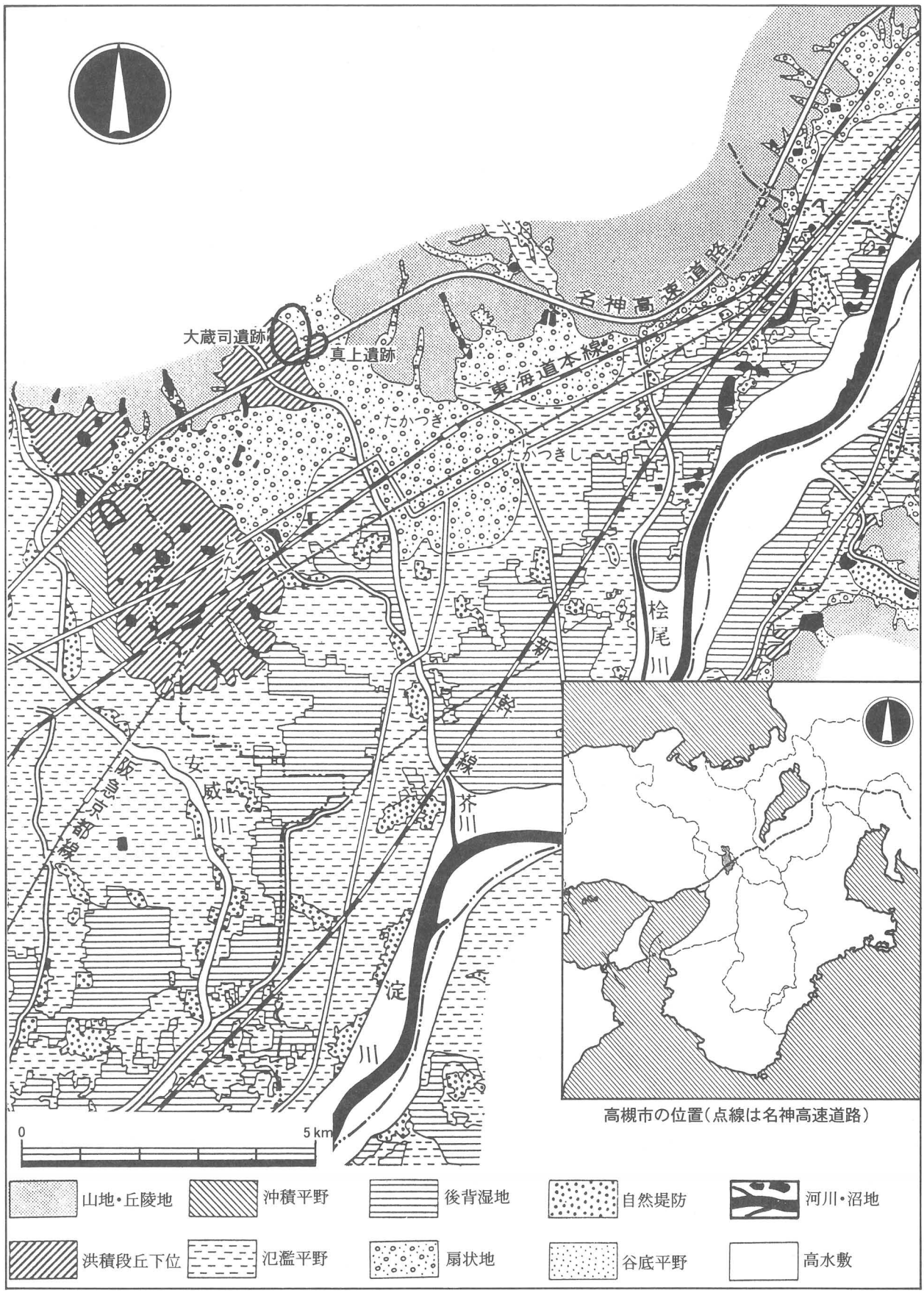


図１　淀川低地の地形分類と大蔵司・真上遺跡の位置（『高槻市史』第１巻本編Ⅰ　昭和52年　の図８に一部加筆）

第２節　これまでに行なわれた調査と歴史的環境（図２～４、表１）

大蔵司遺跡と真上遺跡の周辺にある遺跡を各時代順に述べ、歴史的環境について考えたい。

旧石器時代の遺跡

この時代の遺跡としては郡家今城遺跡、津之江南遺跡、郡家川西遺跡があり、明確な遺構を伴うキャンプ地や遺物散布地がある。後期旧石器時代の後半期に属する遺跡が主で、国府型ナイフを主体として使用した時期にあたるものである。なかでも、郡家今城遺跡の調査では、近畿地方ではじめてキャンプ地の実態を明らかにしたもので[1]、高い評価を受けている。

縄文時代の遺跡

早期から晩期にいたるまで各時期の遺物は出土するが、遺跡の内容を知ることのできるものは少ない。大塚遺跡（早期・前期・後期）、柱本遺跡（前期～晩期）、塚穴遺跡（中期・後期）、天神山遺跡（中期・晩期）、芥川遺跡（中期・後期）、上田部遺跡（後期）、塚原遺跡（晩期）があげられる。なかでも芥川遺跡における調査によって確認された遺構は、大阪府北部の縄文時代後期の遺跡では希有な例であり、その報告書では芥川式土器を提唱している[2]。芥川遺跡は、

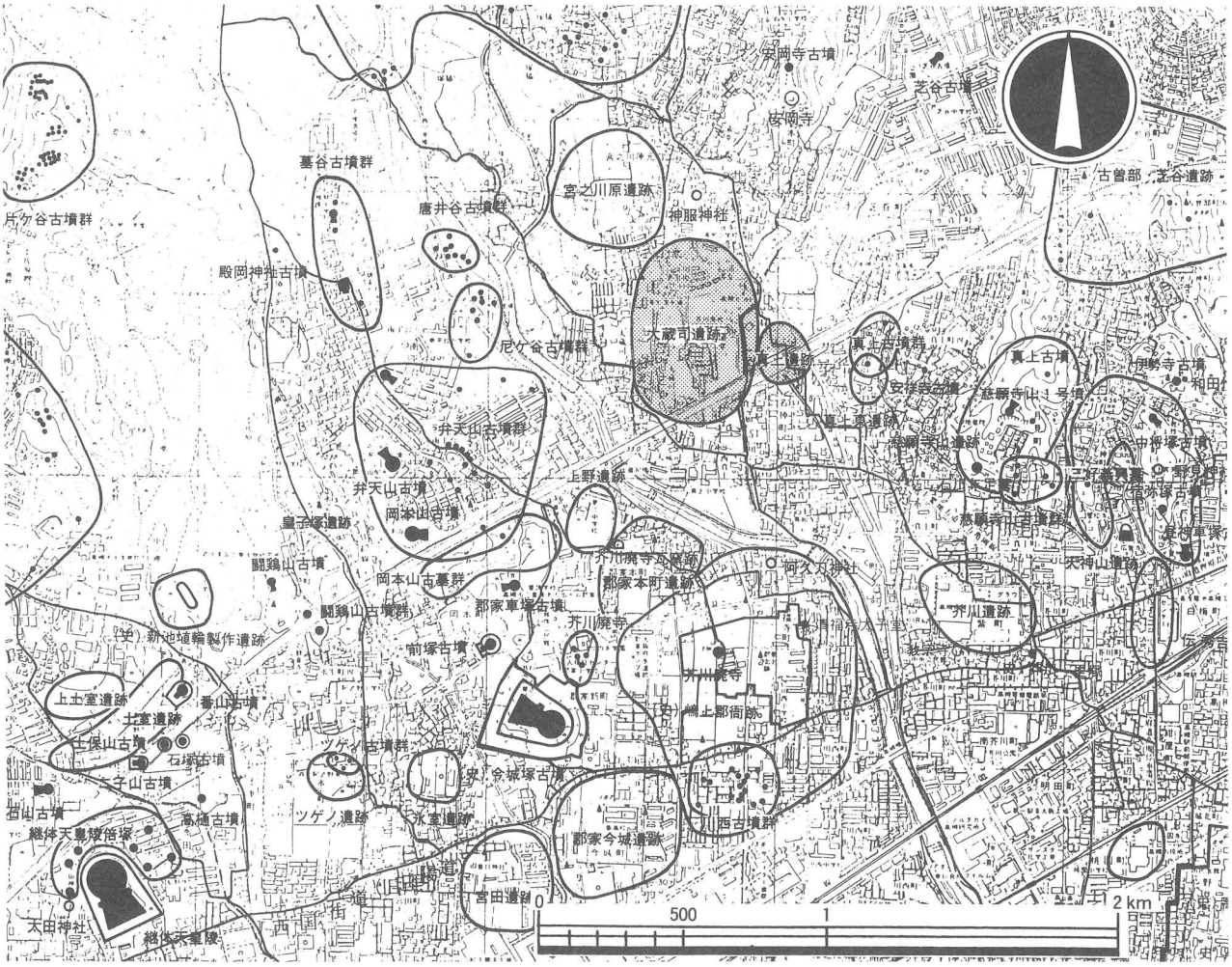


図２　大蔵司遺跡と真上遺跡の周辺にある遺跡（『高槻市文化財マップ』平成５年高槻市教育委員会に一部加筆）

高槻市の縄文時代の集落遺跡の最古例としてあげることができる。

弥生時代の遺跡

高槻市を含む三島地方に本格的な弥生文化が到来したといえるのは、安満遺跡と、茨木市東奈良遺跡[3]に、農耕集落が成立した時からである。三島地方で弥生土器の編年には、前期から後期まで続く安満遺跡の出土土器が標式となっている[4]。大蔵司遺跡では、前期から中期にかけての集落跡が確認されている。大蔵司・真上に近い遺跡に限っても、津之江南遺跡（前期・後期）、上田部遺跡（前期～後期）、郡家川西遺跡（前期～後期）、天神山遺跡（中期、銅鐸出土）、古曽部・芝谷遺跡（後期の高地性集落）がある。弥生時代前期には安満遺跡で集落が出現し、大蔵司遺跡でも前期後半には集落が現われる。これ以降は集落が大蔵司の東側に移っており、中期には天神山遺跡[5]が現われ、後期には高地性集落の古曽部・芝谷遺跡[6]が営まれる。

古墳時代の遺跡

三島地方では前期から後期まで約350基の古墳が確認されている。各時期ごとにみると、前期の古墳群には弁天山古墳群[7]がある。それらは郡家川西遺跡の集落を基盤としている首長墓といわれる。弁天山古墳群と郡家車塚古墳・前塚古墳は前期～中期の前半にかけて、一連の首長系譜を追うことのできるものである。

中期の古墳群には墓谷古墳群や尼ケ谷古墳群があり、これらの古墳群は宮之川原遺跡や大蔵司遺跡の集落を基盤にしているものである。真上１号墳と２号墳（消滅）もこの時期から後期にかけてのものと推定できる[8]。この時期には茨木市に太田茶臼山古墳（現在の継体天皇陵）が築造される。この時期は新池遺跡で埴輪窯の操業を開始しており、後期中葉まで続いている[9]。

続く後期に入ると、今城塚古墳が築造される前後には、昼神車塚古墳と南塚古墳が造られている。また、大蔵司には７基の横穴式石室を持つ古墳群が存在したが、これらもすでに消滅しており詳細は不明な点が多い[10]。大蔵司・真上遺跡周辺に限ってみると、この時代には大蔵司の北側に中期の宮之川原遺跡が見られる。この宮之川原遺跡や大蔵司遺跡に対応して墓谷古墳群や尼ケ谷古墳群が造営されている。

飛鳥時代の遺跡

ここでは飛鳥時代を、６世紀末から８世紀前半の奈良遷都までとする。この時期の遺跡は、平安時代までつづく芥川廃寺や芥川廃寺瓦窯跡がある。大蔵司・真上から東へ約6.5㎞には調査会が調査した梶原瓦窯跡があり、この時期に遡ることが明らかにされた。

奈良時代の遺跡

大蔵司遺跡内で溝から祭祀を想定させる人形や斎串、木簡等が出土しており、その他には、掘立柱建物や倉で構成される集落跡が確認されている。このほか奈良時代の遺跡には嶋上郡衙跡がある。これは官衙跡であり、古代山陽道と官衙のあり方などが解明されている[11]。石川年足

墓からは年代を確定できる墓誌が出土している[12]。岡本山古墓群では火葬墓が検出されている[13]。

奈良時代では地方官衙として、大蔵司・真上の南側に嶋上郡衙が設けられる。この時期には条里制が施行されている。大蔵司には六ノ坪という条里施行を示す小字名があるが、その周辺は正方向の条里地割りと整合しない地割りである。条里制の施行範囲については、再検討が必要といえるだろう。また、大蔵司遺跡の溝から人形、斎串、木簡といった祭祀に関係したことを知る遺物の出土があり[14]、大いに注目されている。

平安時代以降の遺跡

平安時代の集落は郡家今城遺跡・上田部遺跡・土室遺跡で確認されている。

鎌倉時代ではツゲノ遺跡[15]や芥川遺跡がある。宮田遺跡は、中世集落の全容を明らかにした[16]。

次に大蔵司遺跡内で行なわれた過去の調査成果をもとにして歴史的な環境について考えてみたい。表１には過去に行なわれた調査の成果をまとめた。それぞれの調査地点を図３に示した。図３の内の各アルファベット記号は、表１のそれらと照合させておいた。なお、図３に示す遺跡の分布範囲は『高槻市文化財マップ』（平成５年高槻市教育委員会）に示す大蔵司・真上遺跡の範囲である。

昭和52年以来調査が実施されているが、調査面積も４㎡から15000㎡以上まで様々であるが、約半分の調査地で弥生時代から中世までの各時期の遺構を確認できている。遺構の有無は段丘低位面か、扇状地にあるのかの違いであろうか。図４には主な遺構を示した。

遺構のうち建物や住居を集落の展開としてみれば、図３に示したＫ、Ｒ、Ｔの調査区を中心とした場所に弥生時代後期（調査地点Ｒ）、古墳時代中期（調査地点Ｒ）、奈良時代中葉（調査地点Ｔ）といった建物がある。このことから図４に示したうち西側の半分は、生活に適した平坦面があったものと想像できる。弥生時代から奈良時代にかけては調査地点Ｒから、やや東寄りの調査地点Ｔへと集落は広がっていったのであろうか。

平安時代の遺物が多数出土している柱穴や土壙が数多く確認された調査地点Ｋでは、掘建柱建物としては扱っていないものの[17]、建物を想定させるのに十分な遺構の集中が見られる。ここが平安時代の集落の中心に近い場所と仮定し、以下のように考えることができないだろうか。

弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代の前期・後期に遺跡分布範囲の南西寄りにあった集落の中心を、平安時代ではそこからやや北寄りに移動させ、西半中央部分に集落の中心を置き生活を営んでいたのだと理解できようか。大蔵司遺跡の分布範囲西半とは、洪積段丘の上であり地盤の比較的安定した場所であったはずで、そのような場所であれば集落の展開も十分に考えられよう。

なお、真上遺跡はこれまで発掘調査の事例がないので、ここでは遺跡が周知されるに至った

表１　大蔵司遺跡で過去に行なわれた調査の一覧表

番号	場所（図３の）	調査年	調査地面積 m²（トレンチ面積）	堆積包含層と出土遺物	検出遺構と出土遺物	地山層の状態	備考（報告書）
1	図３のQ	S 52(1977)年	343m²	茶褐色(砂質)土層（弥生時代の中～後期の土器・古墳時代の中期の土師器・奈良時代の土師器、黒色土器、須恵器）	なし	淡茶褐色砂礫層	『昭和52年度高槻市文化財年報』昭和53年　高槻市教育委員会
2	〃 R	S 53(1978)年	2591m²	暗茶灰色（弥生時代後期・古墳時代前期・奈良時代）	弥生後期　竪穴住居×３棟 井戸　×１基 溝　×１条 （弥生土器多数） 古墳時代　竪穴住居×２棟 溝　（埴輪） 奈良時代　掘立柱建物×２棟 土壙	黄茶褐色土・灰色バラス	『昭和53・54・55年度高槻市文化財年報』昭和56年12月　高槻市教育委員会
3	〃 P	S 53(1978)年	759m²	青灰色砂礫（土師器）	なし	砂礫層のまま	
4	〃 D	S 53(1978)年	1650m² （トレンチ　２×20m）×４	なし 芥川の氾濫原堆積（瓦器・土師器・須恵器）	なし	黄灰褐色砂礫土層	
5	〃 U	S 55(1980)年	2500m²	不明 （弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器）	遺構は体育館予定地から検出 中世　水田と足跡(人と牛) 杭列 溝×３条 平安　溝×２条 柵×２列 奈良　溝×２条と護岸 （溝から木簡×３点）	砂礫層か	
6	〃 G	S 55(1980)年	841m² （トレンチ 2.5×８m）×１ （トレンチ 1.5×17m）×１	古墳時代の包含層（布留期の土師器甕・須恵器） 中世の包含層	中世　竪穴 落込み 旧河道 溝×１条 井戸×１基 （瓦器・土師器皿）	砂礫層か	同上と 『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要・５』高槻市文化財調査概要Ⅴ 1981・３　高槻市教育委員会
7	〃 C	S 55(1980)年	876m² （トレンチ 5.5×2.5m）×１	なし	なし	青灰色粘質土層	
8	〃 A	S 56(1981)年	（トレンチ　６×10m）×１	暗灰色(整地土)層（奈良時代の須恵器・土師器）	弥生後期　土壙×２基	暗灰色砂礫層と暗茶褐色土層	『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要・６』高槻市文化財調査概要Ⅵ 1982　高槻市教育委員会
9	〃 B	S 56(1981)年	15000m²	不明（弥生時代後期の壺甕・高坏と古墳時代の土師器・須恵器）	近世　暗渠(江戸時代前期の軒丸瓦・平瓦) 中世　土壙×３基 落込み×２か所 弥生時代から古墳時代 溝×４条（下層から弥生時代後期・上層から古墳時代前期の土器）	砂礫層か	
10	〃 F	S 59(1984)年	（トレンチ 約15×30m）	暗褐色土層（須恵器・土師器）	包含層を切り込む谷状の落込み	暗灰色砂礫層	『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要・９』高槻市文化財調査概要Ⅸ 1985　高槻市教育委員会
11	〃 J	S 59(1984)年	（トレンチ 約２×２m）	茶褐色砂礫層(古墳時代の土師器)	なし	暗灰色砂礫層	
12	〃 H	S 59(1984)年	（トレンチ 約２×２m）	暗灰色土（遺物は出土せず） 茶灰色土（遺物は出土せず）	なし	暗灰色砂礫層	
13	〃 K	S 59(1984)年	（トレンチ 約14×15.5m）	黄褐色土層（上面が遺構面で、包含遺物には、弥生時代後期の土器・古墳時代の土師器、須恵器・奈良時代の土師器、須恵器・投網の錘・瓦がある）	柱穴×多数(平安時代の土師器) 土壙×６基（古墳時代の土師器、須恵器・平安時代の土師器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器）	黄灰色砂質土層	
14	〃 I	S 59(1984)年	（トレンチ 約２×10m）	灰褐色土層（土師器）	なし	黄灰色土層	
15	〃 L	H元(1989)年	525m²	茶褐色土層（古墳時代の土師器）	なし	暗灰色砂礫層	『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要・13』高槻市文化財調査概要XIII 高槻市教育委員会
16	〃 T	H元(1989)年	（トレンチ 約43×17m）×１ （トレンチ 約20×7.5m）×１	灰褐色粘土層（弥生土器、石斧・奈良時代の土師器、須恵器） 暗褐色礫土層（弥生時代後期～古墳時代）	掘立柱建物×３棟（奈良時代の土師器、錘） 土壙×１基（奈良時代の土師器、須恵器）	黄灰色砂礫層 暗灰色礫土層	
17	〃 M	H２(1990)年	約225m²	茶褐色土層(古墳時代～奈良時代)	なし	灰～黄褐色砂礫層	『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要・14』高槻市文化財調査概要XIV 高槻市教育委員会
18	〃 N	H２(1990)年	（トレンチ 約２×２m）	暗灰～褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土（遺物は出土せず）	なし	暗黄褐色礫層	
19	〃 N	H２(1990)年	（トレンチ 約２×２m）	黄茶褐色土（遺物は出土せず）	なし	暗灰色砂礫層	
20	〃 S	H２(1990)年	（トレンチ 11×８m）	灰色砂礫層（弥生土器、土師器、須恵器、円筒埴輪）芥川の氾濫原堆積	なし	暗灰色砂礫層	『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要・15』高槻市文化財調査概要XV 高槻市教育委員会
21	〃 O	H３(1991)年	（トレンチ ２×2.5m）	暗灰褐色粘土（古墳時代前期の土師器）	なし	暗灰褐色礫土層	
22	〃 E	H７(1996)年	約５m²	旧耕作土 脆弱な地盤	調査打切り		『嶋上遺跡郡21』高槻市文化財概要XIII　高槻市教育委員会

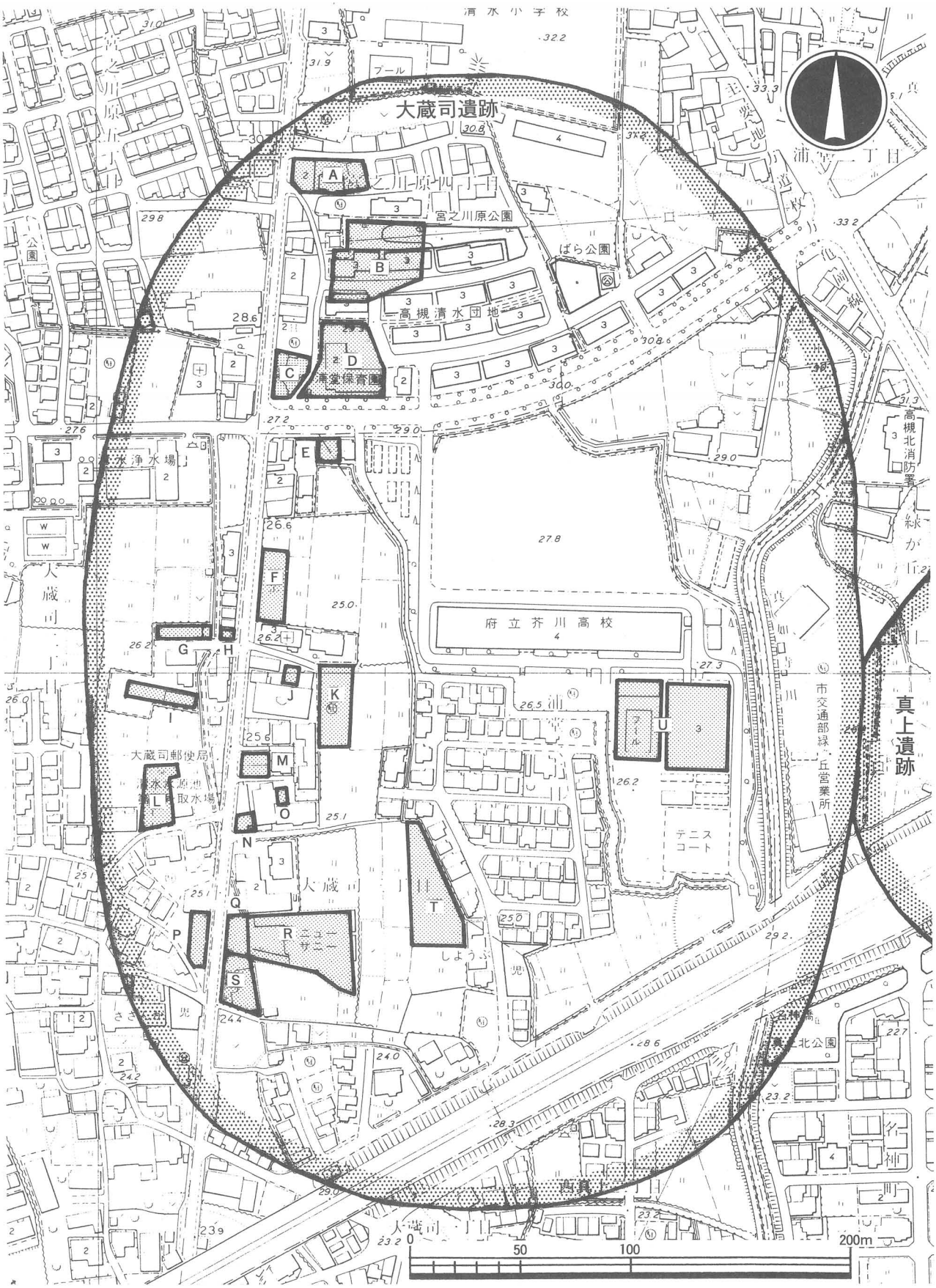


図３　大蔵司遺跡で過去に調査対象地となった場所

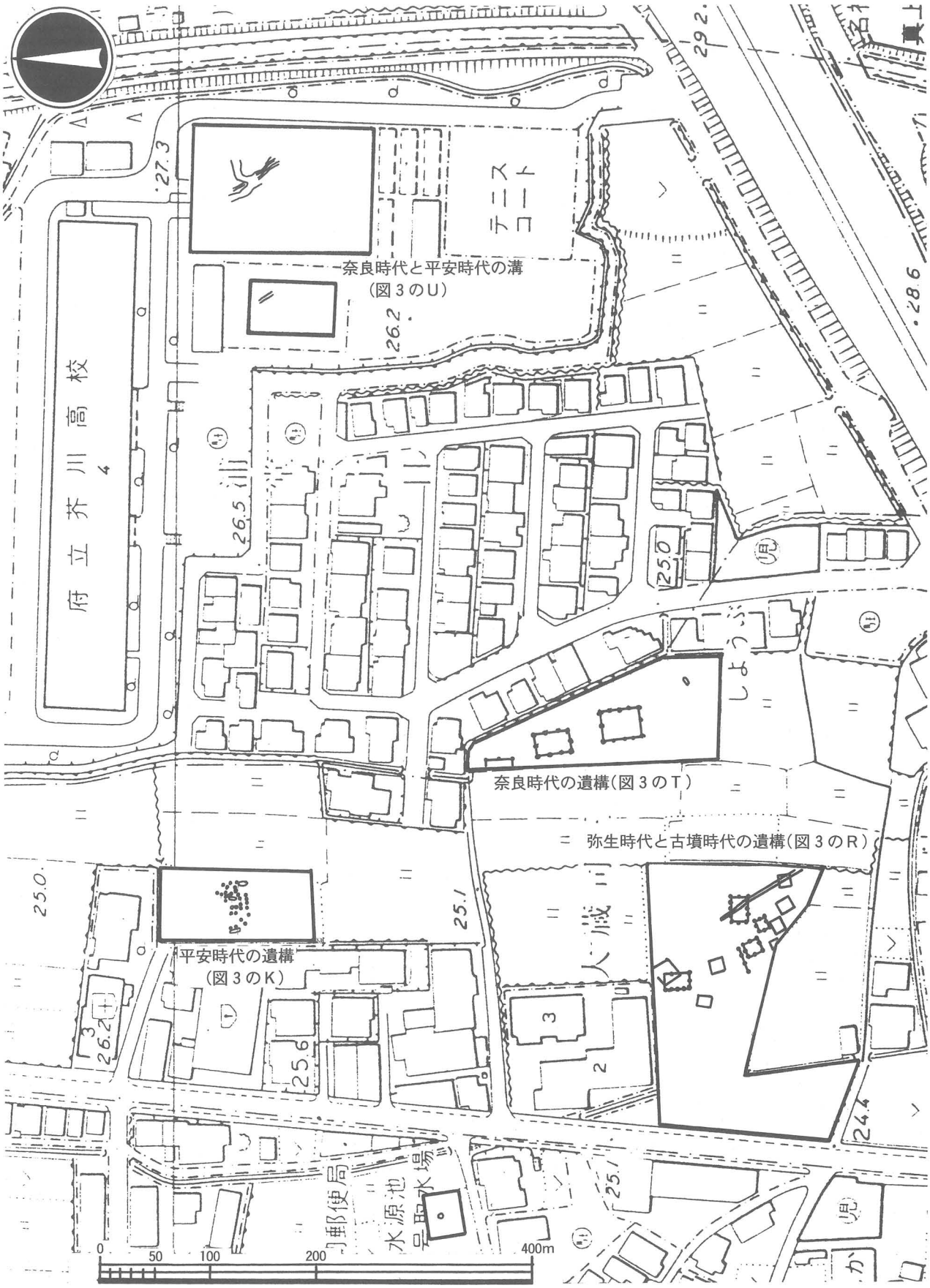


図４　大蔵司遺跡のこれまでの調査で確認された遺構

経緯を以下に述べる。

真上遺跡が未知であった昭和30年代に、名神高速道路の建設工事現場を掘削していた所から、弥生土器が表面採集された。これを契機とし、真上遺跡が大阪府文化財地名表に記載され、遺跡分布図も作成されて周知徹底がはかられてきたのである。土器を採集した原口正三氏に伺うと、採集地点は名神真上高架橋の基礎工事部分である可能性が高いように考えられる。[18)]

真上には中世に御家人真上氏が下司を努める平等院領真上庄と、鎌倉幕府の仏事に関わる僧侶が地頭を努める高野山金剛三昧院領小真上庄があったことがわかっている。[19)]

註）

1．大船孝弘『郡家今城遺跡発掘調査報告書－旧石器時代遺構の調査－Ⅰ・Ⅱ』高槻市文化財調査報告書第11冊　1978年３月　高槻市教育委員会
2．橋本久和『芥川遺跡発掘調査報告書－縄文・弥生集落跡の調査－』高槻市文化財調査報告書第18冊　平成７年１月31日　高槻市教育委員会
3．井上直樹他『東奈良発掘調査概報Ⅰ』1979年６月　東奈良遺跡調査会
奥井哲秀他『東奈良発掘調査概報Ⅱ』1981年２月　東奈良遺跡調査会
4．森田克行「３．各地域の様式　編年７．摂津地域」
寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅱ』1990年11月26日　木耳社
で摂津における編年をあらわしているので本書の弥生土器の年代も同書を参照している。
5．原口正三他『高槻市史』第六巻考古編　1973年　高槻市史編さん委員会　30～34頁参照
6．宮崎康雄『古曽部・芝谷遺跡－高地性集落跡の調査－』平成８年３月27日　高槻市教育委員会
7．堅田直他『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第17輯　1976　高槻市教育委員会
8．　『昭和47・48年度高槻市文化財年報』昭和49年３月　高槻市教育委員会
9．森田克行『新池 新池埴輪製作跡発掘調査報告書』平成５年３月　高槻市教育委員会
10．　『大阪府文化財地名表』1990年３月　大阪府教育委員会　29頁参照
11．　『遺跡ガイド11　嶋上郡衙跡』1993年２月　高槻市教育委員会
12．５と同書　145・146頁参照
13．５と同書　147・148頁参照
14．森田克行『大蔵司遺跡発掘調査概要－浦堂地区Ｃ地点の調査－』1981年１月　大阪府教育委員会
15．枡本　哲『ツゲノ遺跡発掘調査概報Ⅰ』1982年３月　大阪府教育委員会
『ツゲノ遺跡発掘調査概報Ⅱ』1988年12月　大阪府教育委員会
16．５と同書　148～155頁参照
17．橋本久和「Ⅶ大蔵司遺跡 19大蔵司遺跡の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要９』高槻市文化財調査概要Ⅸ　1985年　高槻市教育委員会　20～23頁参照
18．高槻市立埋蔵文化財調査センターの森田克行氏にお願いして原口正三氏に聞いて頂き現地を比定した。
19．三浦圭一「Ⅳ中世の高槻第二章南北朝内乱期の高槻 第一節北摂地方の戦乱」『高槻市史』第一巻本編Ⅰ　昭和52年２月25日　高槻市史編さん委員会　525～527頁参照。

第II章　調査の契機と経過

第１節　調査の契機

名神高速道路は昭和38年に開通し、日本初の高速自動車専用道路となった。近年の著しい交通量の増加に対応するために、京都南インターチェンジから吹田インターチェンジまでの区間で、車線を片側２車線から片側３車線へ拡げる拡幅事業が実施されることとなった。

昭和57年の拡幅事業計画決定を受け、名神高速道路拡幅事業地内の文化財の取り扱いについて協議がなされた。その結果、文化庁と関係府県教育委員会と日本道路公団との間で、文化財の保存に対しては十分に配慮する必要があるとして合意されるに至ったのである。この経緯をふまえて大阪府域の区間である天王山トンネルから吹田インターチェンジまでの約19.6㎞の部分については、大阪府教育委員会と当該市町の教育委員会と日本道路公団大阪建設局の間で遺跡の取り扱いに関しての協議が重ねられた。その一方では現地の踏査や報告書資料、文献史料を用いた予備調査をもとにして、約40か所の埋蔵文化財包蔵地を確認した。それまでに重ねられてきた大阪府教育委員会と当該市町の教育委員会と日本道路公団大阪建設局の三者による協議において、これらの埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては高速道路の拡幅事業の着工に先立って発掘調査を実施することで合意に至った。

発掘調査を計画する時に問題となったことは、これらの遺跡が大阪府下の２市１町にわたって存在していることや、調査の規模や期間が多大なものになることであった。また、発掘調査の実施にあたっても調査方法や調査費用の算出方法に統一的な対応が必要であり、保存協議にも同様の対応が求められると考えられた。

このため、大阪府教育委員会と島本町教育委員会、高槻市教育委員会、茨木市教育委員会の四者間で協議した結果、府と２市１町の共同で調査を行うことが基本方針とされ、市及び町から専門職員を派遣して調査会を設立し、発掘調査を実施するという合意がなされた。このような経過をたどって「名神高速道路内遺跡調査会」が平成２年11月16日に発足したのである。

第２節　調査の経過（表２・３）

大阪府下の名神高速道路拡幅工事は、渋滞が慢性的に発生する場所となっているトンネル部分[1)]や、高槻バス停留所付近が優先的に着手されることとなった[2)]。名神高速道路内遺跡調査会は平成３年の２月からこれらの発掘調査にとりかかり、以降各遺跡の調査を実施してきた。

平成５年度の発掘調査計画に真上遺跡（大阪府高槻市西真上、名神町、緑が丘、大蔵司に所在している）発掘が計画された。現地での調査はこれ以降、平成７年度まで３か年にわたって

実施された。

調査時に設定した調査区の位置は図５のとおりである。現地での調査期間中は、作業現場管理方法の便宜上から、すべての地区を真上遺跡として地区名を設定してきたため、大蔵司遺跡内に位置する調査地区にも一連の番号がついている。これらを利用して工事引き渡し調整を行なってきたのであるが[3)]、本報告書では、本来の遺跡分布に従って両遺跡を分けることとし、調査地区名を変更した。よって新旧の調査地区名は表２のとおりである。また、各調査地区の面積と調査年次、調査期間は表３にまとめた。

調査では図面作成の時間を短縮する目的で、航空写真測量を実施した。撮影回数は３年間で合計10回行っており、平成５年度に６回、６年度に２回、７年度に２回それぞれ実施した。

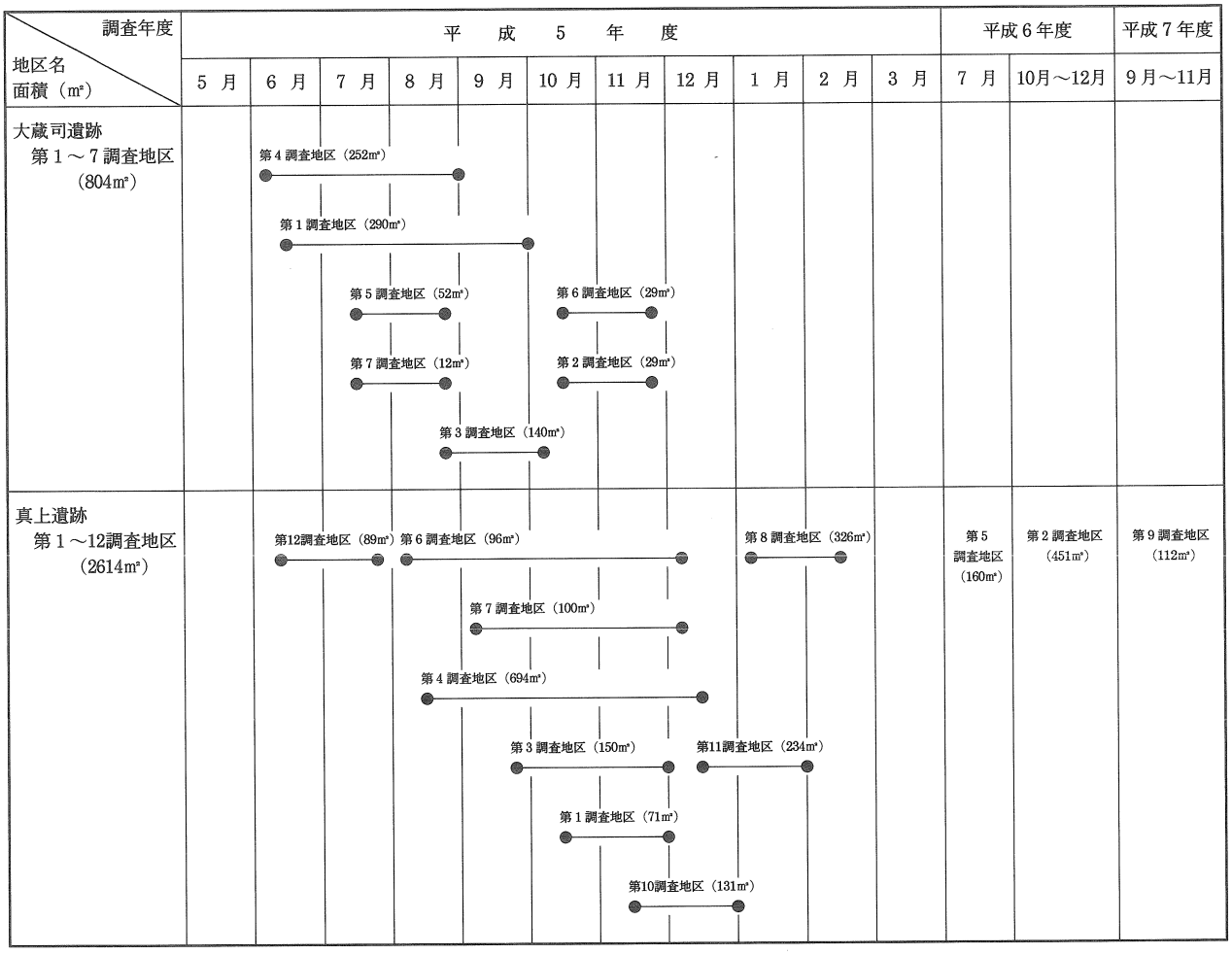
大蔵司遺跡・真上遺跡の周辺は市街地となっている。当調査会がこれまで発掘調査を実施してきた調査地と比較すると、交通量や通行者数も増加しており、調査地区に隣接して民家が余地なく建つという状況となった。加えて、今回調査対象となった大蔵司遺跡内では、著しい湧水にみまわれることもあり、これにより調査の中断や打切りを余儀なくされた[4)]。その経験をふまえて、調査地区を矢板鋼材で囲い、止水・土留め工を行い調査を実施した。

表２　調査時の地区名と報告書用の地区名の対照表

遺跡名	旧地区名	新規地区名	調査年度
大蔵司	14Ｅ地区	第１地区	平成５年度
	14－２地区	第２地区（矢板）	平成５年度
	14－１地区	第３地区	平成５年度
	９地区	第４地区	平成５年度
	10地区	第５地区	平成５年度
	12地区	第６地区（矢板）	平成５年度
	13地区	第７地区	平成５年度

遺跡名	旧地区名	新規地区名	調査年度
真　上	１地区	第１地区	平成５年度
	11地区（海上火災）	第２地区	平成６年度
	２地区	第３地区	平成５年度
	2-1・3・3-1・3W地区	第４地区	平成５年度
	３地区（立会）	第５地区	平成６年度
	４－１地区	第６地区	平成５年度
	４－２地区	第７地区	平成５年度
	18地区	第８地区	平成５年度
	95－１（ポーラ）	第９地区	平成７年度
	17地区	第10地区	平成５年度
	16地区	第11地区	平成５年度
	15地区	第12地区	平成５年度

表３　調査期間と面積一覧表



註）

1．天王山トンネル・梶原第１トンネル・梶原第２トンネル出入路の約3.6㎞区間である。

2．506.3～506.4㎞ポストを中心とした約２㎞区間であり、先のトンネル区間と連続する渋滞多発区間であった。

3．遺跡発掘調査終了後に拡幅工事着工可能な範囲を明確にした。

4．２インチ型水中ポンプ４台稼働による24時間排水が必要な調査地区があった。

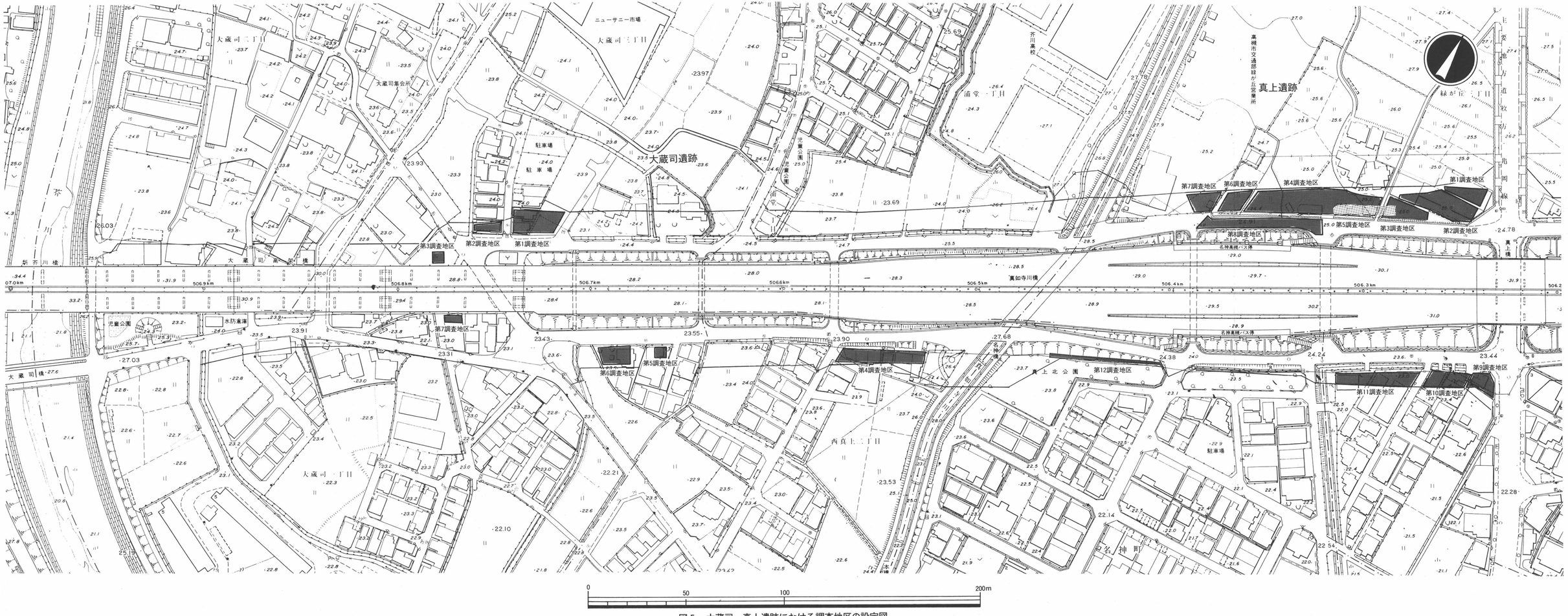


図5　大蔵司・真上遺跡における調査地区の設定図

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　大蔵司遺跡の調査（図５～11、図版１・２・13・14）

大蔵司遺跡の調査地区は第１～７地区に分れている。名神高速道路の北側に第１～３の調査地区を、南側に第４～７の調査地区を設定した。それぞれの調査地区ごとに、発掘調査によって得られた成果を層序、遺構、遺物に分け述べていく。なお、この節の説明で利用する各図面の作成された調査地区を示すために図６を付した。

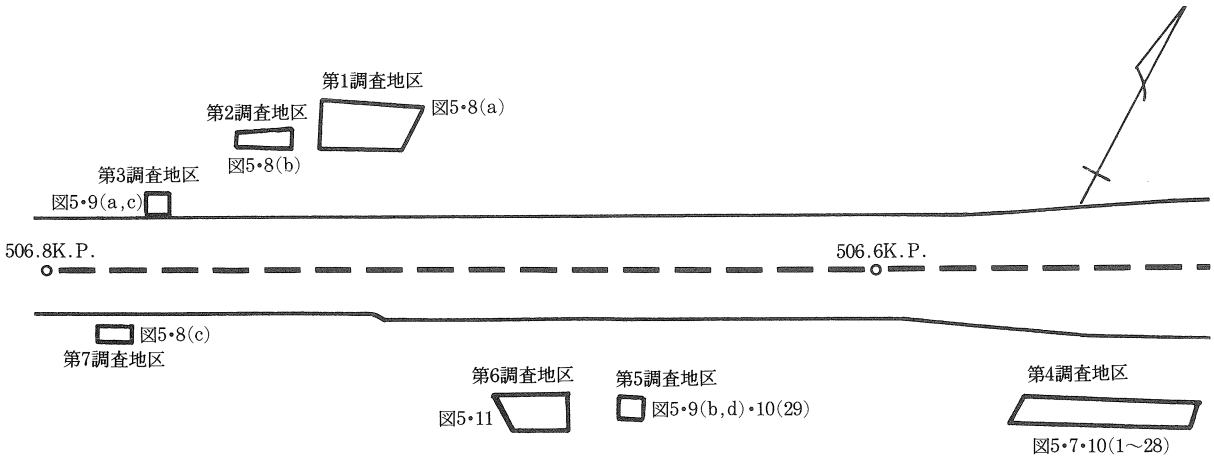


図６　第Ⅲ章の第１節で使用する挿図索引

１　大蔵司遺跡第４調査地区（図５・７・10－１～28、図版２・13・14）

層　序　大蔵司遺跡における基本層序を、第４調査地区の堆積層序を利用して説明する。これらを基本層序とし、その他の調査地区の層序の説明にも応用する。

土層堆積は上から順に盛土、耕作土（Ⅰａ層）、床土（Ⅰｂ層）、灰褐色砂混じり粘土（Ⅱ層）、灰色粘土（Ⅲ層）、青灰色砂（Ⅳ層・洪水層[1]）、暗灰色粘土（Ⅴ層）、青灰色砂礫混じり粘土（Ⅵ層）である。大蔵司遺跡では褐色砂礫（Ⅶ層）が地山層であるが、この地区では確認していない。Ⅵ層より下に位置しているものと考えられるのだが、調査では雨水の被害が周辺の民家に及ぶ危険があり、調査を打ち切ったため不明である。土層図を図７に示した。

遺　構　図７には水田耕作面の平面図を示した。検出面は暗灰色粘土層の上面で、南北方向の２条の畦を確認した。これらは水田耕作に伴うものと考えられる。調査地区の中央付近で約0.2mの段差を設け、西側の水田面が高く作られていた。この面からは、多数の足跡を確認している。足跡には人間のものと、牛と考えられる動物のものが同一方向に移動している状況を確認できるものが含まれていた。図版２の下左には人間の足跡（右足）を、右には動物の足跡を掲載した。なお、人間の足跡の大きさは指先から踵まで残るもので約23㎝を測る。

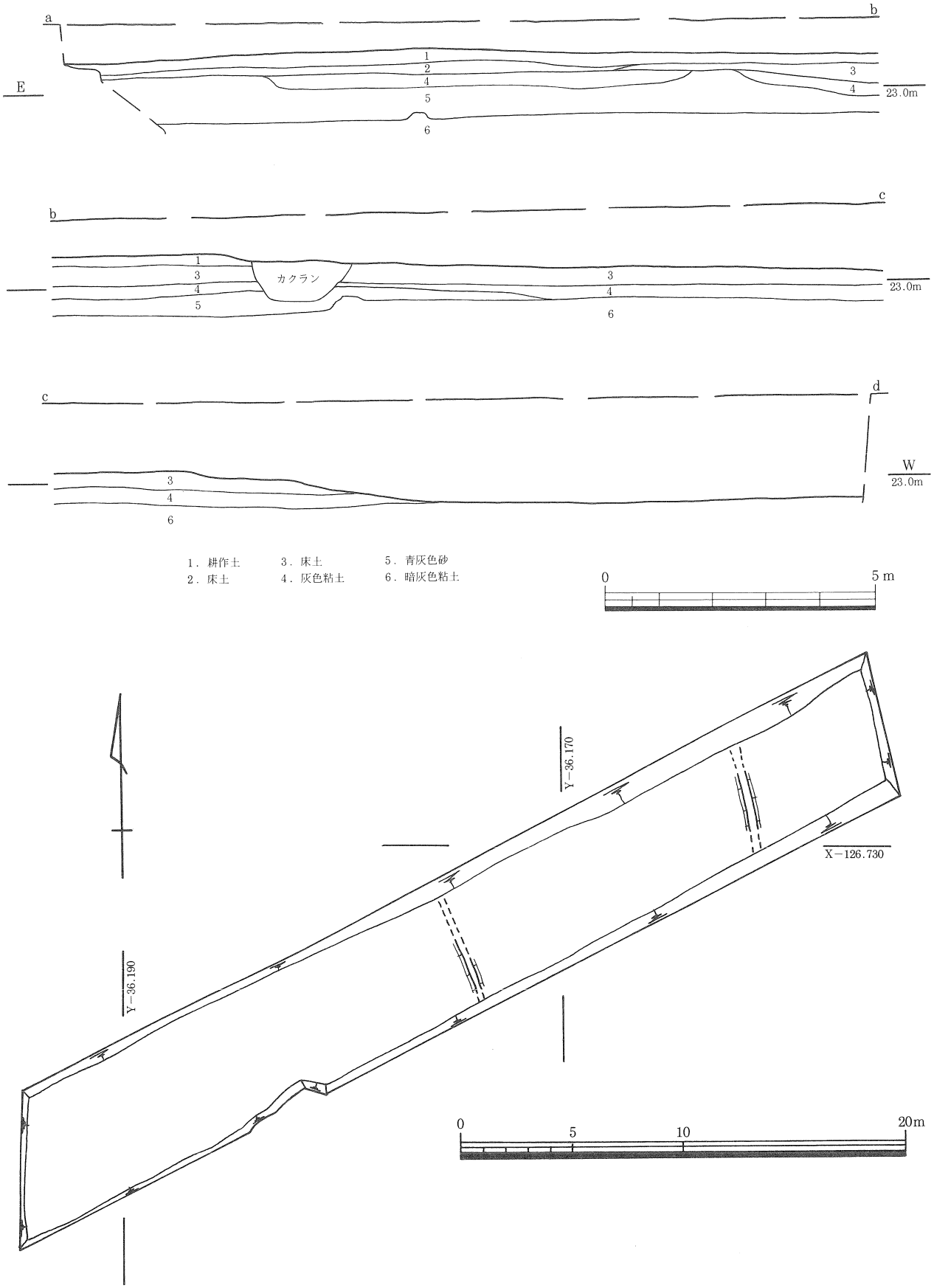


図 7　大蔵司遺跡第 4 調査地区の壁面図と平面図

遺　物（図10－１～28）　この調査地区から出土した遺物は図10－１～28に示した。図示した遺物のうち１～13は灰色粘土から、14～24は暗灰色粘土から、25～28は青灰色砂ないしは暗灰色粘土からそれぞれ出土した。

１は弥生時代後期の甕である。底部の破片で外面にはタタキ目が、内面にはヘラケズリがそれぞれ施されている。２～10は古墳時代の土師器の高坏である。２～４が坏部で、４の外面にハケ目、内面にナデが認められる以外は、磨耗により調整は不明である。５～10は脚部で、いずれの表面も磨耗しているが、６・７には円形の透孔があけられている。11・12は鎌倉時代後期の土師器の皿である。11は平らな底部に外上方に直線的にたちあがる口縁部をもち、12は底部から口縁部へかけて緩やかなカーブを有する形態のものである。13は古墳時代と考える土師器の甑の底部である。

14～17は古墳時代の須恵器の蓋で、18は須恵器の坏身である。いずれも焼成堅緻で暗青灰色系の色調を呈している。蓋の口径が小型化しており、端部も凹面がはっきりしているという特徴から陶邑編年Ｉ型式４～５段階である。19は須恵器の坏の底部で、高台が底部外面の端付近に付く特徴から奈良時代後期のものである。20は古墳時代の須恵器の無蓋高坏で、陶邑編年Ｉ型式４～５段階のものである。21は同時期の器台であろうか。22～24は瓦器の椀で内面のヘラ磨きが粗雑なものとなっているので13世紀のものである。

25は２と同形態の古墳時代の土師器の高坏である。26は15と同様の古墳時代の須恵器の蓋であり、陶邑編年Ｉ型式４～５段階である。27・28は22～24と同様の瓦器の椀である。

２　大蔵司遺跡第１調査地区（図５・８－ａ、図版１）

層　序　土層の堆積状況を図８－ａに示した。この調査地区の堆積は上から順に盛土、耕作土、砂礫（Ⅶ層）である。この砂礫層の砂は褐色系の色調であり、礫は比較的円礫が多くみられ、握り拳大の礫が主体となっている。砂礫層から下については、著しい湧水のため調査は打ち切ることになった。

遺　構　砂礫層の上面で遺構精査作業をしたが、遺構は確認できなかった。

遺　物　出土しなかった。

３　大蔵司遺跡第２調査地区（図５・８－ｂ）

層　序　土層の堆積状況を図８－ｂに示した。堆積は上から順に盛土、耕作土（Ｉａ層）、床土（Ｉｂ層）、褐色砂礫混じりシルト（II層）、褐色砂礫（Ⅶ層）である。砂礫層には円礫が多く、握り拳大の礫が主体である。この層は第１調査地区と同じ層で、以下は著しい湧水のために調査不可能であった。

遺　構　堆積層中の砂礫混じりシルト層の上面と、砂礫層の上面で遺構精査作業を行なったが、遺構は確認できなかった。

遺　物　出土しなかった。

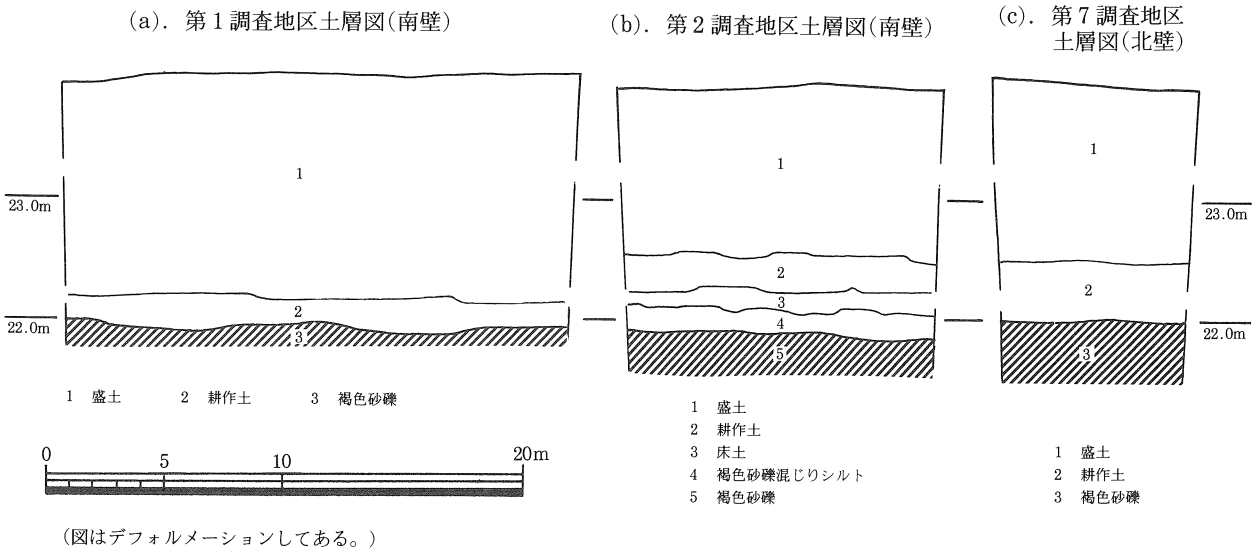


図８　大蔵司遺跡の壁面図　（ａ）第１、（ｂ）第２、（ｃ）第７調査地区

４　大蔵司遺跡第３調査地区（図５・９－ａ，ｃ、図版１）

先の調査地区ならびに後に記述する複数の調査地区から、なんらかの止水作業をせずに調査を続行することは困難であると判断し、調査面積を５×５ｍの大きさに設定して、矢板鋼材による囲い込みを行ない調査を実施した。

層　序　土層の堆積状況を図９－ｃに示した。堆積は上から順に盛土、耕作土（Ⅰａ層）、床土（Ⅰｂ層）、暗灰色砂混じり粘土（Ⅲ層）、灰褐色砂礫（Ⅶ層）となっている。８の褐色の砂礫層より下は、いわゆる地山層であることが判明した。当該土層は、砂混じりシルト層と砂礫層の互層であり、このことから、河川氾濫原に堆積した砂礫層であると考えられる。

遺　構　盛土と耕作土層を除去した面で、南北の方向にのびる暗渠２条を確認している。図９－ａには暗渠の平面図を示した。２条ともほぼ同一の大きさで幅約0.7m、深さ0.25mである。西側の暗渠は、溝の両側面に長い丸太材を平行させて設置し、その上には縦割り状態で半裁した長さ約0.3mの丸太材で、溝の方向と直交させて蓋をして暗渠を構築していた。

東側の暗渠は、約0.3mの大きさの栗石を充填している。この栗石は所々で抜き取られていたので、東側の暗渠を廃棄して西側の暗渠を構築したものと考えている。いずれの暗渠からも遺物の出土はなかったので、年代の決め手を欠くが、耕作土層から近世の遺物が出土していることと層序からみて、近世以降のものと考えられる。

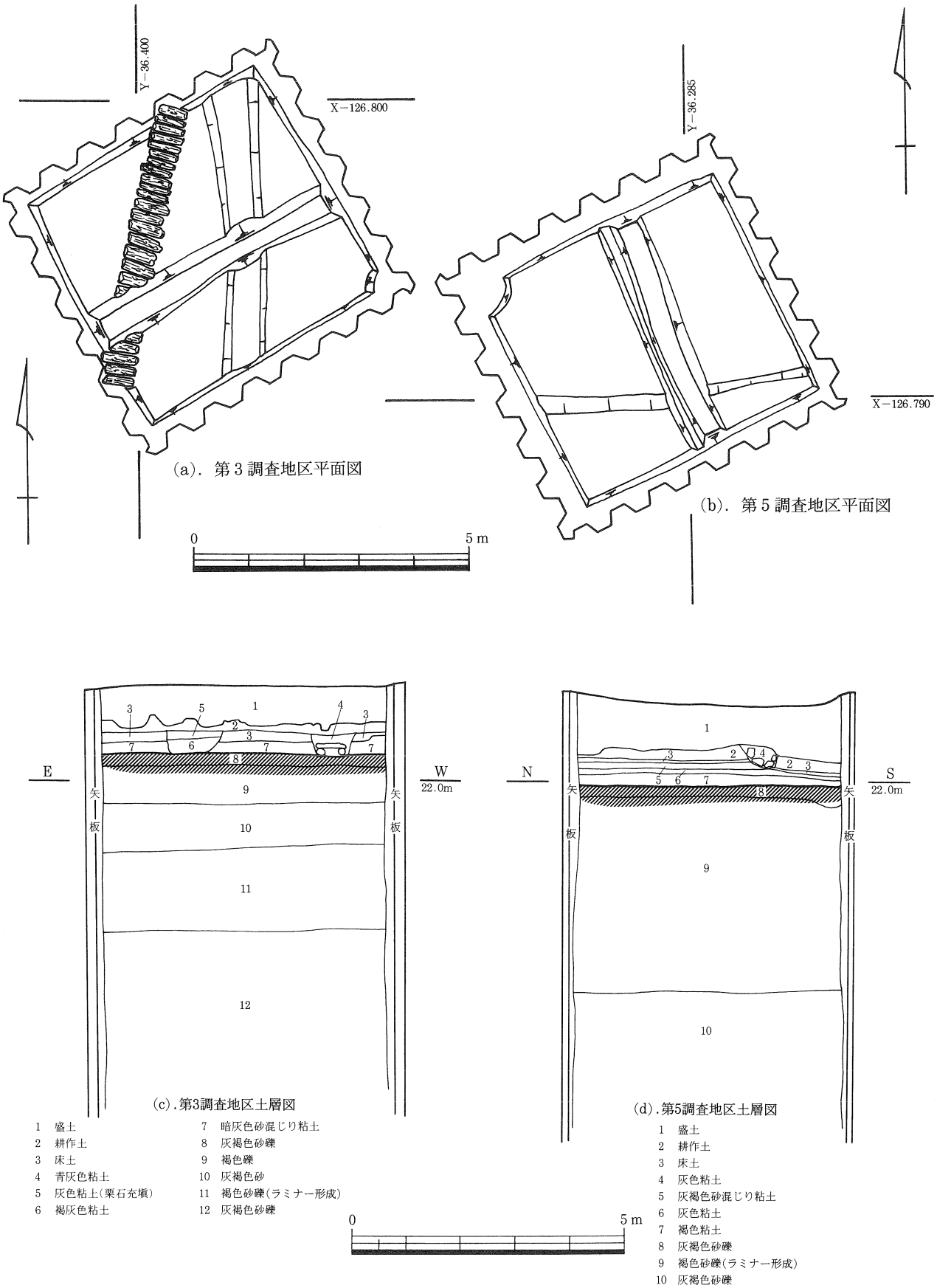


図9　大蔵司遺跡の平面図と土層図　（a，c）第3、（b，d）第5調査地区

遺　物　耕作土層からは近世の磁器片が出土している。

5　大蔵司遺跡第5調査地区（図5・9－b，d・10－29、図版1）

矢板鋼材による囲い込みを行なって、調査面積を5×5mの大きさにし、掘削作業にかかることにした。

層　序　土層の堆積は図9－dに示した。地山層は、砂混じりシルト層と砂礫層の互層である。大蔵司遺跡の東側を芥川、西側を真如寺川がそれぞれ限っているので、調査対象地の東側一帯に見られる砂礫層の堆積は、芥川とその支流である真如寺川が運んで形成した河川堆積物であると考えることができよう。

遺　構　耕作土層には段差約0.2mがあって、北側の耕作面が一段低い状態である。この段差の部分に東西方向の溝を確認した。溝の中には直径約0.3～0.6mの大きさの石が充填してあったので、暗渠と考えられる。図9－bには平面図を示した。

遺　物　灰褐色砂混じり粘土から、近世の施釉陶器片（図10－29）が出土した。

6　大蔵司遺跡第6調査地区（図5・11、図版1）

層　序　土層の堆積状況は図11に示した。上から順に宅地造成による盛土、耕作土（Ⅰa層）、床土（Ⅰb層）、褐色系の砂礫（Ⅶ層）となっている。この砂礫層が地山層となっており、地山層の状況は第1～5調査地区と同様の状況となっている。

遺　構　地山層の上面で畦を6条検出した。この内3条は北北西から南南東の方向に続くものであり、それらに直交する畦が3条ある。真上遺跡の第4・6調査地区で確認した近世の耕作面の畦と、これらの畦は明らかに別の方向性を示している。上面を覆う包含層の出土遺物から判断して、この耕作面は中世のものであると考えられよう。なお、この遺構面では、大蔵司遺跡第4調査地区で見られるような足跡は発見していない。

遺　物　出土した遺物は中世の瓦器や土師器であるが、いずれも細片である。

7　大蔵司遺跡第7調査地区（図8－c・図版1）

層　序　土層の堆積状況は図8－cに示した。上から順に盛土、耕作土（Ⅰa層）、褐色砂礫（Ⅶ層）である。砂礫層から著しく激しい湧水があった。

遺　構　地山層の褐色砂礫層の上面で精査したが、何も検出できなかった。

遺　物　耕作土（Ⅰa層）から、コンクリートが付着した須恵器の甕の破片が出土しているが、これは名神高速道路の高架橋[2)]工事の際の混入である。

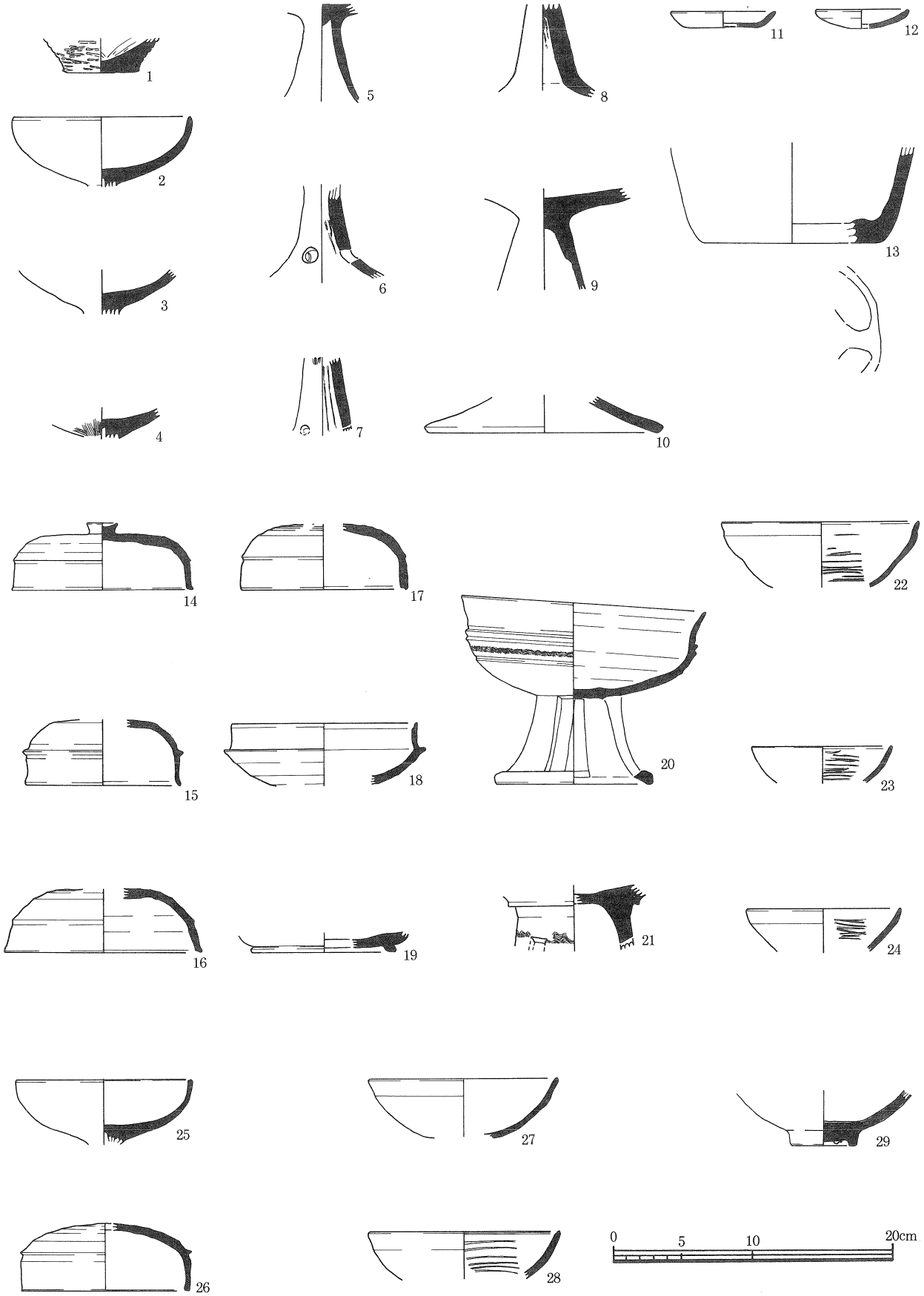


図10　大蔵司遺跡の出土遺物　（1～28）第4、（29）第5調査地区

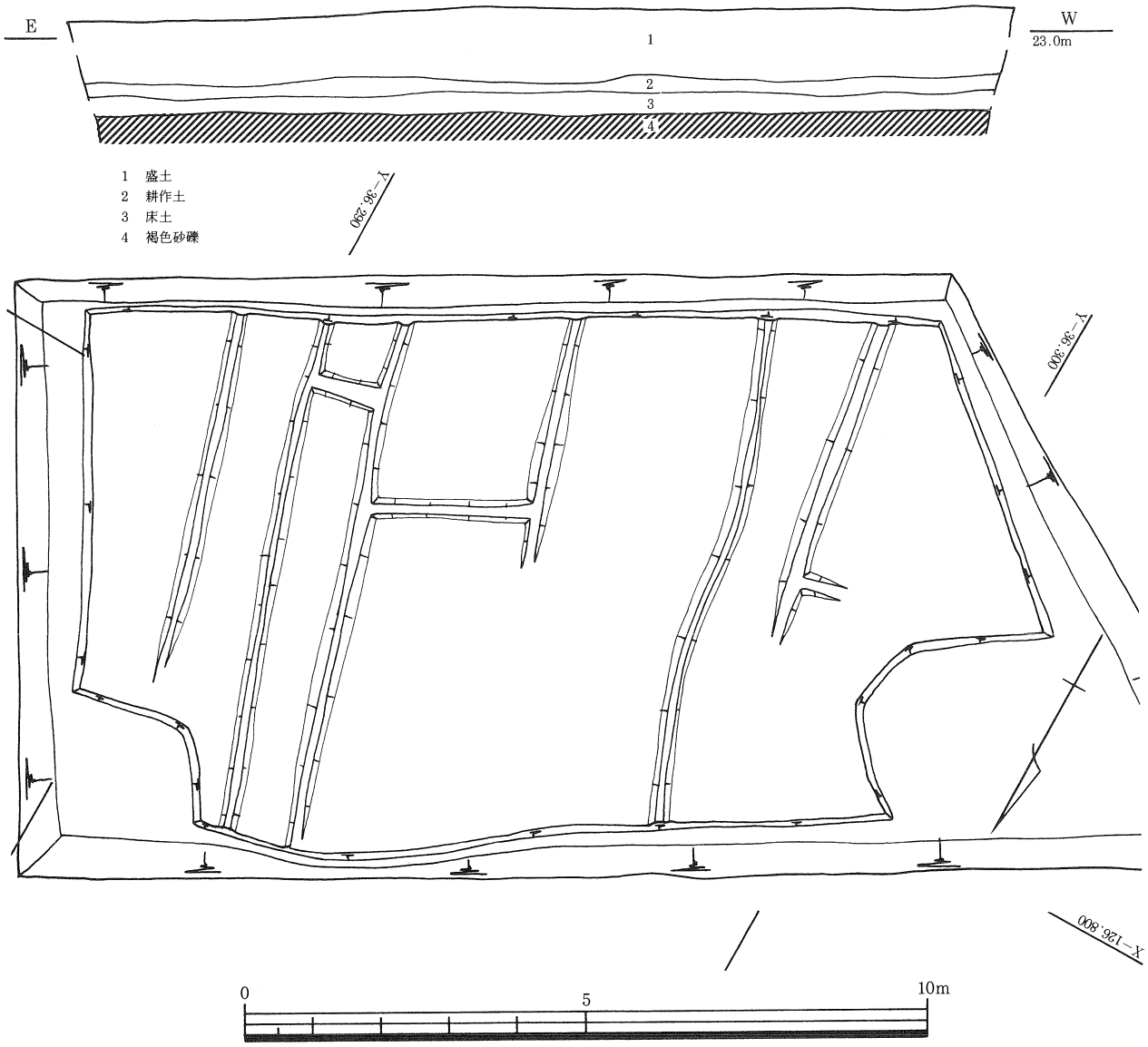


図11　大蔵司遺跡第６調査地区の壁面図と平面図

第２節　真上遺跡の調査（図５・12～34、図版３～12・15～20）

真上遺跡の発掘調査は平成５～７年度に実施されている。調査地区は第１～12地区に分れている。名神高速道路の北側に第１～８調査地区を、南側に第９～12調査地区を設定した。前節と同様に層序、遺構、遺物の順に述べる。なお、この節で利用する各図面の作成された調査地区を示すために図12を付した。

調査地の小字名は「庄奈幾」と「買田」である。付近には「庄司庵」、「安ノ内垣内」といった小字名がある[3)]。これらの字名のみを用いて、付近に荘園遺跡が存在するということはできないが、その存在を示唆しているものと考えておきたい。

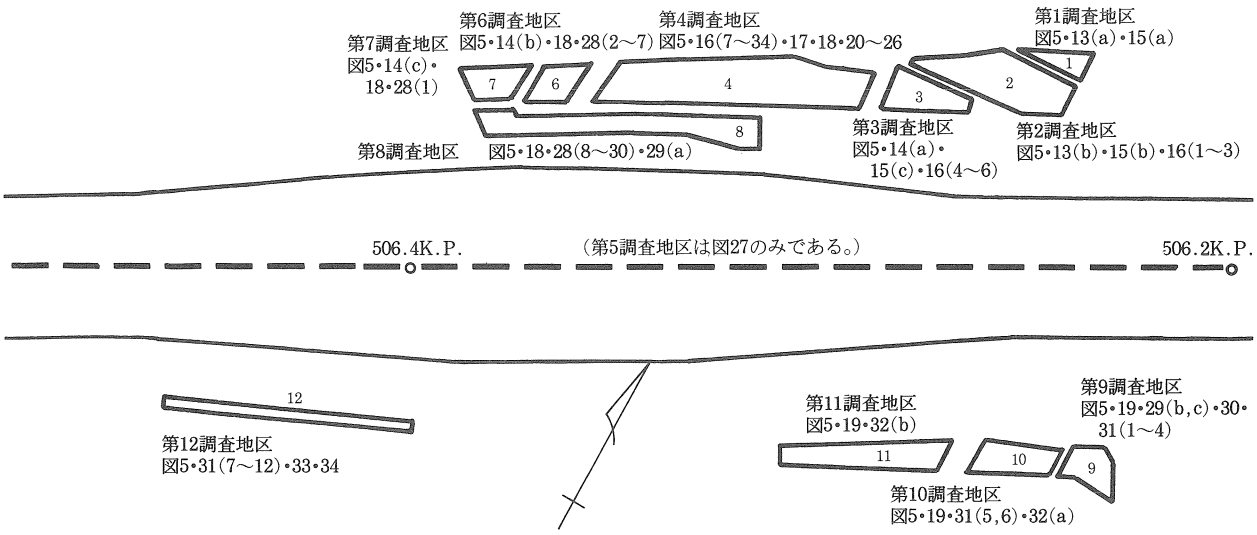


図12　第Ⅲ章の第２節で使用する挿図索引

真上遺跡の基本層序はⅠからⅨ層までである。それぞれの土色と土質、ならびにその特質は以下に述べるとおりである。なお、基本層位の設定は第８調査地区の堆積に準じた。

Ⅰ層は、ａの耕作土とｂの床土に分けることができる。

Ⅱ層は、灰白色砂礫部分と明黄褐色を呈している砂、明褐色砂礫混じりシルトによって形成されるラミナーの部分がある。これらは河川氾濫によって堆積した層である。[4)]

Ⅲ層は灰色の砂混じりシルトである。この上面が第１面である。

Ⅳ層は暗灰色の砂混じりシルトである。Ⅲ・Ⅳ層部分は調査地区によって堆積する層位数に変化がみられる。自然堆積ではなく、客土として持ち込まれているものであり、嵩上を目的とした部分が観察できる。中世後葉の耕作土層である。

Ⅴ層は灰色の砂混じり粘土、にぶい黄橙色の砂、青灰色の砂で、それぞれはラミナーを形成している。河川氾濫によって堆積した層である。[5)]

Ⅵ層は灰色の砂混じり粘土である。包含する遺物は13世紀までのものであり、中世前葉の純粋層としてとらえられるものである。

Ⅶ層はオリーブ灰色の砂混じりシルトである。Ⅵ・Ⅶ層の上面が第２面である。

Ⅷ層は黒褐色砂混じり粘土である。この層上面や、一部分ではⅨ層の上面が第３面である。

Ⅸ層は黒色から灰褐色系の色調を呈している砂礫、砂礫混じりシルトや粘土といった部分、灰色系の色調を呈する砂礫あるいは砂、シルトである部分、青灰色から赤黒色の粘土の部分、黄褐色の粘土の部分がある。これらの層はすべて地山層である。

１　真上遺跡第１調査地区（図５・13－ａ・15－ａ、図版３）

層　序　堆積状況は図13－ａに示した。地山層より下は、灰色系の色調の砂あるいはシルト

によって形成されるラミナー層の部分と、黒～赤黒色の色調の粘土層で植物遺体を多く含む部分との互層になっている。このような地山層より下の堆積状況は、これまでの大蔵司遺跡に見られた扇状地地形の河川堆積物層とは明らかな違いを持っている。

遺　構　第１面、第２面ともに流路状の溝がある。それらの遺構は図15－ａに示した。第２面以下にも同様の流路状の溝が確認された。その一例として図版３の最下段右には、第３面の遺構として示した。いずれの流路からも遺物が出土せず、これらは土砂が堆積する過程に形成された自然流路の可能性もある。

遺　物　灰黄褐色系の色調の砂混じりシルトや、黄～黄褐色系の色調を呈する粘土から、土師器、須恵器、瓦器が出土したがいずれも小片である。出土した遺物は中世のものが多いが、図13－ａでは７より上の包含層堆積には中世後期の羽釜も含まれていた。

２　真上遺跡第２調査地区（図５・13－ｂ・15－ｂ・16－1～3、図版４）

層　序　堆積状況は図13－ｂに示した。堆積層中の褐色粘質土層の下が第１面、地山層（灰黒色粘土）上面が第２面である。なお、第１面から第２面にいたるまでの堆積には、植物の根に付着する瘤状の鉄分やマンガン粒を多く含んでいた。

遺　構　図15－ｂには遺構平面図を示した。第１面の東側では北西から南東方向に続く、直径約0.2m、深さ約0.3mの規模のもの13個が、約1.0～3.0mの不統一な間隔で並んでいるピット列を、中央南壁付近では、柱痕跡を持つ柱穴が東西方向に２個続きとなって、約1.8mの間隔をもって並んでいた。中央南壁付近にある柱穴の規模はともに、直径が約0.4mの円形の掘方であり、柱穴掘方の中央付近には、直径約15㎝、深さ約30㎝の柱痕跡を確認することができた。また、西側では、北北西から南へ延びる溝３条を確認した。それぞれの規模は溝３が幅約0.9m×深さ約0.6m、溝２が幅約1.0～2.2m×深さ約0.4m、溝１が幅約2.2～2.8m×深さ約0.6mである。

第２面では東端付近で細長い溝状の土坑、幅約0.4m、深さ約0.2mを確認した。

遺　物　灰褐色粘質土層から埴輪、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器が出土した。第１面より下の黄灰色系の色調のシルト層や砂混じりシルト層で土師器、須恵器、瓦器、陶器が出土している。また、同一のレベルに堆積していた黄褐色粘質土層から須恵器が出土した。これらの地層は近世の遺物が混じらない純粋な中世の堆積層であった。いずれの出土遺物も小片であったが、そのうち淡黄灰色砂混じりシルト層から出土した遺物は、図16－１～３に示した。１は土師器の皿、２は瓦器の皿、３は緑釉陶器の椀である。１～２は中世後期のものであり、３は９世紀後半のものである。遺構からは遺物が出土していない。

3　真上遺跡第３調査地区（図５・14－ａ・15－ｃ・16－４～６、図版３）

層　序　堆積状況を図14－ａに示した。床土の下の、にぶい黄橙色砂礫層や明黄褐色砂礫層の上面が第１面であり、地山層上面が第２面である。地山層以下の状況は黒色砂混じり粘土、灰黄褐色砂、黒色砂混じり粘土となる。砂と砂礫層がラミナーを呈する部分と、黒色系の色調の砂混じり粘土からなる土層が互層となっている。この層の粘土部分は、腐葉土層に還元した土層で植物遺体を多く含み、メタンガスが発生する。それより下は青緑灰色砂礫層にかわる。

遺　構　図15－ｃには第１面、第２面で確認した遺構を示した。第１面では溝４条、土坑２か所、ピット12か所、落ち込み１か所を、第２面ではベースとなっている赤黒色の砂混じり粘土層上面に多数の足跡を確認した。

第１面の溝は２条が南北方向で、２条が東西方向である。南北方向の溝は、溝１が調査地区の西側部分を通りその規模は幅約2.0m、深さ約0.7mであり、溝２は調査地区の中央を通りその規模は幅約4.0m、深さ約0.6mである。東西方向の２条の溝は、溝３が調査地区の北西側にあって溝２に交わり、その規模は幅約0.6m、深さ約0.2mであった。溝４は溝３の北側にあって、規模は幅約0.5m、この規模については壁際に排水溝を作った時に削平し、推定値である。深さ約0.2mを測る。

土坑は南西隅で確認した長円形のものと、北壁際の不定形なものがあり、深さは共に約0.3mである。

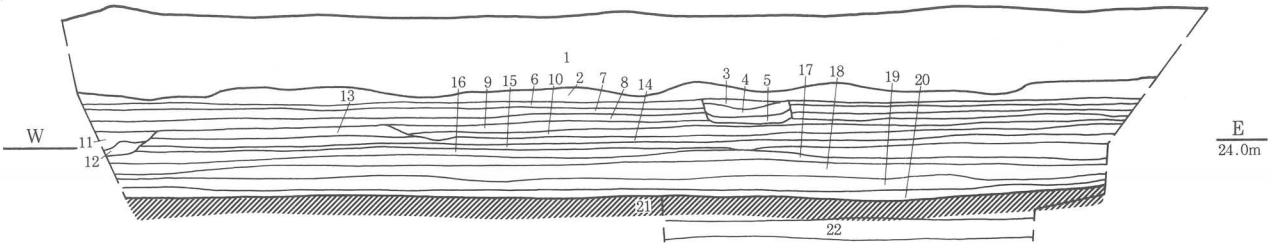
ピット12か所は、それぞれの切り込み面を今回の調査で確認できなかった。これらは、第１面より上から切り込んでいる可能性もある。これらのピットの規模は10か所が約0.3mの円形や楕円形で、深さ約0.4mのものであり、残る２か所が約0.6mの円形で、深さ約25㎝のものである。調査地区の東端で確認した落ち込み１か所は、隣接の第２調査地区には続かず、深さ約0.3mと浅いものであることから、土坑の可能性もある。

第２面は地山の粘土層上面である。この面からは、灰白色系の粗粒砂が埋土となっている多数の足跡や耕作物痕跡を確認した。

遺　物　包含層出土の遺物には、以下のようなものがある。第１面より上の地層から陶器、磁器、瓦片が出土し、続く第２面を確認するまでの地層からは、土師器、須恵器、瓦器が出土しているが、いずれも小片であった。

第１面の遺物が出土した遺構は、次のとおりである。溝１からは須恵器、瓦器が、溝２からは土師器、須恵器の蓋が出土しており、須恵器の蓋を図16－４に示した。稜の部分が消滅しているので、陶邑編年のII型式４段階のものである。また、溝３からは須恵器が、溝４からは土師器が出土している。

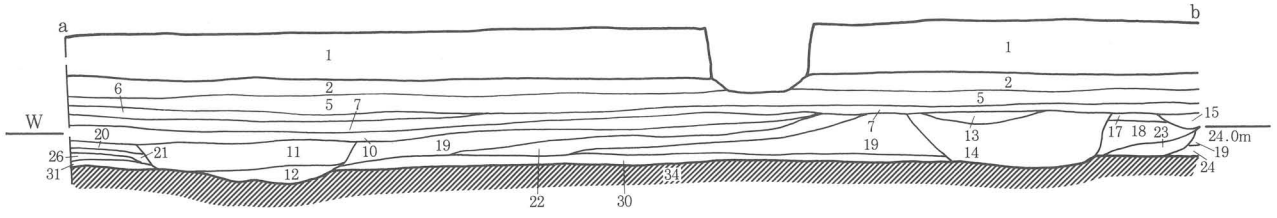
ピット１から土師器、須恵器の坏身が出土し、須恵器の坏身を図16－６に示した。たちあが

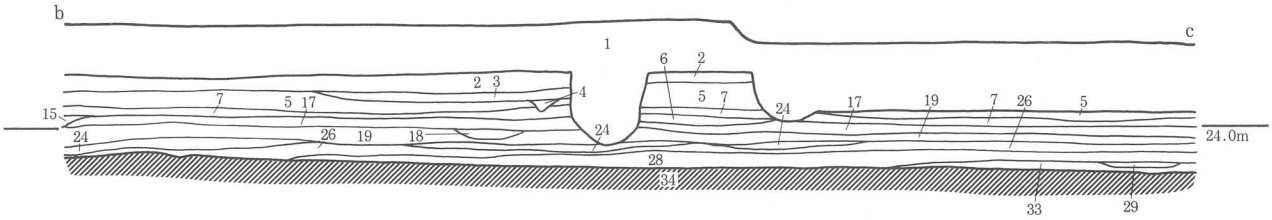


(a). 第１調査地区の北壁

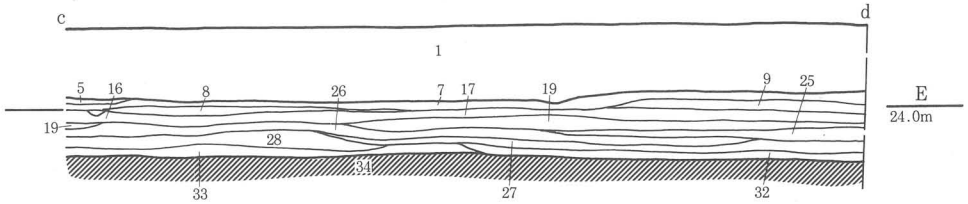
1 盛土
2 耕作土
3 灰白色砂 ┐
4 黄灰色粘土 ├ 暗渠
5 灰色粘土 ┘
6 床土
7 オリーブ黄色砂混じりシルト
8 暗灰黄色砂混じりシルト
9 灰白色砂混じりシルト
10 褐灰色砂混じりシルト
11 褐灰色粘土
12 にぶい橙色粘土
13 灰黄褐色砂混じりシルト
14 浅黄色粘土
15 明黄褐色粘土
16 にぶい黄色粘土
17 灰色粘土
18 緑灰色シルト
19 暗緑灰色砂
20 黒色粘土
21 黒褐色砂礫
（緑灰色シルト混じり砂とラミナー形成）
22 黒色粘土

(b). 第２調査地区の北壁



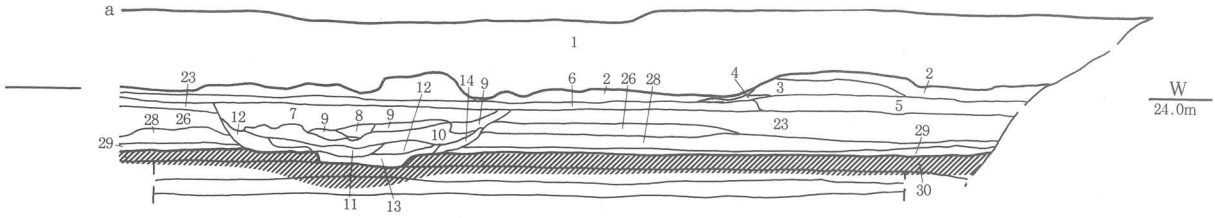


1 盛土
2 耕作土
3 淡灰色シルト
4 灰褐色シルト
5 床土
6 淡黄褐色シルト
7 灰褐色粘質土
8 灰褐色砂混じり粘土
9 灰褐色砂礫混じり粘土
10 黄褐色粘質土

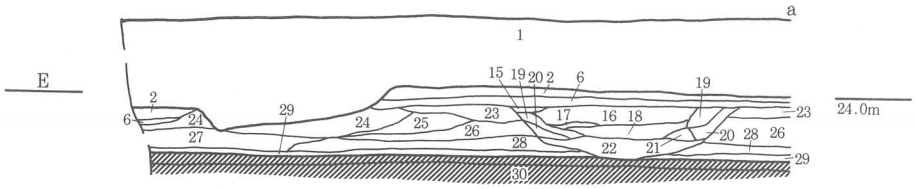


11 灰色砂混じり粘土
12 灰色粘土
13 黄褐色砂礫
14 黄褐色砂礫混じりシルト
15 暗褐色シルト
16 黄褐色砂礫
17 淡黄灰色砂混じりシルト
18 灰褐色砂礫
19 黄褐色シルト
20 灰褐色砂
21 淡青灰色シルト
22 青灰色砂礫
23 褐色砂礫
24 黄褐色砂礫
25 淡黄色砂
26 淡青灰色砂
27 青灰色粘質土
28 青灰色砂混じり粘土
29 暗灰色砂礫
30 淡青灰色砂礫
31 淡青灰色シルト
32 灰褐色砂
33 灰黄褐色粘質土
34 灰黒色粘土

図13　真上遺跡の壁面図　（a）第１、（b）第２調査地区

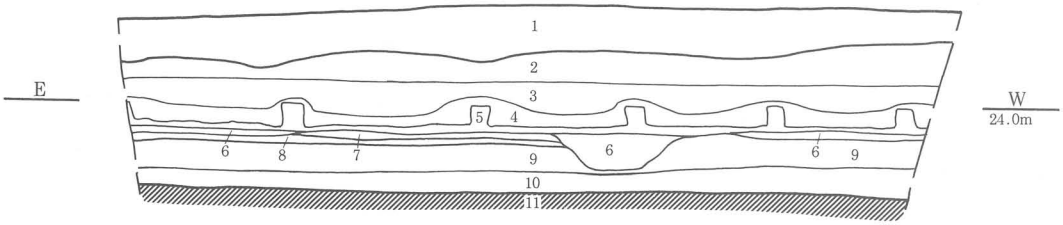


(a). 第3調査地区の南壁



1 盛土
2 耕作土
3 耕作土(畦)
4 耕作土(畦)
5 床土(灰黄褐色粘土)
6 床土(オリーブ黒色シルト)
7 黄褐色砂礫混じり粘質土
8 黄灰色砂混じり粘土
9 褐灰色シルト
10 黄灰色粘土
11 灰オリーブ色砂
12 褐灰色粘土
13 灰色粘質土
14 黄灰色砂混じりシルト
15 褐灰色シルト混じり砂
16 橙色砂混じりシルト
17 褐灰色砂混じりシルト
18 灰色砂礫混じり粘土
19 淡赤橙色砂混じり粘土
20 にぶい赤褐色シルト混じり砂
21 淡赤橙色シルト混じり砂
22 暗青灰色砂礫混じり粘土
23 にぶい黄橙色砂礫
24 明黄褐色砂礫
25 明黄褐色シルト混じり砂礫
26 灰黄色砂礫混じりシルト
27 緑灰色砂礫
28 明緑灰色シルト混じり砂礫
29 灰白色砂混じりシルト
30 赤黒色砂混じり粘土

(b). 第6調査地区の南壁



1 盛土
2 耕作土
3 灰白色砂礫
4 明褐色砂礫混じりシルト(ラミナーを形成)
5 灰色砂混じり粘土
6 灰色砂混じりシルト(ラミナー形成)
7 にぶい黄橙色砂(ラミナーを形成)
8 青灰色砂(ラミナーを形成)
9 灰色粘土
10 褐灰色砂混じり粘土
11 赤黒色粘土

(c). 第7調査地区の北壁

1 盛土
2 耕作土
3 床土
4 にぶい黄褐色砂混じり粘土
5 暗灰黄色砂混じり粘土
6 青灰色砂(ラミナーを形成)
7 緑灰色砂混じりシルト
8 灰色粘土
9 褐灰色砂礫混じり粘土
10 青灰色砂混じり粘土

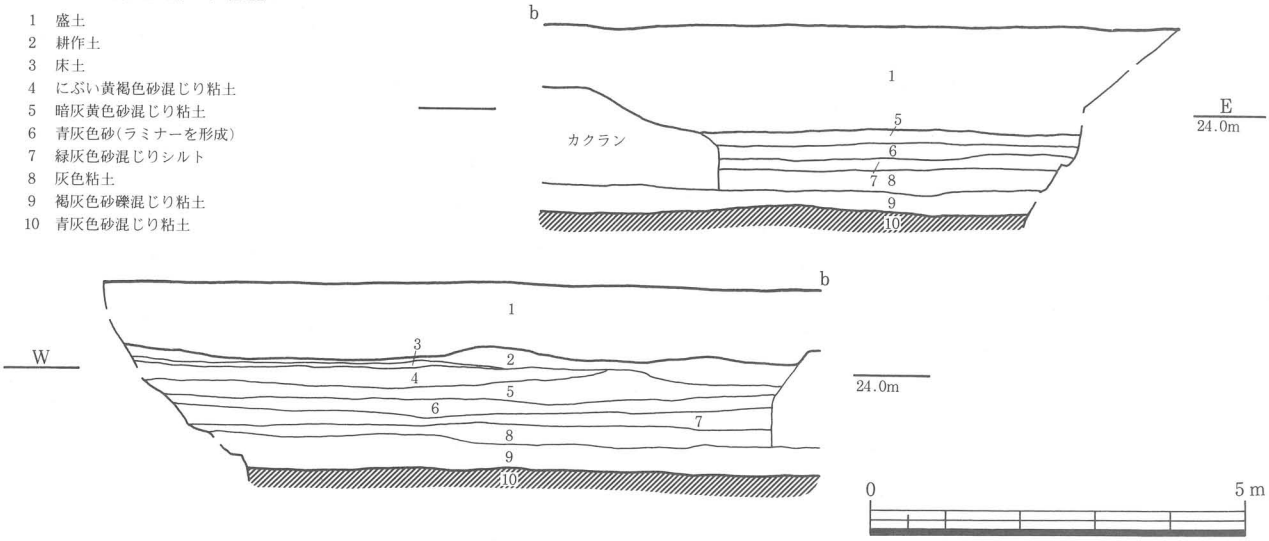


図14 真上遺跡の壁面図 （a）第3、（b）第6、（c）第7調査地区

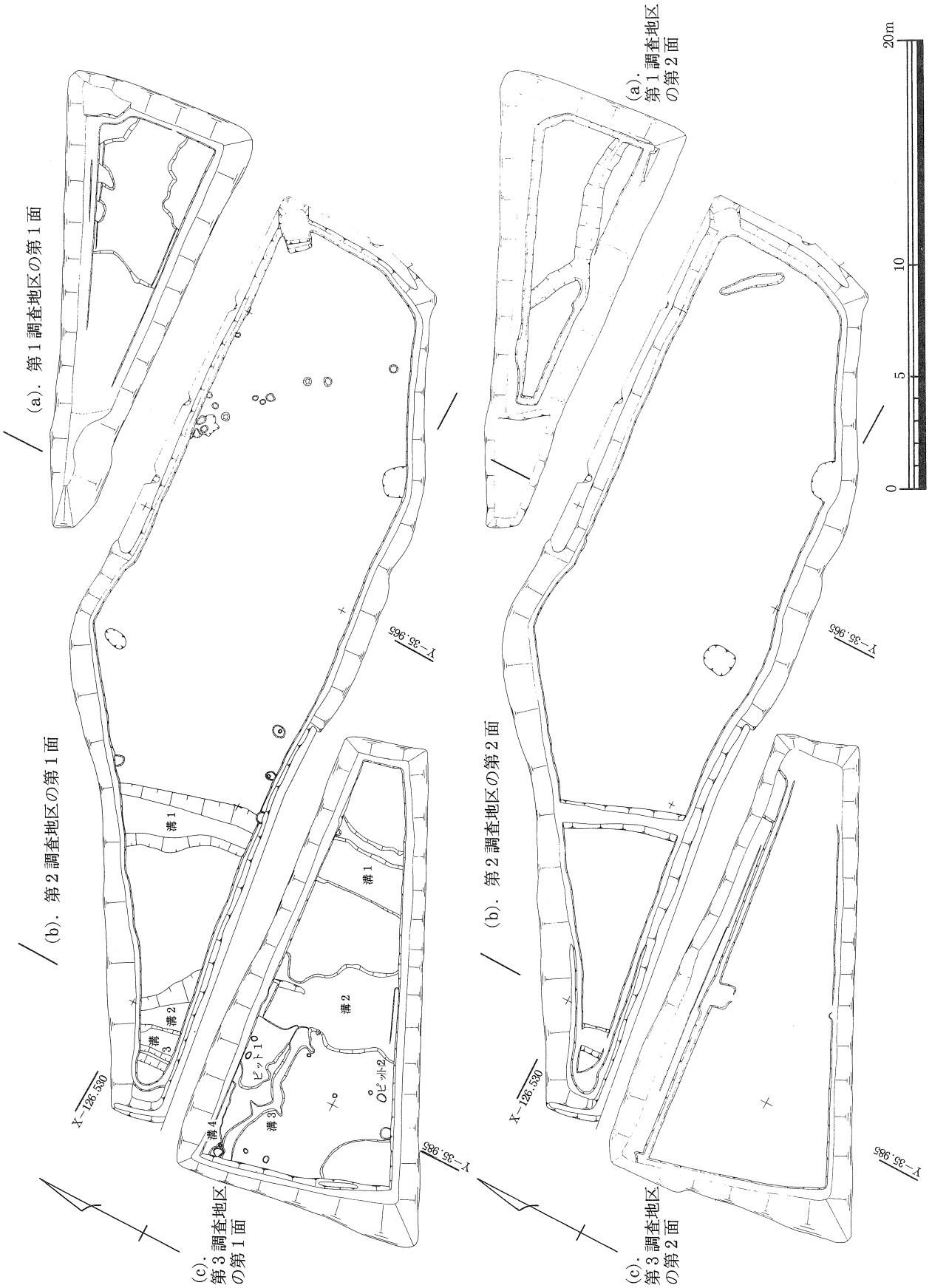


図15　真上遺跡の平面図　第1～3調査地区の第1・2面

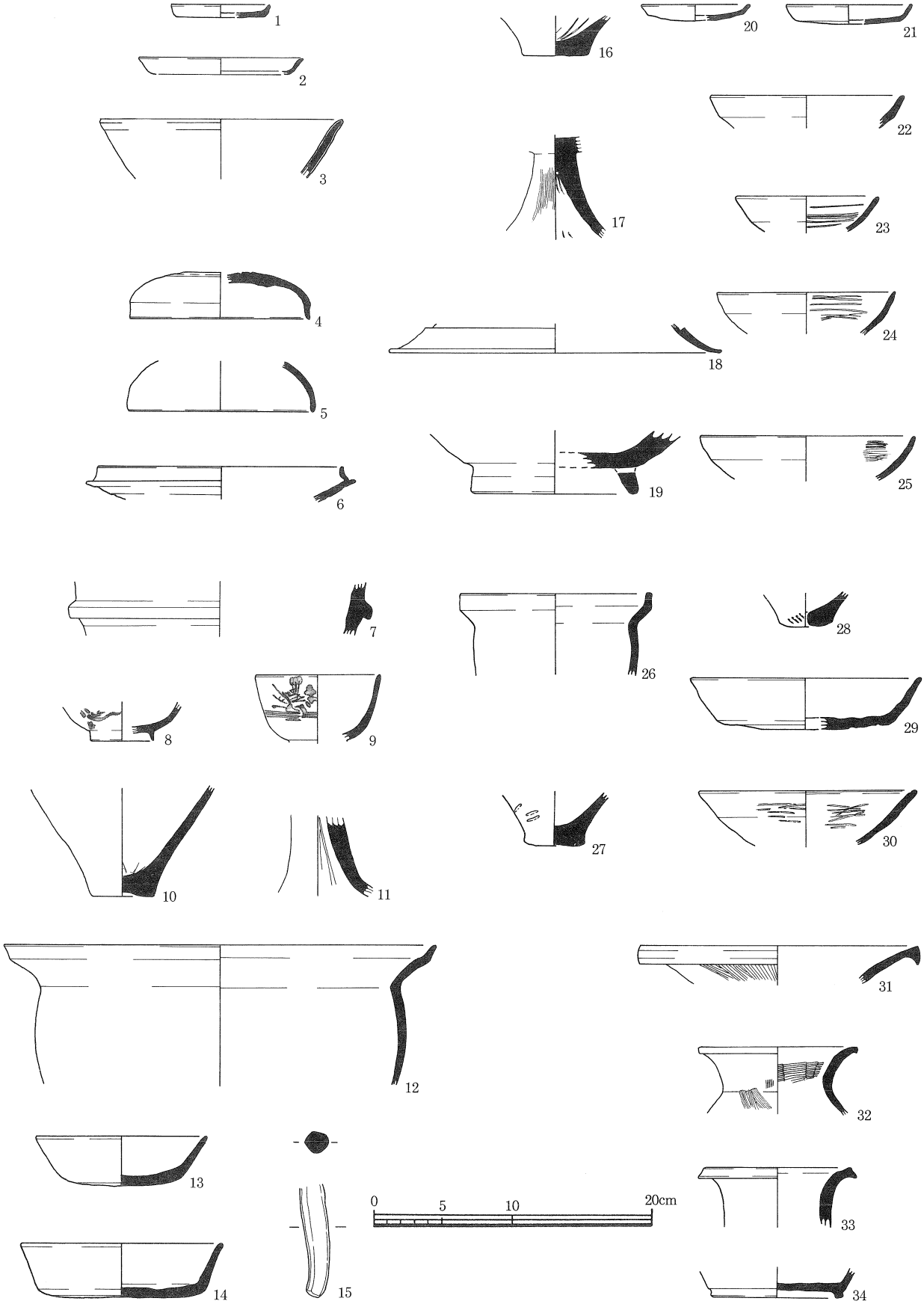


図16　真上遺跡の出土遺物　（1～3）第2、（4～6）第3、（7～34）第4調査地区

りの部分がやや短くなったものであるので、これは陶邑編年II型式3段階のものである。ピット2からは須恵器の蓋、図16－5が出土した。陶邑編年II型式5段階のものである。

各遺構から出土している遺物は6世紀後半頃のものが多いが、中世の遺物も混じっており、遺構面を覆う包含層からの出土遺物も勘案すれば、第1面の遺構の時期は中世と考えられる。

4　真上遺跡第4調査地区（図5・16－7～34・17・18・20～26、図版5・6・14～18）

遺構は東側と西側で様相が変わり、東側には第1・2面が、西側には第3面がある。それぞれの遺構面は、それらを覆う包含層の遺物や遺構から出土した遺物の状況、ならびに遺構埋土の類似性などから勘案すれば次のような年代をあてることができる。それは第1面に近世、第2面に中世、第3面に古代といった各時期である。

調査ではこの第3面を保存したが、一部分は水道工事で掘削することとなり、第3面より下の地山層までを第5調査地区として調査した。本書では44～45頁に、その成果を記載する。

層　序　図17にはこの調査地区の北壁の土層堆積を示した。近世の遺構面は図中の24と8の上面で、中世の遺構面は26と28の下の面で、古代の遺構面は19と25の上面である。

遺　構　遺構面は第1～3面である。図18には遺構平面図を示した。

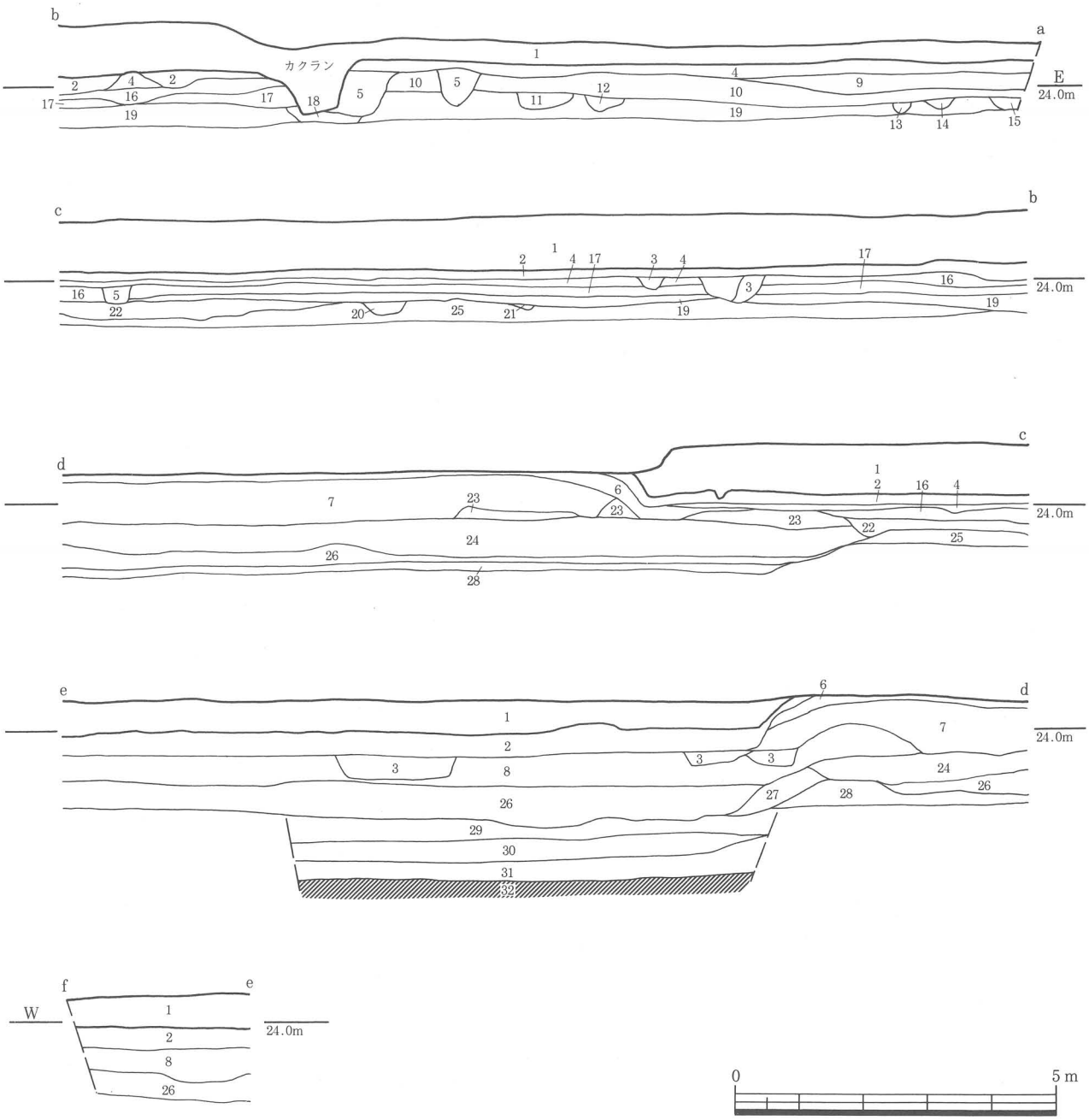
第1面で検出した遺構には、南北方向の畑の畝、井戸を伴なう水利施設、東西方向と南北方向の溝2条である。これらはすべて灰色系の色調をもつ砂礫層に覆われていた。この砂礫層の堆積は、近世の畑が洪水による被害を受けた痕跡と考える。図20には水利施設の平面図と立面図を示した。瓦質の土管を利用したもので、井戸1基と水溜め1か所を、竹樋と暗渠で結んで構成している。第8調査地区側への流水量の調節機能の役割を果たした施設と考えられる。調査地より北側から流れてきた水に、井戸と水溜めによって水量に調節を加えた後、さらに南側の耕地に遣水した施設と考えることができる。第8調査地区の暗渠もこれらに続くものである。

第2面では足跡や耕作物痕跡が残っていた。西側が一段高くなるが、低い側には段と平行して帯状に約2.0mの幅で足跡等がない部分がある。耕作時に畦や溝が設定されていたことによって開墾されることがなかったので、このような状態になっているものと考えられる。

第3面では東半で総数134の遺構を確認した。弥生時代・古墳時代・奈良時代の遺構があった。遺構の種類は溝が1条、竪穴住居が1基、土坑が7か所、柱穴が9か所、ピットが116か所となっている。遺物が出土した遺構について述べる。（土坑・柱穴・ピットは表4参照）

溝の遺物出土状況を図21に示した。溝は南北方向に走り幅約2.0m、深さ約0.4mの規模である。両端は調査地区外へ続く。埋土は上下2層で共に層厚約0.2mを測る。上層が暗～明黄褐色砂混じり粘土で、下層が青黒～暗青灰色砂混じり粘土である。下層から遺物が出土した。

竪穴住居の遺物出土状況を図22に示した。北西側の一部は調査地区外へ広がっているが、長



1　盛土
2　耕土
3　暗渠
4　床土(畦含む)
5　暗渠
6　旧耕作土
7　灰オリーブ色砂礫
8　明黄褐色砂混じりシルト
9　褐灰色砂礫混じり粘土
10　黒褐色砂混じり粘土
11　褐灰色砂混じり粘土
12　褐灰色砂混じり粘土
13　褐灰色砂混じり粘土
14　褐灰色砂混じり粘土
15　褐灰色砂混じり粘土
16　黄灰色砂混じり粘土
17　褐灰色砂混じり粘土
18　赤灰色砂混じり粘土
19　明赤褐色砂混じり粘土
20　黒色粘土
21　褐色シルト混じり砂
22　暗青灰色砂礫
23　灰褐色砂礫混じり粘土
24　灰黄褐色砂礫
25　明オリーブ灰色砂礫
26　明緑灰色粘土
27　オリーブ黒色砂礫混じりシルト
28　赤黒色粘土
29　オリーブ黒色砂礫混じりシルト
30　赤黒色砂礫混じりシルト
31　褐灰色砂混じり粘土
32　灰色砂(ラミナーを形成)

図17　真上遺跡第4調査地区の壁面図

径約9.1m、短径約7.1mの規模を持つ楕円形の住居である。床面に明瞭さを欠き、南東側の一部で壁溝を確認したが、柱穴などの付随施設については検出できなかった。埋土は暗灰褐色砂礫混じり粘質土の単層で、厚さは約0.2mであった。出土した遺物には壷・甕・鉢・高坏・砥石がある。これらは検出した遺構の底から約5㎝浮いた状態であった。

表4　真上遺跡第4調査地区の土坑（1～6）、柱穴（1・2）、ピット（1～20）法量一覧表

遺構番号	平面形	法量（長×短×深　単位 ㎝）	埋　　土	備　　考（出土土器）
土坑1	円形	直径約80×深さ約50	暗褐灰色砂混じりシルト	土師器
土坑2	円形	直径約80×深さ約40	暗褐色砂礫混じりシルト	土師器
土坑3	楕円形	長径約100×短径約60×深さ約40	灰褐色砂礫混じりシルト	土師器
土坑4	溝状	長約480×短約120×深さ約30	灰褐色砂礫混じりシルト	土師器（図23－7）
土坑5	楕円形	長径約120×短径約100×深さ約50	暗褐色砂混じり粘土	土師器
土坑6	溝状	長約180×短約60×深さ約40	暗灰褐色砂礫混じりシルト	土師器（図23－9）
柱穴1	楕円形	掘方：長径約50×短径約40×深さ約30 柱痕：直径約20	掘方：灰褐色砂礫混じりシルト 柱痕：暗褐色砂混じり粘土	土師器
柱穴2	楕円形	掘方：長径約40×短径約30×深さ約30 柱痕：直径約15	掘方：暗褐色砂混じりシルト 柱痕：暗灰褐色砂混じりシルト	土師器
ピット1	円形	直径約50×深さ約30	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	土師器
ピット2	楕円形	長径約100×短径約100×深さ約45	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	弥生（図23－1・2・3）
ピット3	楕円形	長径約80×短径約50×深さ約40	灰褐色砂礫混じりシルト	土師器
ピット4	円形	直径約30×深さ約30	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	弥生（図23－4・5・6）
ピット5	円形	直径約40×深さ約35	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	土師器
ピット6	円形	直径約50×深さ約35	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	土師器
ピット7	円形	直径約30×深さ約30	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	土師器・須恵器
ピット8	円形	直径約30×深さ約25	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	土師器
ピット9	円形	直径約50×深さ約35	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	土師器
ピット10	円形	直径約35×深さ約25	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	土師器
ピット11	円形	直径約40×深さ約30	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	弥生（図23－8）
ピット12	楕円形	長径約90×短径約60×深さ約40	暗褐色砂礫混じりシルト	弥生・土師器
ピット13	円形	直径約40×深さ約25	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	須恵器
ピット14	円形	直径約50×深さ約30	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	土師器
ピット15	円形	直径約45×深さ約35	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	土師器・須恵器
ピット16	楕円形	長径約70×短径約50×深さ約30	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	土師器
ピット17	楕円形	長径約80×短径約50×深さ約40	灰褐色砂礫混じりシルト	土師器・須恵器
ピット18	楕円形	長径約70×短径約50×深さ約35	暗褐色砂礫混じりシルト	土師器
ピット19	円形	直径約45×深さ約30	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	弥生（図23－10）
ピット20	円形	直径約40×深さ約35	暗褐～灰褐色系砂礫混じりシルト	土師器（図23－11）

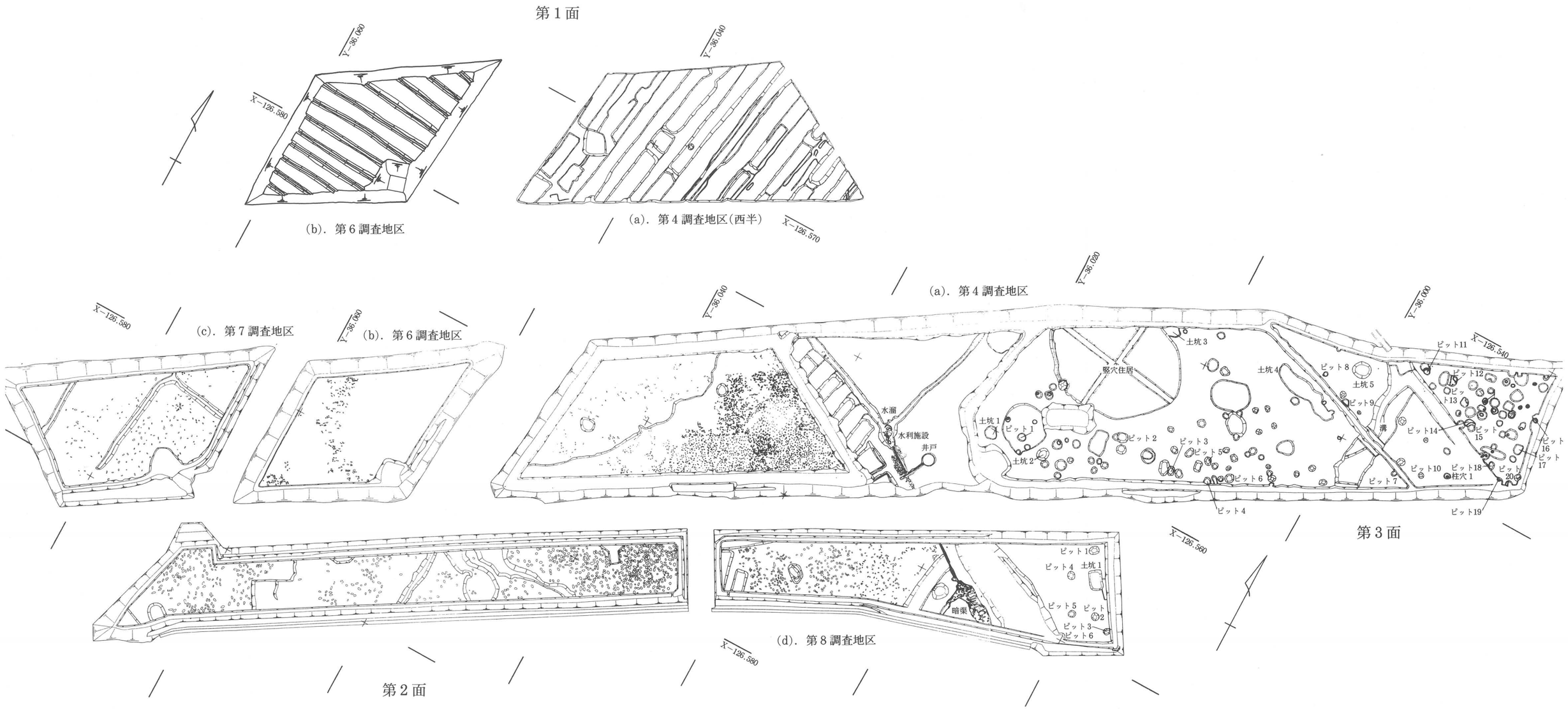


図18　真上遺跡の平面図　第4・6～8調査地区

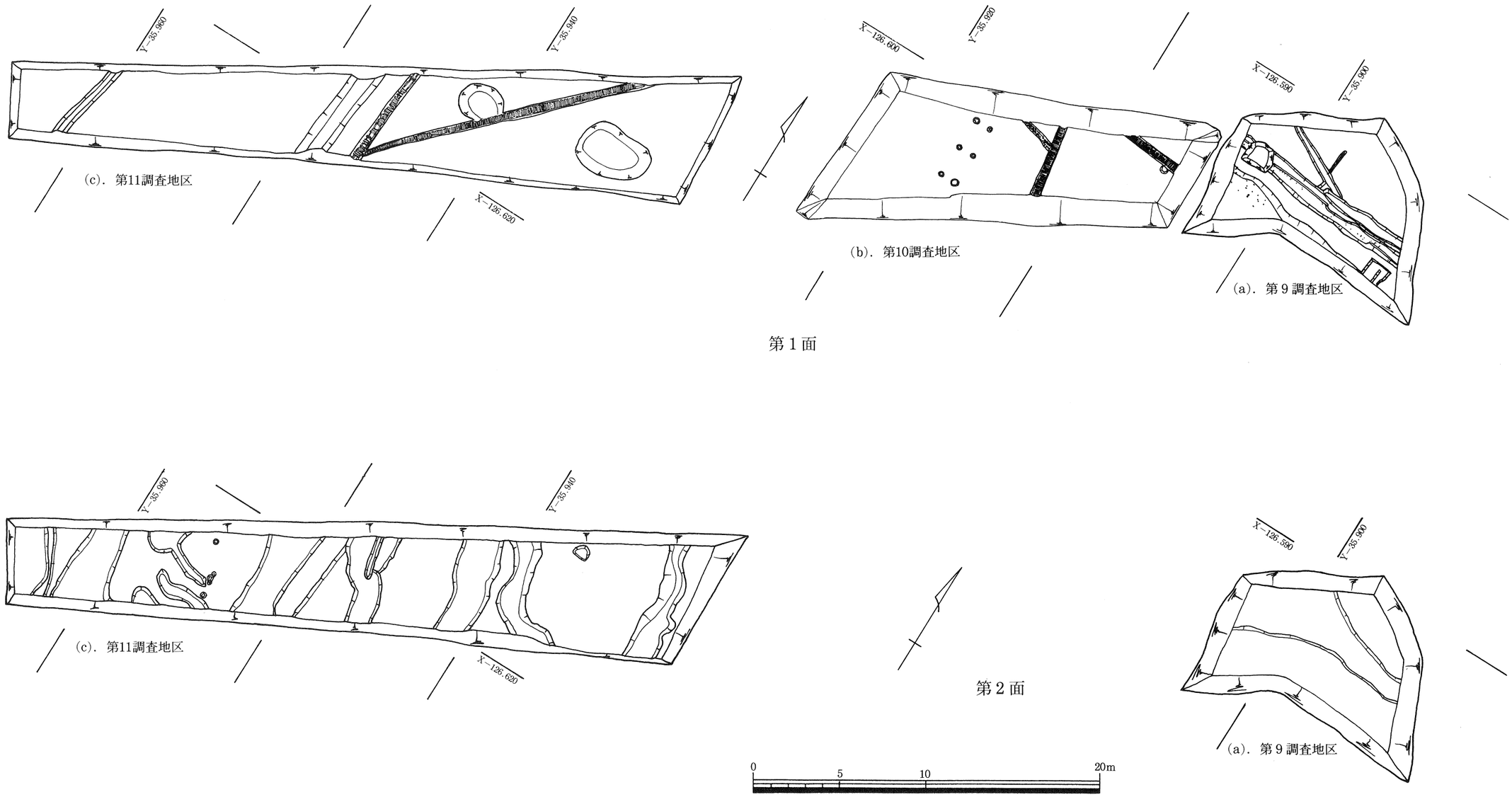


図19　真上遺跡の平面図　第９～11調査地区

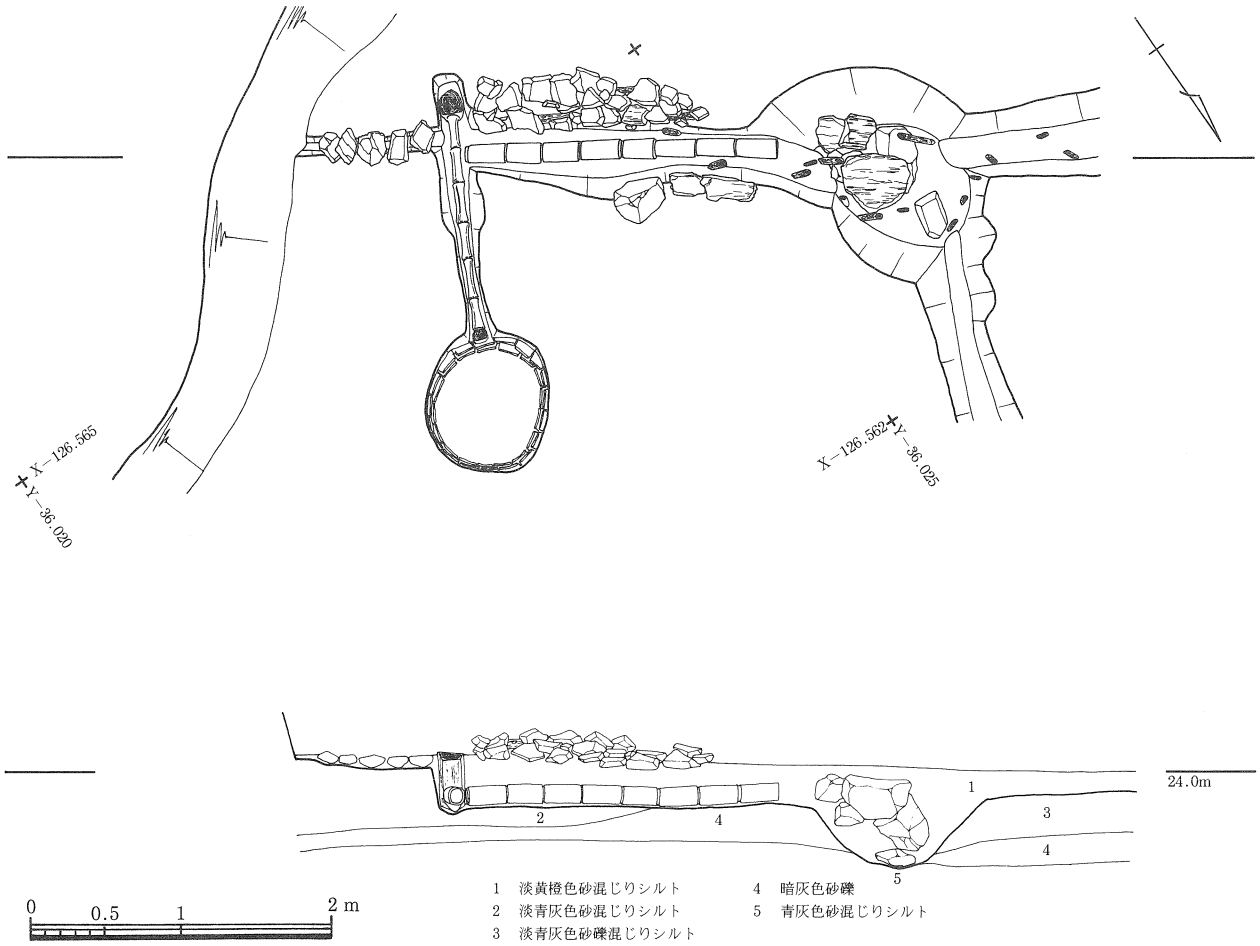


図20　真上遺跡第４調査地区の水利施設

遺　物　この調査地区から出土した遺物を以下のａ～ｄに分けて説明する。

ａ　遺物包含層の出土遺物（図16－７～34）

遺物包含層の出土遺物には以下のようなものがある。第１面より上層では弥生土器、埴輪、瓦器、陶器、磁器、瓦片が出土し、第２面までの層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、が出土している。これらの遺物包含層から出土したものは小片が多かったので、各層ごとに主なものを図に示した。

図16－７～15は灰色砂礫（図17－７）から出土したものである。図16－７は古墳時代中期の円筒埴輪の突帯の部分である。表面が著しく磨耗しているために調整は不明である。８と９は近世の伊万里焼茶碗である。外面には呉須による染め付けが施されている。10は甕の底部で内面の底にハケ目があり、11は高坏の脚部で内面に絞り目がある。どちらも外面は磨耗しているが弥生時代中期末のものである。12は土師器の甕である。13と14は須恵器の坏身である。15は中世後半の瓦質の三足付鍋の足先部分である。

図16－16～25は明黄褐色砂混じりシルト（図17－８）から出土したものである。16は甕の底部で内面にはヘラケズリがみられる。17は高坏の脚部で表面にはヘラ磨きの痕跡があり、内面

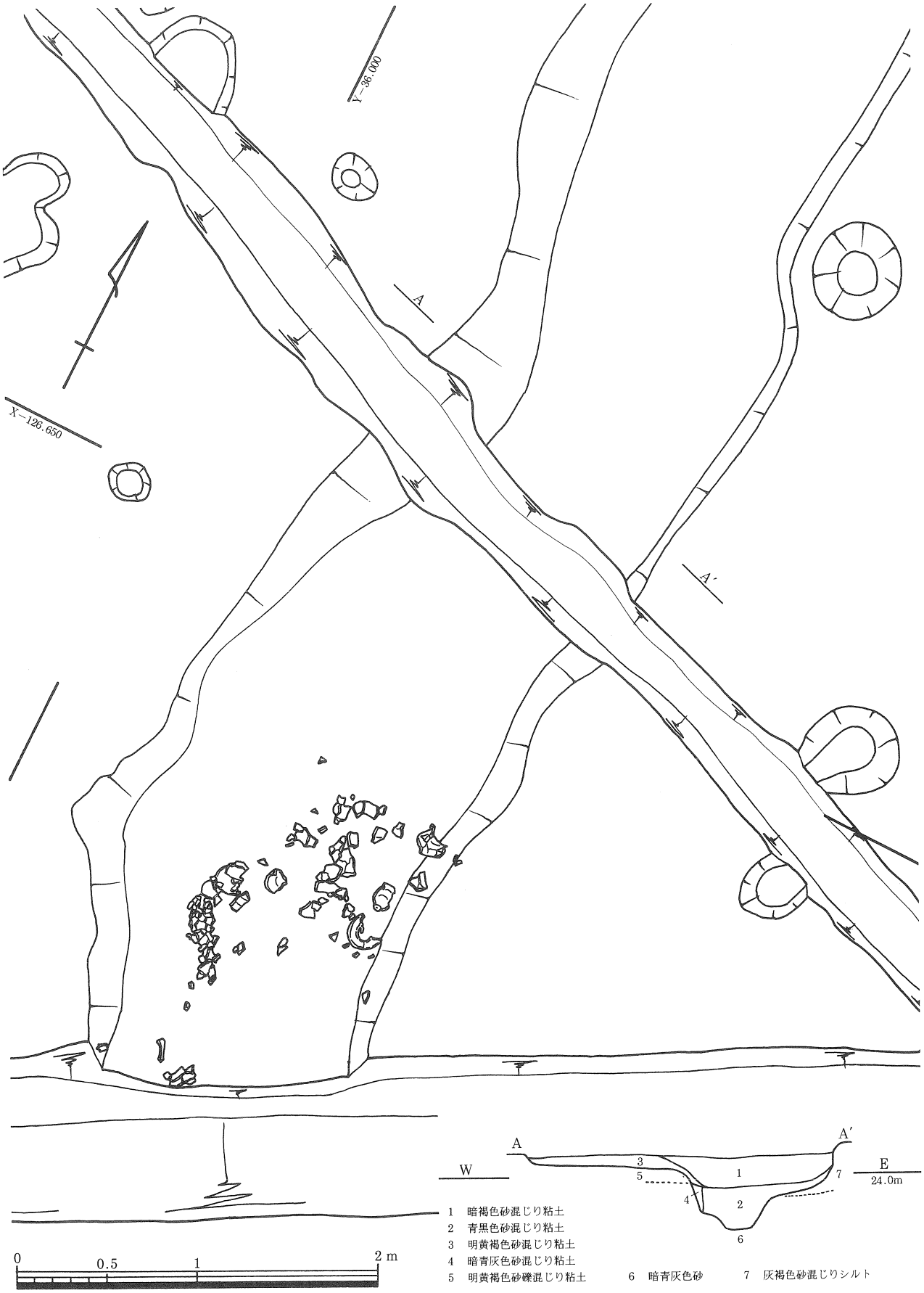


図21　真上遺跡第４調査地区で検出した溝の遺物出土状況

図22　真上遺跡第４調査地区で検出した竪穴住居の遺物出土状況

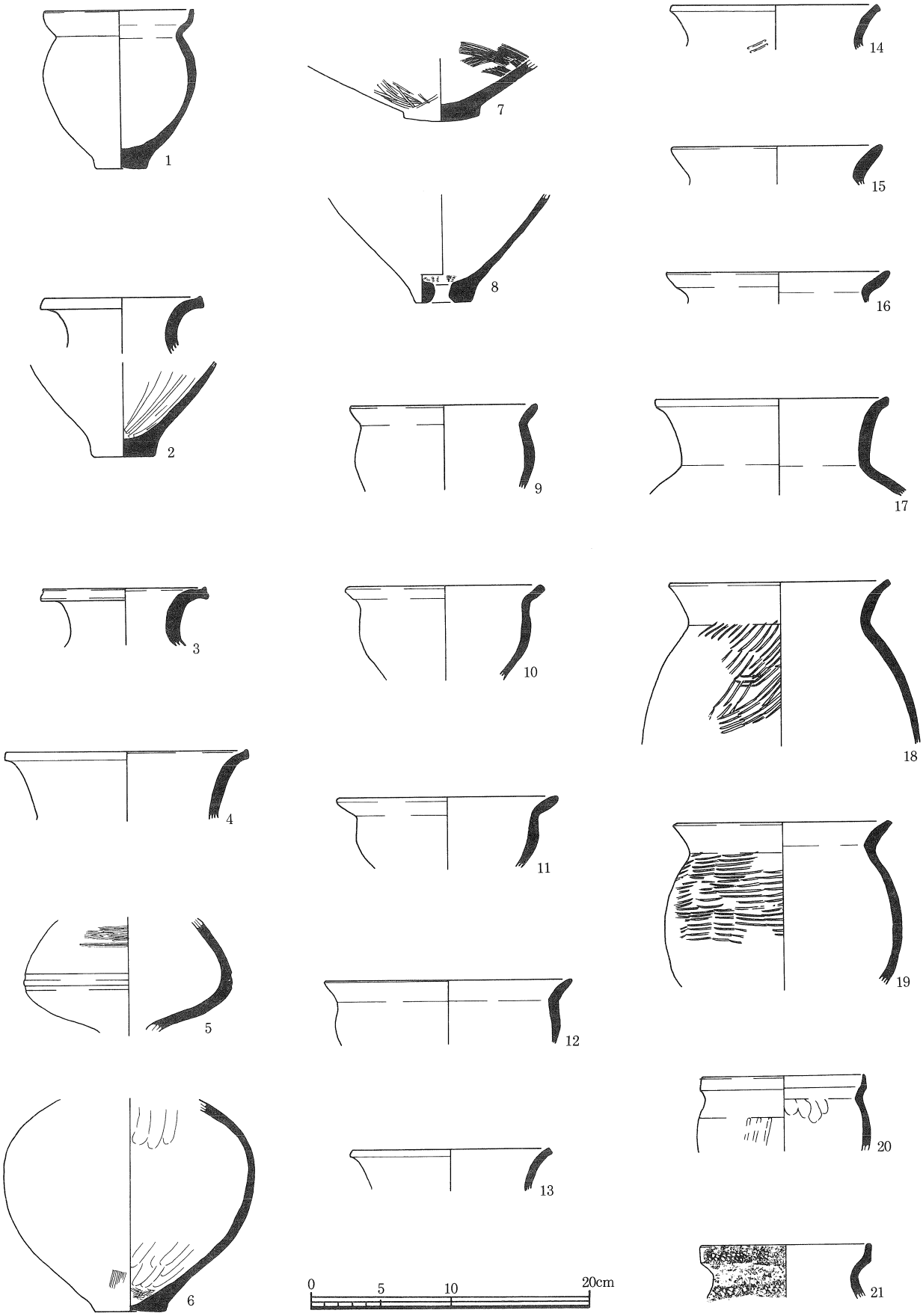


図23　真上遺跡第４調査地区の溝から出土した遺物（その１）

には絞り目がある。18は高坏の脚部で外面に段をもつ。これらは弥生時代後期のものである。19は須恵器の壺の底部である。高台部分には直径約４㎜の穿孔がある。８世紀後半以降の篠窯産である。20～22は土師器の皿である。20は丸味を帯びた底部、21は平らな底部に、それぞれ短く立ち上がる口縁部が付き、口縁部の強いヨコナデのみで仕上げている。22は口縁部のみであるが同様に調整しているものである。23～25は瓦器椀で、内面のヘラ磨きも粗雑になっていることから13世紀のものである。23と24の内面にはやや粗いヘラ磨きが施され、25の内面には細かいヘラ磨きがある。いずれも外面は磨耗している。

図16－26～30は明緑灰色粘土（図17－26）から出土したものである。26～28は弥生土器である。26は小形の甕の口縁部分であり、27は甕の底部である。外面にはかすかにタタキ目の痕跡が見られる。28の甕は底部に直径約５㎜の孔が外側から穿たれている。29は須恵器の坏身で、９世紀中頃の篠窯産である。30は瓦器椀で内面と外面にヘラ磨きがある。前出と同様に13世紀のものである。

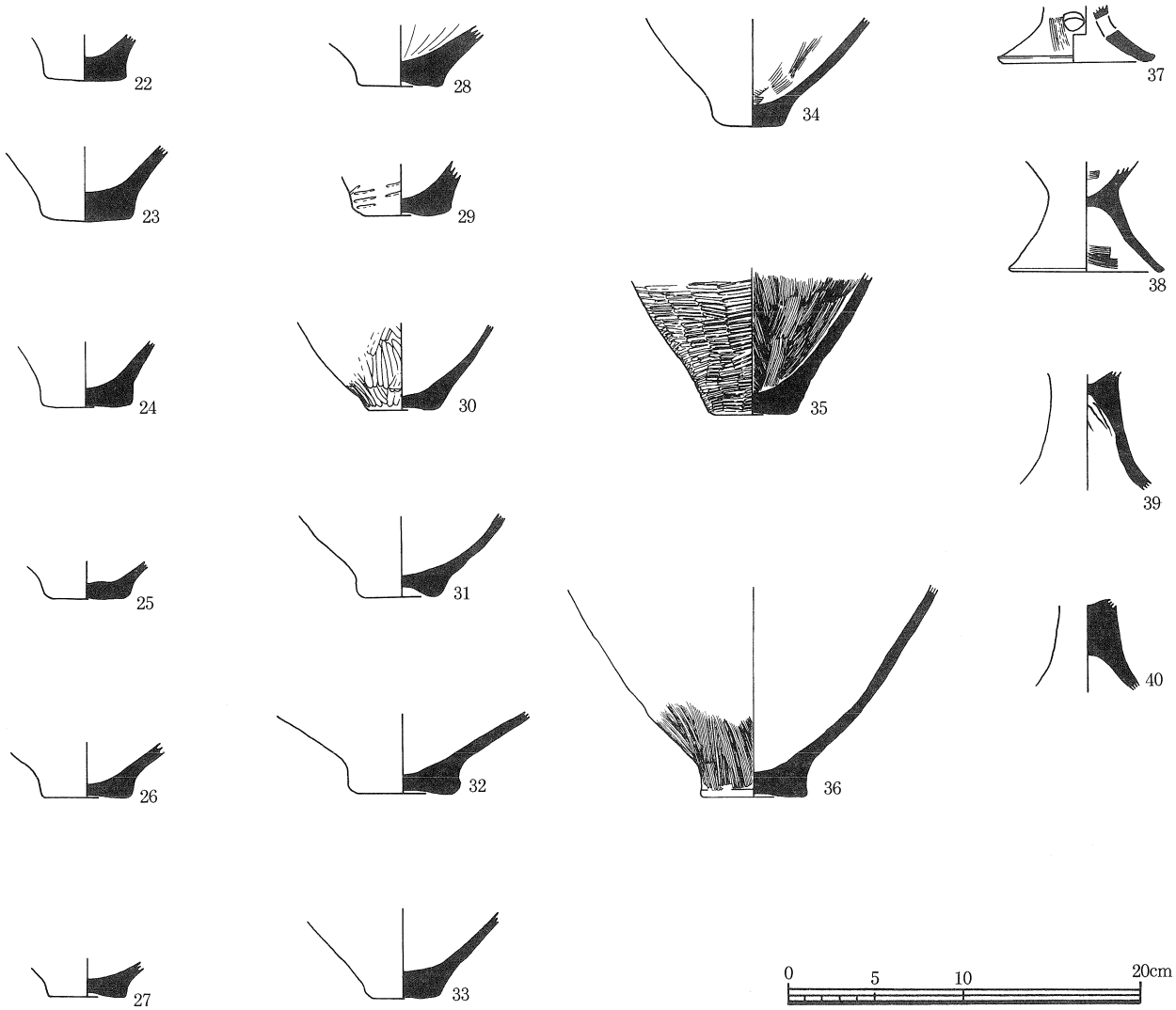


図24　真上遺跡第４調査地区の溝から出土した遺物（その２）

図16－31～34は赤黒色砂礫混じりシルト（図17－30）から出土したものである。31と32は弥生時代後期の壺の口縁である。31の外面にヘラ磨きが施されており、32の口縁部の内面には連続させるヨコハケがみられ、外面にもハケ目がかすかに残っている。33は弥生土器の壺の口縁部分で、磨耗により調整は不明である。34は須恵器の坏身である。底部の外面の端部分にハの字形にひらく高台を付けている。陶邑編年のⅣ型式４段階のものである。

b　溝の出土遺物（図23・24）

第３面で検出した溝から出土した遺物を図23・24に示した。１は小型の甕で、長円形の体部に受口状口縁をつけるものである。器壁の磨耗のため調整は不明である。２～８は壺である。２・３は口縁部が体部から外反気味に短く立ち上がり、端部付近を水平にひらくものであり、端面を形成する。端部の上側を肥厚させている。４の口縁部は上外方に直線的に立ち上がり、端部付近でやや水平にひらくものである。端部に面を持ち上側に肥厚させている。２の底部付近の内面はヘラケズリしているが、その他は磨耗のため調整不明である。５は体部の最大径を下位にもつ偏球形の胴部に、おそらく脚部の付く細頸壺である。胴部の最大径付近には２条の凹線をめぐらせている。調整は外面にヘラ磨きがあるが、その他は磨耗により不明である。６はやや偏球体の体部の外面にハケ目、内面にナデ痕跡とハケ目をもつもの、７は突出した底部を持つものである。外面にはヘラ磨きが、内面にはハケ目がある。８は底部に直径約１㎝の孔を穿ったもので、内面にはかすかにハケ目が残っていた。

９～21と図24－22～36は甕である。９～12は小型のもので、13～16は短い口縁の付くものであり、13・14は端面を形成する。17は口縁部が体部から垂直に立ち上がり、口縁端部付近で水平気味にひらく、端部に面を持つものである。18は長円形の体部に、19は球形の体部からそれぞれやや外反した短い口縁部のつくものである。14・18・19の外面にはタタキ目がある。20・21は受口状口縁を持つもので、20の外面にはタタキ目が、内面にはナデ痕跡がある。21は外面に刺突列点文がある。近江地方から搬入されたものであろう[6)]。22～36は底部の破片であり、28の内面にはヘラケズリが、29の外面にはタタキ目が、30の外面にはヘラ磨きが、34の内面にはハケ目が、35の外面にはタタキ目、内面にはハケ目が、36の外面にはハケ目が施されている。

37～40は弥生土器の脚部で37・38は器種不明。39・40は高坏の脚部であり、37・38は短い脚部である。37は外面にハケ目がかすかに残り、脚部には直径約１㎝の穿孔がある。38は坏部と脚部の内面にハケ目がみられる。39の内面には絞り目がみられる。40は調整不明である。

以上が溝から出土した遺物で図化したものである。これらの遺物の時期は（他の細片も含めて）概ね弥生時代後期の中葉のものである。よって溝の埋没時期もこの頃と考えられよう。

c　竪穴住居の出土遺物（図25）

第３面で検出した竪穴住居から出土した遺物を図25に示した。図25－１～５は壺である。１

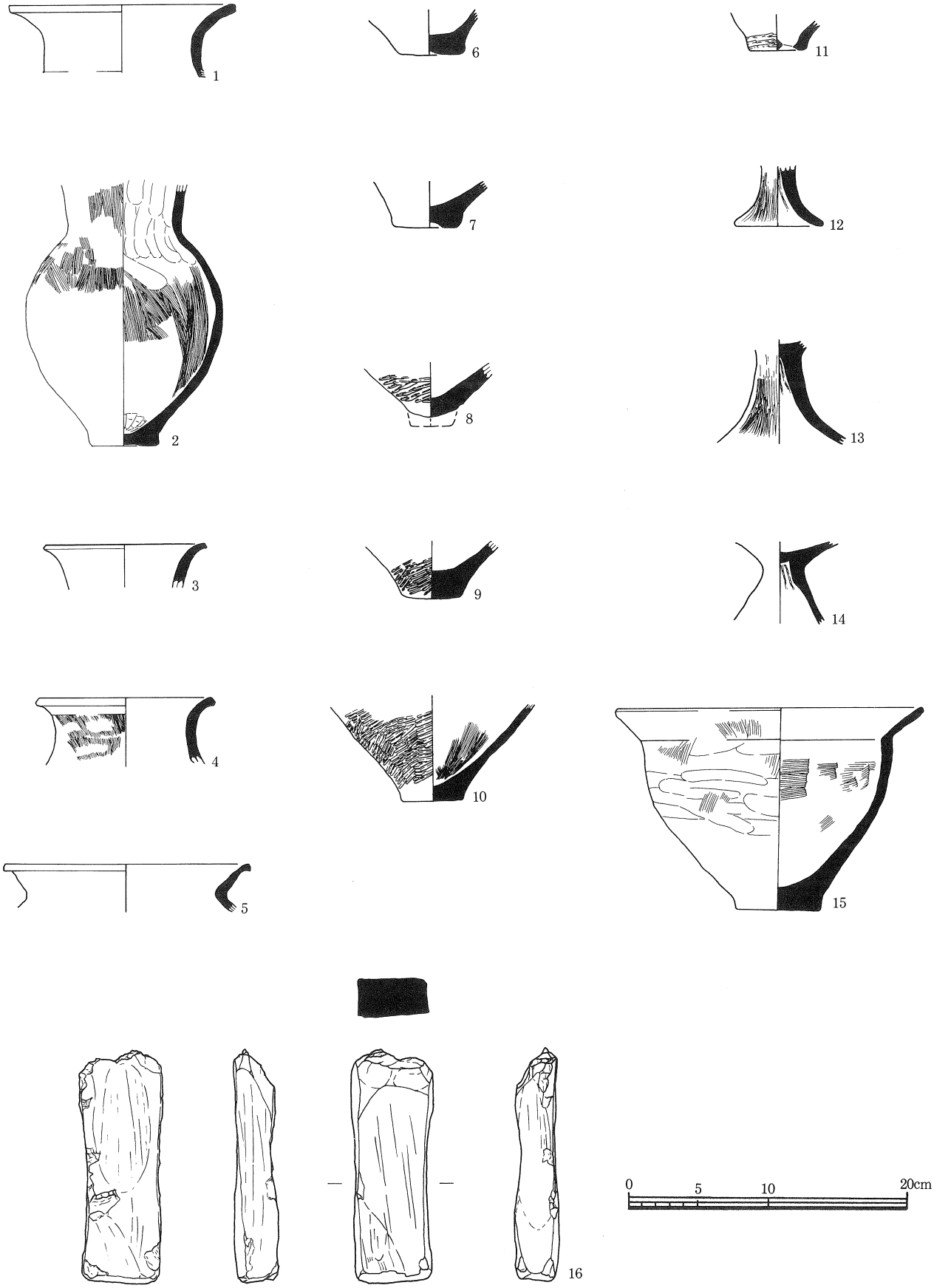


図25　真上遺跡第４調査地区の竪穴住居から出土した遺物

は直線的に立ち上がる口縁部の端部付近がやや水平にひらくものであり、端部には面をもつ。2の長頸壺は外面にはハケ目、内面には底部付近にヘラケズリ、体部にハケ目、頸部にはナデが施されている。4は口縁端部が外反し下方にやや肥厚しているもので、器壁表面は磨耗しているが、頸部の外面にハケ目がかすかに残っており、口縁部外面にヨコナデもみられる。5は体部から屈曲してのびる口縁部分で端部は丸い。6～11は甕である。6・7の底部は外面にくぼみがある。8・9には外面にタタキ目が、10は外面にタタキ目、内面にハケ目がある。11は外面にタタキ目があり、底部には直径約0.8㎝の穿孔がある。12～14は高坏である。12・13には外面にヘラ磨きが、内面に絞り目がみられ、14の内面には絞り目がある。15は鉢である。外面にはハケ目とヨコナデ、内面にはヨコハケがある。16は砂岩製の砥石であり、小口の一端を欠いている。表面には石の長軸方向に平行して擦過痕がみられ、かなり使用しているもので各面とも約5㎜の深さで凹面となっているが、とりわけ両側面の研ぎ減り方が顕著である。上面には自然面を留める部分が残っている。

以上の竪穴住居からの出土遺物は弥生時代後期のものである。先の溝から出土している遺物とはあまり時期差が認められず、両者は同時に存在していたと見るべきであろう。

d　（1）水利施設・（2～6）ピット・（7・8）土坑の出土遺物（図26）

（1）水利施設の出土遺物を図26－12～19に示した。すべて同一の規格で製作された瓦質の土管である。丸瓦の製作と同様に作られ、焼成時に燻されており外面は暗青灰～青黒色を呈する。内面には布目痕跡がある。土管を接続して利用する時に、差し込み口となる瓦の玉縁の部分はヨコナデし、それを受ける部分の内面はヘラケズリの後にヨコナデ、外面は端面の角部分をヨコナデして仕上げている。江戸時代後期のものである。

（2）ピット2の出土遺物は図26－1～3に示した。1は弥生土器の壺である。口縁部は体部から屈曲して外反気味に外上方に立ち上がり、端部付近で水平にひらく。口縁端部は丸くおさめる。2は受口状口縁をもつ甕である。外面にはかすかにタタキ目が残っていた。3は甕で、体部から屈曲して内湾する口縁部が付く。1は弥生時代後期のものである。2・3は時期不明である。

（3）ピット4の出土遺物は図26－4～6に示した。4・5は弥生土器の壺か甕である。4の外面にはヘラ磨き、内面にはハケ目がある。6は弥生土器の高坏である。5・6は磨耗により調整不明である。これらは弥生時代後期のものである。

（4）ピット11の出土遺物は弥生土器の甕で、図26－8に示した。体部からくの字形に屈曲する口縁部であり、口縁端部の上側を肥厚させている。端部に面をもつ。器壁表面は磨耗しており調整は不明で、弥生時代後期のものである。

（5）ピット19の出土遺物は弥生土器の甕で、図26－10に示した。体部からゆるく屈曲する

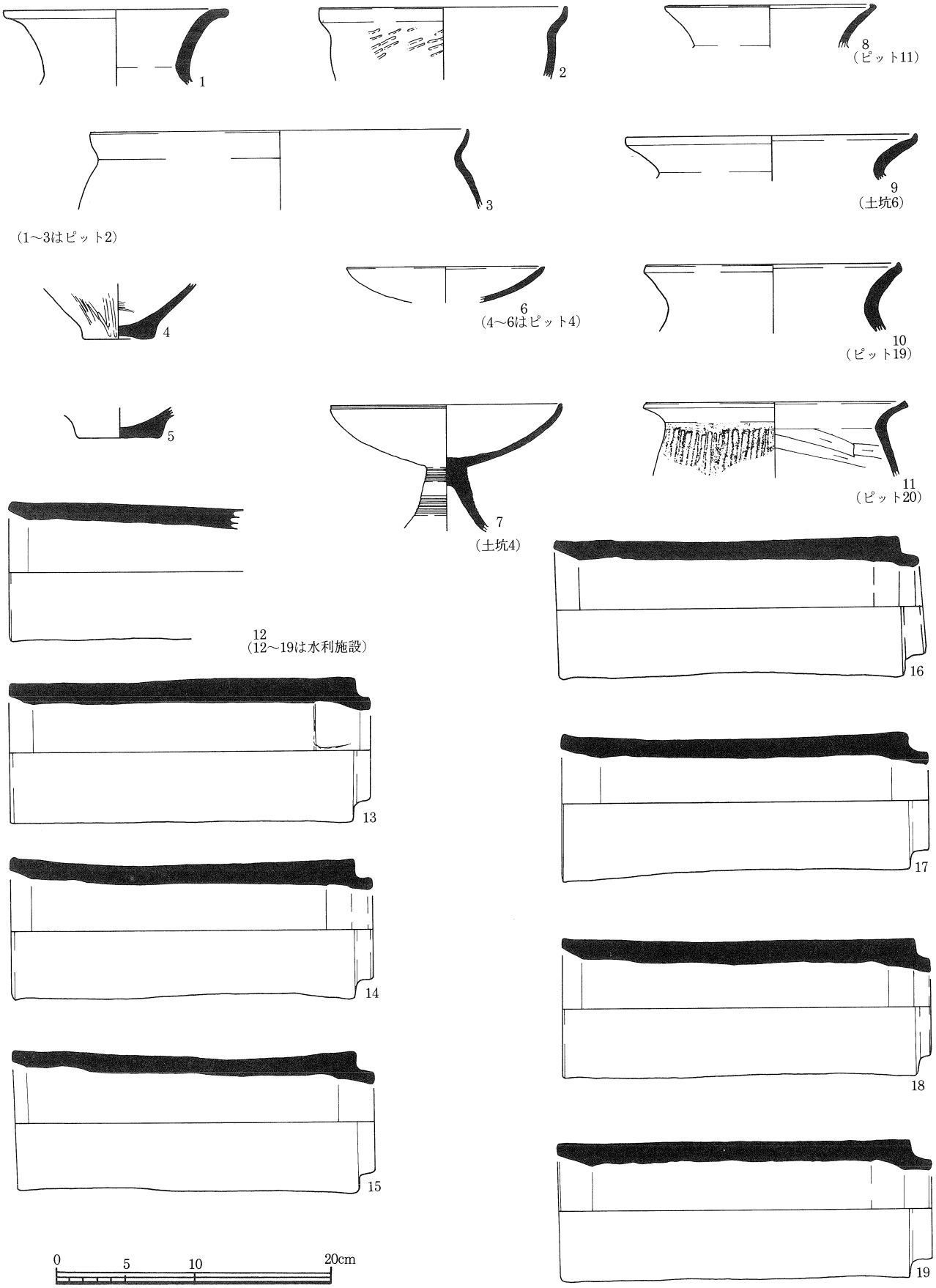


図26　真上遺跡第４調査地区の遺構から出土した遺物

口縁部の付くものである。口縁部の内側をヨコナデし、端部は面をなす。調整不明である。弥生時代後期のものである。

（6）ピット20の出土遺物は、図26－11に示した土師器の甕である。体部から口縁部にかけては肩部を持たず、長胴形の体部から直接屈曲させて外反する口縁部が付く。口縁端部は面をなす。外面には縦方向の粗いハケ目を体部に施し、口縁部はヨコナデする。内面は口縁部分にハケ目を施した後にヨコナデし、体部ではヘラケズリの後にヨコナデしているが、ヨコナデが粗雑なもので、ハケ目やヘラの痕跡が窺えるところがある。外面には体部から上の口縁端部にいたるまで煤が付着しいる。

（7）土坑4の出土遺物は図26－7に示す土師器の高坏である。内湾する単純な坏部に、裾部で広がる脚部がつく。坏部の端部は丸く、外面に1条の沈線を刻む。脚部の外面には1.2㎝で6本の沈線を2か所に施している。

（8）土坑6の出土遺物は図26－9の弥生土器の甕である。体部から屈曲して外上方へ延びる口縁部を付け、口縁端部は上方に肥厚し外端には面をなす。弥生時代後期のものである。

5　真上遺跡第5調査地区（図5・27、図版7）

30頁で触れたとおり、第4調査地区の西側半分で検出した第3面は、保存することとなっていたが、その一部分は水道管の移設工事に伴って掘削することとなり、工事部分の範囲内に関しては地山層まで調査する必要が生じた。図27に示した部分を調査対象地として、第5調査地区を設定して発掘調査を実施した。

層　序　現況では盛土が約1.2mあり、その下に暗褐色系の色調を呈したシルト層が約0.1m堆積していて、その下位に灰褐色砂礫層の地山を確認した。

遺　構　地山層上面を精査したが、遺構は検出されなかった。

遺　物　先述のシルト層から弥生土器や土師器の細片が出土した。

6　真上遺跡第6調査地区（図5・14－b・18・28－2～7、図版6・7）

層　序　堆積状況は図14－bに示す。1は現代の盛土、2は耕作土、3・4は洪水層、5は灰色砂混じり粘土、6～8は洪水層、9の灰色粘土と10の褐灰色砂混じり粘土は中世の耕作土で、11は地山である。このうち5の上面が第1面、11の地山層上面が第2面である。3・4の堆積をもたらした洪水の発生時期は以下のように考える。3・4の堆積層からは中世の遺物が出土していないことや、第1面の近世の畑を埋めていることから、近世の後半に河川の氾濫によりもたらされたものとできる。また、6～8の堆積をもたらした洪水は、埋没する耕作面にあたえる時期や、洪水層の上の畑の時期を勘案して鎌倉時代後期から室町時代前期にかけて発

生したと推測できる。真如寺川あるいは芥川の氾濫によるものであろう。

遺　構　図18にはこの調査地区で確認した第１・２面を示した。第１面は洪水により埋没した近世の畑である。畑の畝は高さ約0.3mで、横幅約0.3mの直方体になったものが、東西方向に幅約1.0mの間隔で平行に12条並んでいる。第２面も洪水で埋まった中世の畑であり、この面では足跡を確認した。人間のものと動物のものが混在しており、大蔵司遺跡第４調査地区で検出した足跡と類似している。南東から北西方向へ弧を描くように往復した痕跡が復元できる。

遺　物　図28－２～７に出土した遺物を示した。中世段階の洪水堆積より下の層からの出土である。２～４は土師器の皿で、口縁部のみをヨコナデする調整方法で仕上げられるもので、13世紀後半のものである。５～７は瓦器の椀である。５には内外面とも横方向に細かいヘラ磨きが施されている。６と７は磨耗しているために調整は不明である。６・７の高台部分は断面三角形の低いもので13世紀後半のものである。

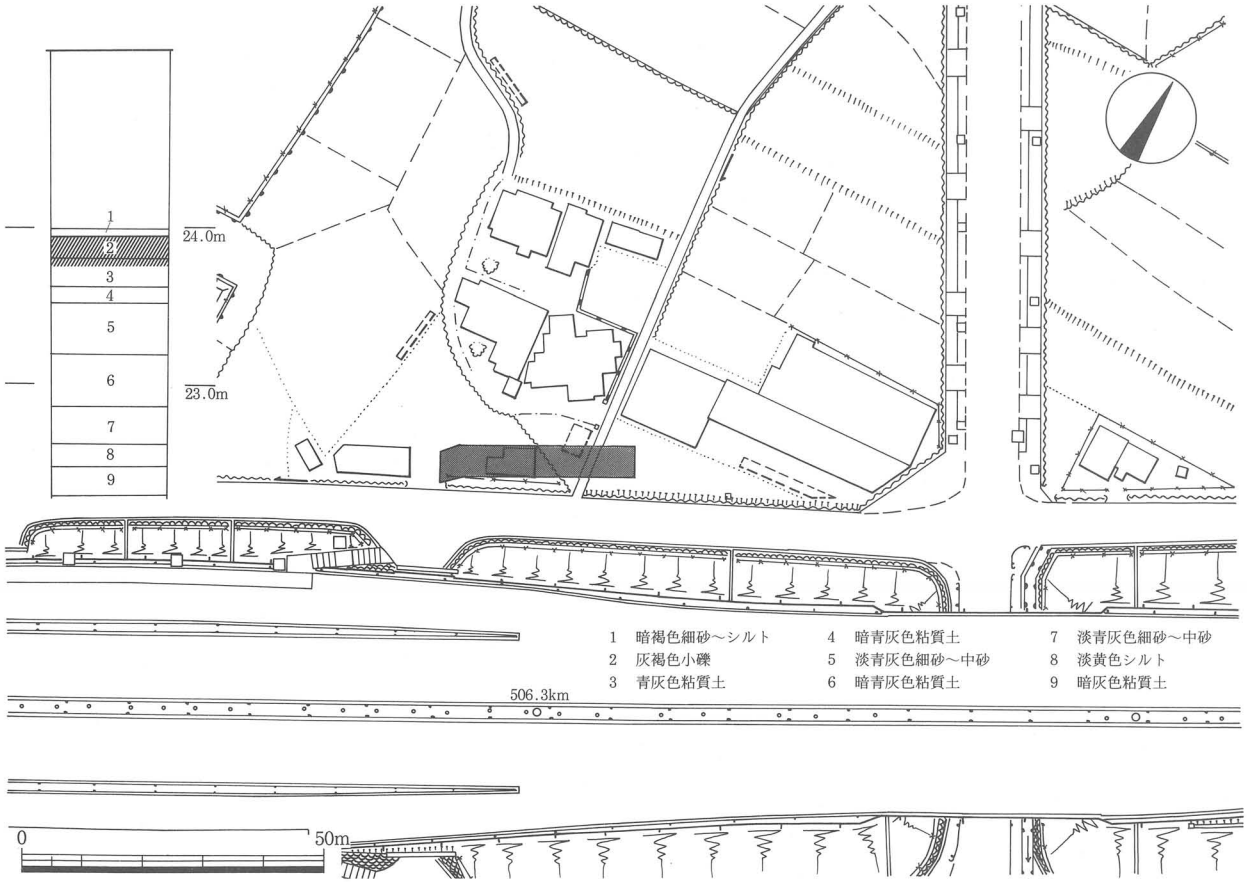


図27　真上遺跡第５調査地区の設定場所と土層柱状図

７　真上遺跡第７調査地区（図５・14－ｃ・18・28－１、図版６・７）

層　序　堆積状況は図14－ｃに示す。６の青灰色砂が第６調査地区で見た中世段階の洪水層に相当するものである。これより上の堆積が近世段階のものであり、下側の地山層までの堆積

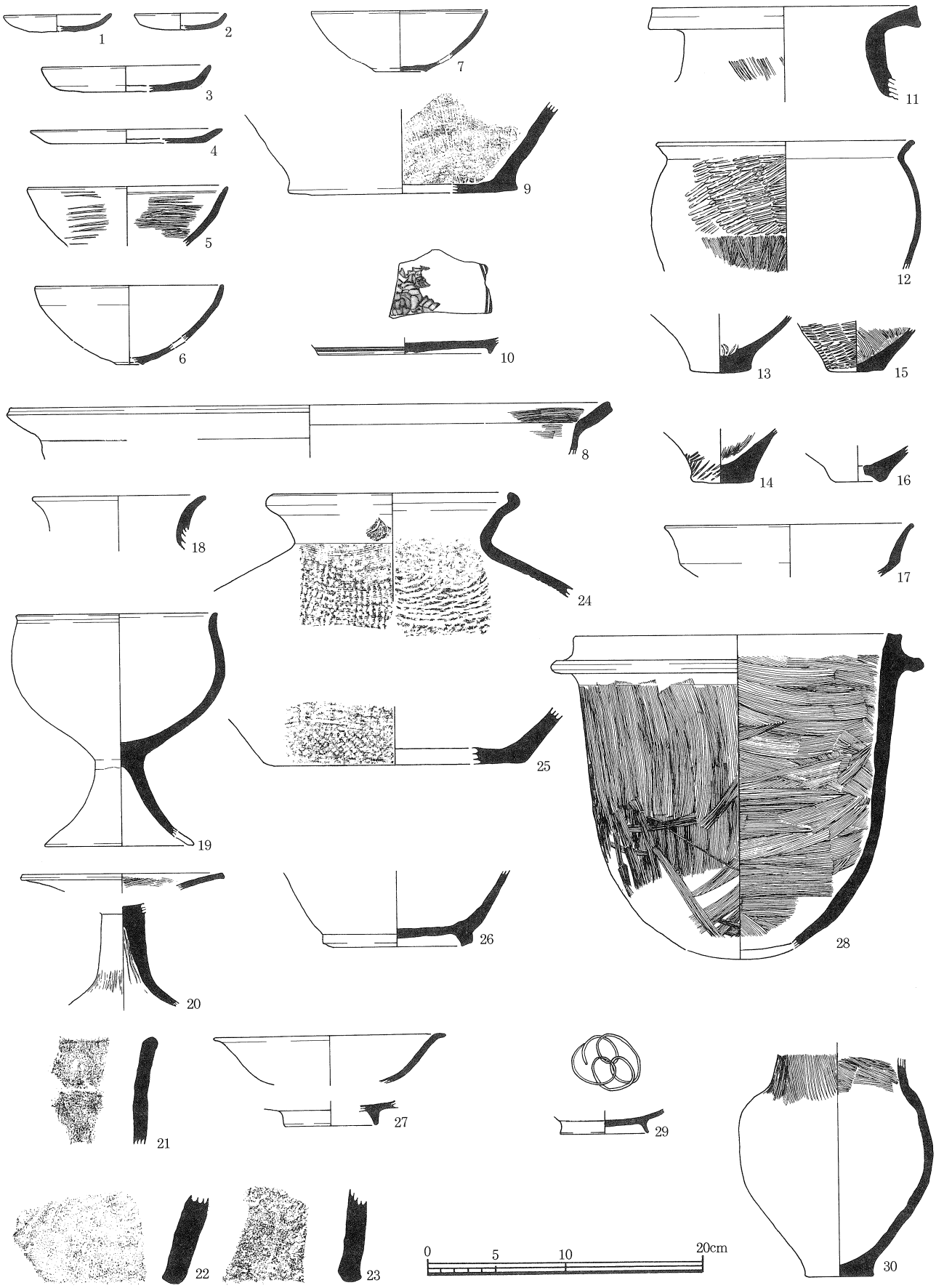


図28　真上遺跡の出土遺物　（1）第7、（2～7）第6、（8～30）第8調査地区

は隣り合う第６調査地区のそれらと同様であるが、その上にはこの調査地区にのみ７の緑灰色砂混じりシルトがある。包含層から出土する遺物は、４・５より上の層では陶器、磁器、瓦があり、中世の耕作土層である８・９からは、それぞれ土師器、瓦器が出土している。

遺　構　地山層の上面で多数の足跡と、東西方向の畦１条、南北方向の畦２条を検出した。隣り合う第６調査地区の第２面と続くので、これを第２面とする。南北方向の畦のうち東側の畦は南の端で途切れているが、耕作面内に続く足跡には削平を受けて途切れているような部分はないことから、水田の水口部分の可能性がある。

遺　物　遺物はすべて包含層から出土した小破片のみで、概ね13世紀のものである。図化し得た遺物は、図28－１に示した土師器の皿のみである。

８　真上遺跡第８調査地区（図５・18・28－８～30・29－ａ、図版８・19・20）

層　序　調査地区は東区と西区に分かれていて、東区の堆積状況を図29－ａに示した。西区の堆積状況は、東区の堆積の西半部分のそれらと比較してもあまり変化なく、ほぼ水平に堆積している。盛土、耕作土、床土（Ｉａ・Ｉｂ層）を除去したところが第１面である。地山層はほとんどの部分で黒色砂礫混じりシルト（Ⅸ層）であり、その上面が第２面である。地山の東端の約3.5m部分は暗褐色砂混じりシルト（Ⅷ層）に変化しているところがあり、この上面が第３面である。

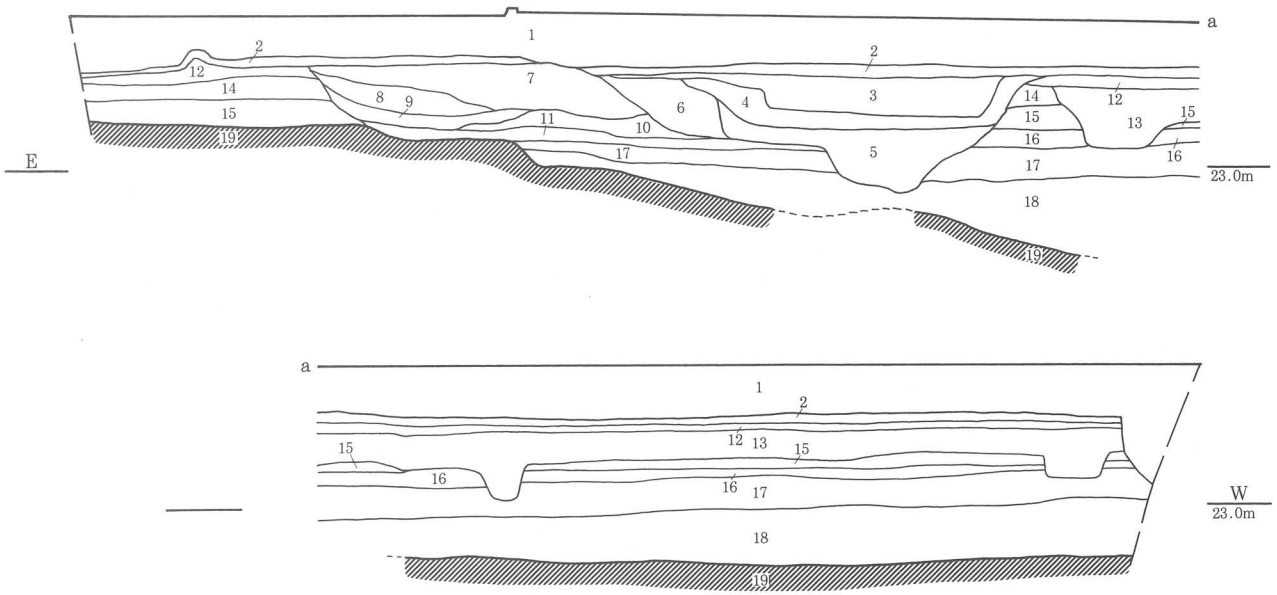
遺　構　図18には第１～３の遺構面を示した。

第１面では東区の中央付近でＴ字形をした暗渠を検出した。ほぼ東西方向の溝とそれに直交して南方向に溝が取り付く。これは先に述べた第４調査地区の水利施設に続くもので、Ｔ字の接続部分より西側には、幅と深さが共に約0.1mの暗渠がある。Ｔ字の接続部より東側と南側へ流れる暗渠に分かれる。東側の暗渠は幅が約1.0m、深さが約0.4mであり、南側の暗渠は幅は約0.4m、深さが約0.2mである。これらは両側壁と蓋に石を用いている。

第２面は先述した暗渠より西側の部分で、足跡を持つ中世の耕作面である。検出した足跡には偏りが見られ、そこには植物の痕跡も多く含まれているので、粗密になっている部分が削平によってできたものでないとすれば、洪水の際の休耕地と耕作地の違いかもしれない。

第３面では土坑１とピット１～６を検出している。なおピット５から弥生時代後期の壺（図28－30）が出土し、その他の各遺構からは土師器や弥生土器の細片が出土した。土坑１は隅丸長方形で長辺約1.3m×短辺約0.8m×深さ約15㎝を測る。ピット１～６はいずれも円形ないしはやや長円形を呈しており、直径約0.4～0.5m×深さ約0.3mである。遺構の埋土は暗灰～暗赤灰色のシルトであった。土坑１以外は、ほぼ同時期の遺構と考えている。

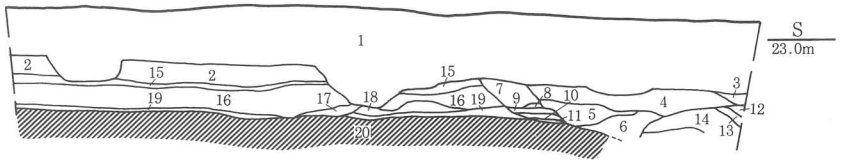
遺　物　弥生土器、土師器、埴輪、須恵器、灰釉陶器、瓦器、土師質土器、陶器、磁器、瓦



(a). 第８調査地区の南壁面図

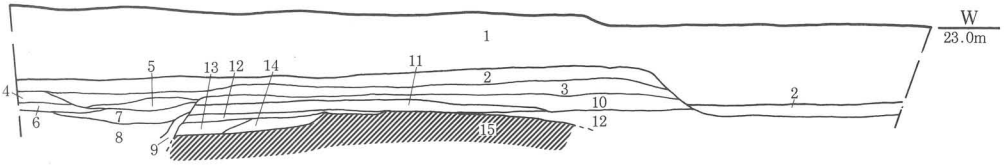
1 盛土(含コンクリート)
2 耕作土
3 黄褐色砂混じりシルト
4 オリーブ黒色砂混じりシルト
5 灰色粘土
6 灰色砂礫
7 灰色砂礫混じりシルト
8 灰色砂礫
9 灰色砂混じり粘土
10 オリーブ灰色砂礫混じり粘土
11 黒褐色砂混じりシルト
12 床土
13 明黄褐色砂
14 灰色砂混じりシルト
15 暗緑灰色砂混じりシルト
16 灰色砂混じり粘土
17 オリーブ灰色砂混じり粘土
18 黒褐色砂混じり粘土
19 黒色砂礫混じりシルト

(b). 第９調査地区の東壁面図



1 盛土
2 耕作土
3 灰褐色砂
4 褐灰色砂混じりシルト
5 緑灰色砂
6 暗青灰色砂
7 灰色砂
8 褐灰色砂混じり粘土
9 灰色シルト
10 緑灰色砂
11 灰色砂混じり粘土
12 褐色砂
13 灰オリーブ色砂
14 緑灰色砂
15 床土
16 褐色砂礫混じり粘土
17 黒褐色砂混じり粘土
18 にぶい橙色礫混じりシルト
19 黒色砂混じり粘土
20 明褐色礫混じりシルト

(c). 第９調査地区の南壁面図



1 盛土
2 耕作土
3 床土
4 緑灰色砂
5 灰オリーブ色砂
6 褐色砂
7 灰色砂
8 灰色砂礫
9 灰色砂
10 灰色砂混じりシルト
11 緑灰色砂
12 暗緑灰色砂混じりシルト
13 暗灰色砂
14 灰色砂混じり粘質土
15 灰色砂混じりシルト

図29　真上遺跡の壁面図　（a）第８、（b・c）第９調査地区

が出土しており、これらは細片がほとんどであった。主なものを選び図28－８～30に示した。８～10は図29－ａの12から、11～17は調査地区の東端約4.0m部分の側溝から、18～29は第３面の遺構精査作業時に、30はピット６からそれぞれ出土した。

図28－８は土師質土器の鍋である。内面にヨコハケが施されている。９は陶器製の摺り鉢であり、内面には１単位が1.2㎝幅で10本のおろし目がある。10は伊万里焼の皿である。

11は弥生時代後期の壺である。頸部は体部から緩やかに屈曲し内傾してたちあがる。口縁部分は水平方向に開き、端部は上下に拡張している。外面にハケ目がかすかに見られる。12～15は弥生時代後期の甕である。12は体部から、くの字に屈曲して外上方へ短く外反する口縁部を付けるものであり、口縁端部は丸い。体部の外面下側にタテ方向のハケ目を、その上にはタタキ目がみられ、口縁部分はヨコナデを施している。13～15は底部で、13には内面にハケ目がある。14と15には外面にタタキ目が、内面にはハケ目がある。16は壷か甕で底部の中央には直径0.7㎝の穿孔がある。17は弥生時代後期の高坏である。底部から稜をもって外反する口縁部をもち、端部は丸く収める。磨耗により調整は不明である。

18は弥生時代後期の壺で、体部から緩やかに屈曲して、外反しながらたちあがる口頸部を付けるものであり、端部は丸く収める。19は口縁部をわずかに外反させる鉢に脚を付けたものである。20は17と同様の高坏である。21～23の埴輪はいずれも焼成堅緻であり、21が口縁部、22・23が底部の破片である。24～26は須恵器で、24・25は甕である。24の口縁部は球形の体部から屈曲させて上外方にまっすぐたちあがり、端部を上方へ折り曲げる。内面には同心円文、外面には格子状タタキ目があり、屈曲部付近の外面にはヘラ記号か、あるいは「介」の字が刻まれている。25は平底の甕で外面にはタタキ目があり、内面は同心円文をナデ消している。26は台付壺の底部であろう。27は灰釉陶器で、猿投窯産の９世紀後半のものである。28は土坑１の平面形の検出作業時に出土したものであるが、出土層位の状況が判然としなかったものである。土師質の羽釜で外面にはタテハケが、内面にはヨコハケが施されている。29は12世紀頃の瓦器椀である。しっかりした高台が付き、内面には連結輪状のヘラ磨きを施す。

30はピット５から出土した弥生時代後期の壺である。体部は長胴形で最大径を上位にもち、頸部はゆるやかに屈曲してまっすぐにたちあがる。調整は頸部付近にかすかに残り、外面に縦方向のハケ目、内面には横方向のハケ目が見られる。

９　真上遺跡第９調査地区（図５・19・29－ｂ，ｃ・30・31－１～４、図版９・10・20）

第９～12調査地区までは名神高速道路の南側に設定した調査地区である。

層　序　堆積状況は図29－ｂとｃに示した。図29－ｂの16や図29－ｃの10の上面が近世の遺構面であった。ｂは20、ｃは15が地山層であり、その上面が第２面である。この面では２段の

落ち込みを検出した。地山層の上位層から近世の陶器や磁器や瓦が出土している。

遺　構　第１面では調査地区の中央に東西方向の溝を検出した。幅約0.5m深さ約0.2mのもので、両端とも調査地区外へのびている。この溝は護岸のため杭を打設している。この溝の南辺の一部には、杭に縦に割いた竹を用いて網代状に編んだ部分や杭に横材を渡した部分がある。この部分は次に述べる土坑と一連のもので、水利施設の機能をはたしていたものと考えられる。調査地区の南東の角端部分には、瓦質の土管を４本つなぎ合わせた水利関連の機能を持つと考えられる土坑があった。土管は南北方向につながれていて、北向きに高くなる勾配がつけられている。４本のうち北端の１本は半分に切ったものをつないでいた。

第２面は約0.2mの段によって３段に分かれている。北側が高くなる階段状で、耕作に関わる造成であろうか。

遺　物　出土した遺物には陶器、磁器、瓦があるが、いずれも細片で近世のものである。図31－１～４に図示したものは、第１面の暗渠に使われていた瓦質の土管である。４が北端にあり、１が南端にあったものである。ほぼ同型であるが、やや長短に差が認められる。丸瓦の作り方と同様の方法で筒瓦を仕上げ、半裁せず土管として使用したものである。内面には布目痕跡があり、ナデて仕上げている。つなげて使うときに差し込み口となる丸瓦の玉縁部分はヨコナデし、それを受ける部分の内面はヘラケズリ後ナデ、外面は端面をヨコナデして作る。焼成時に燻しており外面は暗青灰色を呈する。焼成状況は堅緻なものである。

10　真上遺跡第10調査地区（図５・19・31－５，６・32－ａ、図版11・20）

層　序　堆積状況を図32－ａに示した。５は耕作土を覆う洪水層である。地山は６の黒色粘土である。第１面は４の上面で、地山上面が第２面である。地山より下の堆積は粘土とシルトと砂の互層となり、河川堆積物の様相を示す。

遺　構　第１面では暗渠を３条とピットを７基確認した。暗渠は東西方向のもの２条と、南北方向のもの１条である。東西方向の暗渠のうち南側のものは幅約0.4m、深さ約0.2mを測り、約10㎝の石が充填してあった。残る暗渠２条は丸太を利用した暗渠である。溝の両辺沿いに直径約0.2m、長さ約2.5mの丸太を這わしておき、それらに直交するように別の直径約５㎝、長さ約40㎝の丸太材を渡したものである。この暗渠の構築方法は、大蔵司遺跡の第３調査地区の暗渠と同じ方法であるが、この調査地区の暗渠の構築材は、直径の細い材木を大量に用いて蓋とするもので、それぞれを隙間なく並べている。

ピットはすべて直径約30～35㎝、深さ約20～25㎝である。灰褐色砂混じりシルトが埋土である。ピットは調査地区の西側にあり、約1.0m間隔に３基ずつが南北２列で約0.5m離れて平行に並ぶ。これは溝であった部分と考えている。すでに削平されているが杭により護岸された溝

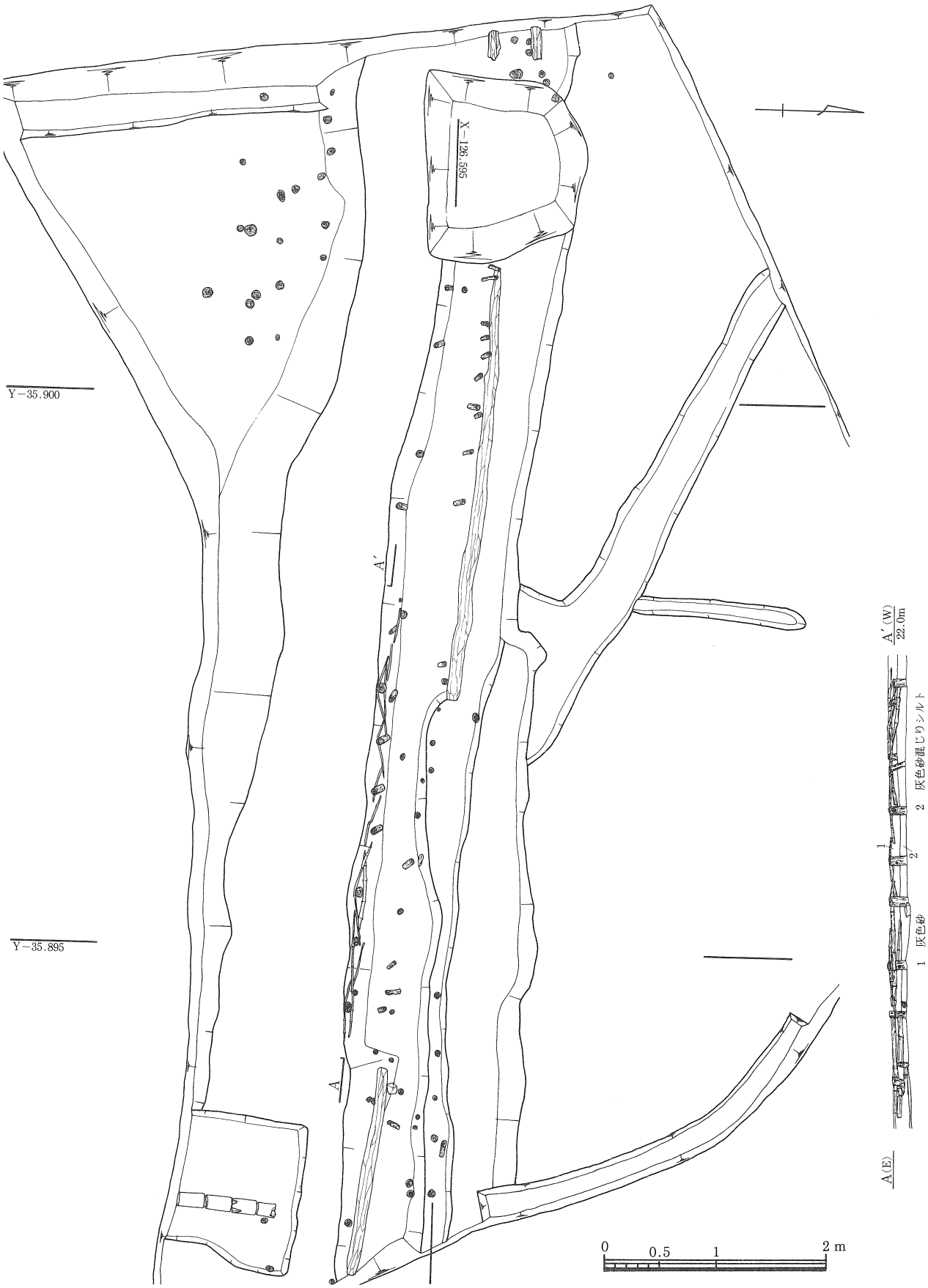


図30　真上遺跡第９調査地区の平面図　第１面

がこの位置にあって、削平された後には杭の痕跡だけが残ったものと推定される。

第２面ではごく一部に足跡が見られたのみである。上面を覆う洪水層が遺構面を削平した可能性もある。

遺　物　層序で示した図32－ａの４から陶器、磁器、土錘が出土しているが、いずれも細片であったため、図化できたものは２点である。図31－５は中国製の青磁碗であり、13世紀の龍泉窯系のものである。６は土師質の土錘であり、中心部の紐通し穴は直径約1.2㎝である。一方の端は斜めにすり減っている。また、表面も同様に磨耗しており、調整不明である。その他の堆積層や遺構からは何も出土していない。

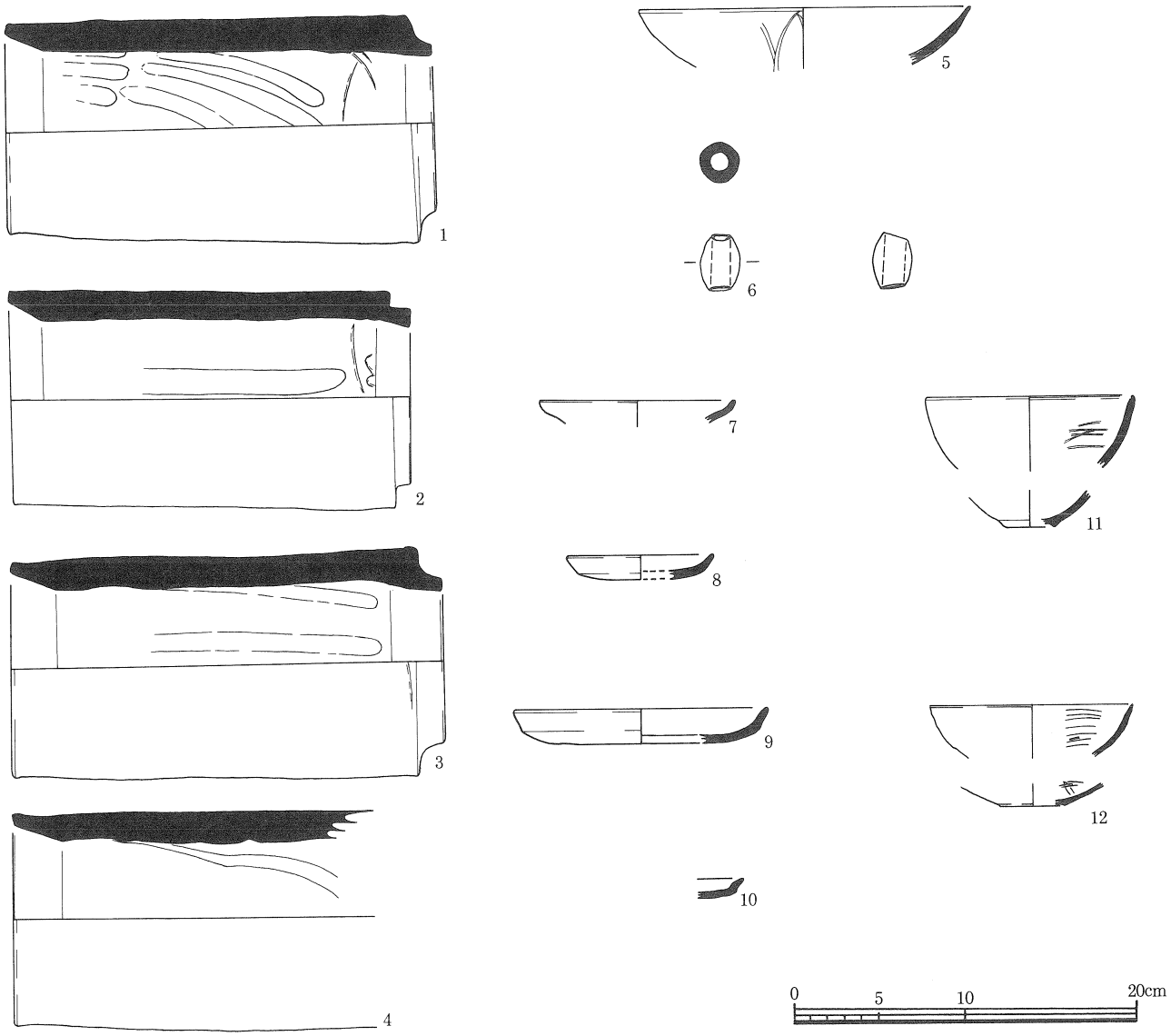
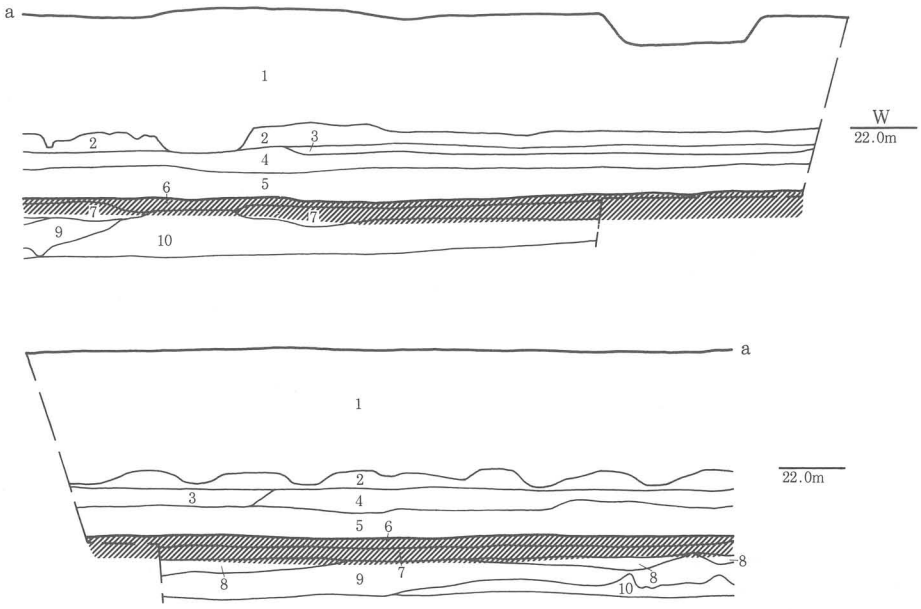


図31　真上遺跡の出土遺物　（１～４）第９、（５・６）第10、（７～12）第12調査地区

11　真上遺跡第11調査地区（図５・19・32－ｂ、図版11）

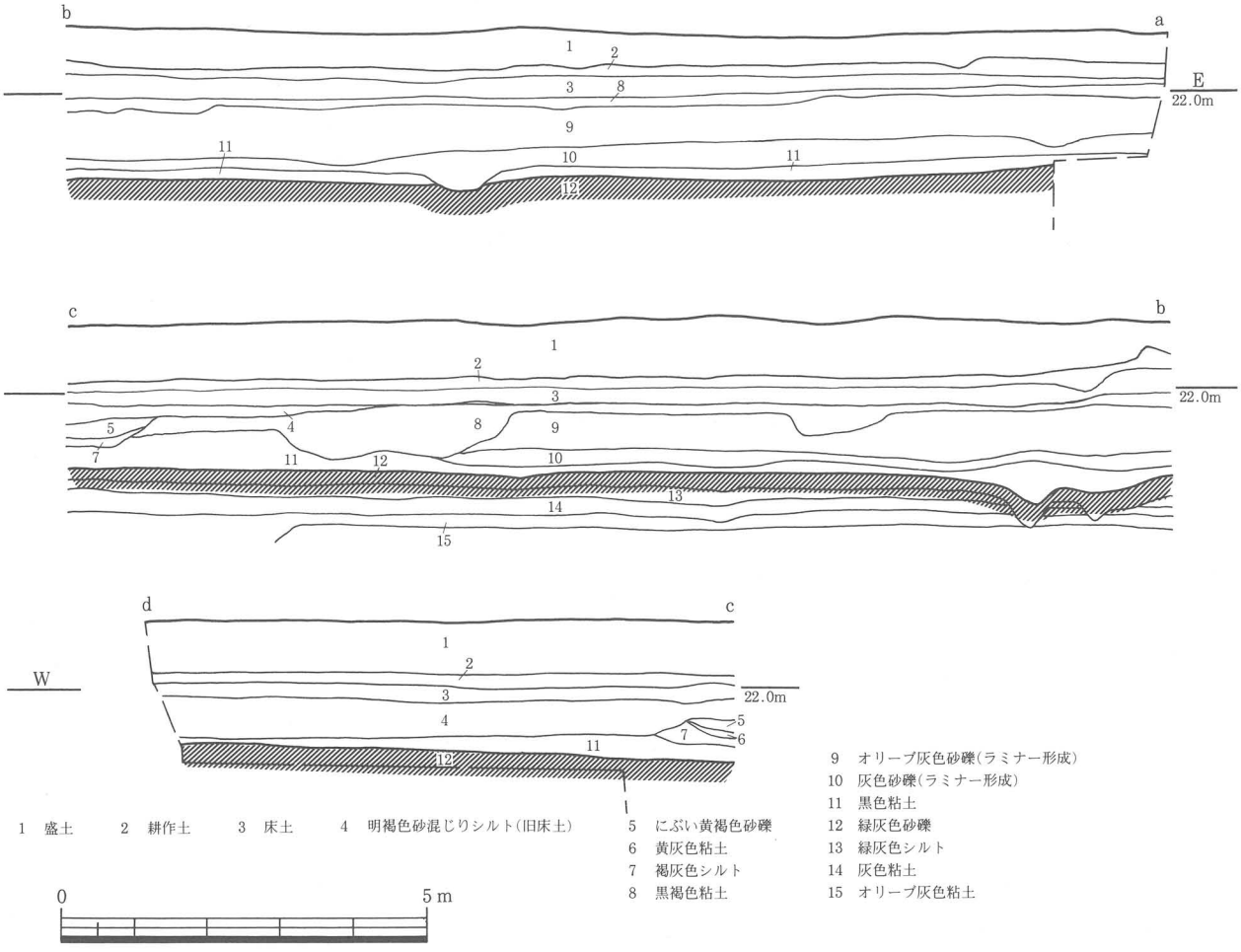
層　序　堆積状況を図32－ｂに示した。８または４の上面が第１面である。12の上面が第２

(a). 第10調査地区の南壁面図



1 盛土
2 耕作土
3 床土
4 明褐色砂礫混じりシルト
5 灰色砂礫(ラミナー形成)
6 黒色粘土
7 黒褐色粘土(植物遺体含む)
8 青灰色砂混じりシルト(ラミナー形成)
9 灰白色砂
10 灰色砂混じりシルト

(b). 第11調査地区の北壁面図



1 盛土　2 耕作土　3 床土　4 明褐色砂混じりシルト(旧床土)
5 にぶい黄褐色砂礫
6 黄灰色粘土
7 褐灰色シルト
8 黒褐色粘土
9 オリーブ灰色砂礫(ラミナー形成)
10 灰色砂礫(ラミナー形成)
11 黒色粘土
12 緑灰色砂礫
13 緑灰色シルト
14 灰色粘土
15 オリーブ灰色粘土

0　5 m

図32　真上遺跡の壁面図　（a）第10、（b）第11調査地区

第12調査地区の南壁

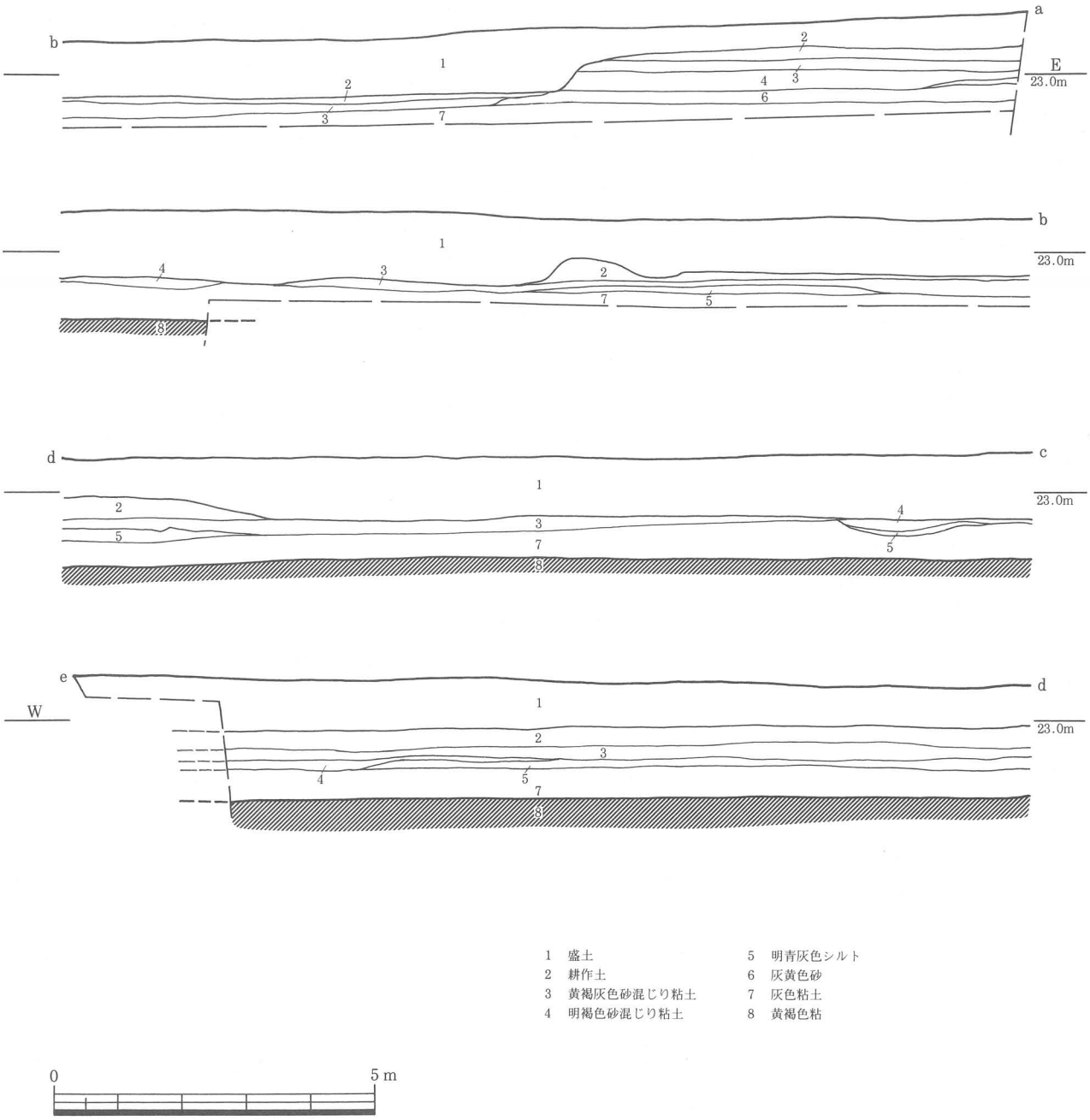


図33　真上遺跡第12調査地区の壁面図

面である。11は周辺の調査地区の調査成果から判断すると中世の耕作土で、９と10がそれを覆う洪水層である。地山層より下の堆積はシルト、粘土、砂礫が互層になっていた。これは、第10調査地区と同様であり、河川堆積物の様相を呈している。地山層からは著しい湧水がみられた。

遺　構　第１面では溝２条と暗渠２条を確認した。溝２条は南北方向のもので、調査地区の中央から西側の部分で検出した。西側の溝は幅約1.2m、深さ約0.4mを測り、中央付近にある溝は幅約1.5m、深さ約0.5mを測る。どちらの溝も埋土は黄褐色系の色調の砂混じりシルトで

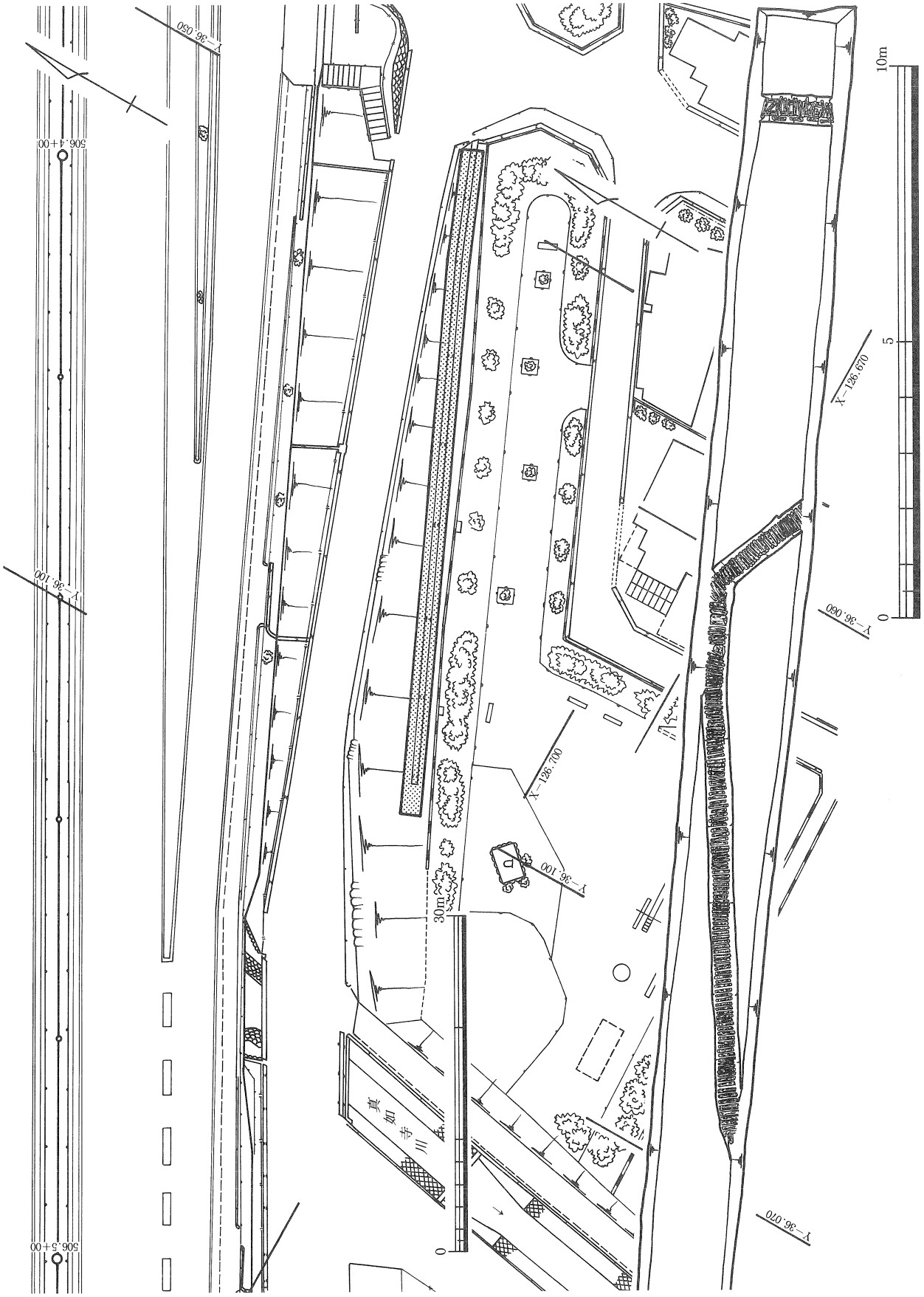


図34　真上遺跡第12調査地区の暗渠

あった。暗渠２条は南北方向のものと北東から南西の方向にのびるもので、南西の端で南北方向の暗渠と合流している。暗渠は、隣接する第10調査地区の第１面検出の暗渠と同様で、その際に利用している木材も同じものである。第２面では南北方向の溝を多数検出したが、これらはすべて自然流路である。

遺　物　この調査地区では堆積層および遺構のいずれからも遺物の出土はなかった。

12　真上遺跡第12調査地区（図５・31－７～12・33・34、図版12・20）

層　序　堆積状況を図33に示した。地山層は８の黄褐色粘土である。真上遺跡内で、洪積層上面に一般的にみられる黄褐色系の粘土層地山があるのは、この調査地区のみである。第１面は耕作土と床土を除去した面であり、３の上面である。７の灰色粘土は、出土した遺物から考えると、中世の耕作土層である。その西端の一部分では、洪水層である６の灰黄色の砂が覆っている。

遺　構　第１面では暗渠３条を確認した。ほぼ南北の方向のものと、北東から南西に続くもの、北西から南東に続くものの３条である。第10・11調査地区で確認した木材使用の暗渠と同様のものである。地山上面では遺構を検出しなかった。

遺　物　出土した遺物には地山を覆う土層から土師器、瓦器、陶器が、耕作土・床土から磁器、瓦が出土している。図31－７～12に主だったものを選んで示した。７～10は土師器の皿であり、７・10には口縁部に歪みがある。すべて平らな底部にわずかに外反する口縁部を付けるもので、口縁部をヨコナデし底部には凹凸を残したまま調整をしない、いわゆるｅ手法と呼ぶ調整のものである。また、11・12は瓦器の椀で、内面にヘラ磨きがある。高台部分が断面三角形の低いものであることから、これら土師器の皿と瓦器の椀は13世紀後半のもので、図33の７の灰色粘土層から出土したものである。

註）

1．調査において洪水層であると判断したのは、不整合な重なりを持つラミナーを形成していることが確認できることを根拠とするものであるが『高槻市文化財年報』昭和56年12月　の38．大蔵司遺跡所見に「芥川の濫乱原と思われる堆積砂礫内に若干の遺物がみとめられることから」とありこの所見を記した高槻市立埋蔵文化財調査センター所長 冨成哲也氏に現地で堆積層序を確認して頂き、洪水による濫乱原の堆積であるとの見解を得ることができたので本書においてはこれらを洪水層と表現することとした。
2．現大蔵司高架橋のことである。
3．小林健太郎原図『高槻市史』第３巻　史料編Ⅰ　付図「高槻市大字・小字図」による。
4．註１と同じ理由による。
5．註１と同じ理由による。
6．高槻市立埋蔵文化財調査センターの宮崎康雄氏よりご教示を得た。

第Ⅳ章　総　括

大蔵司遺跡は昭和52年（1977年）以降、約20年にわたって高槻市立埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行なってきた。この間に発掘調査された場所は20か所以上となり、それらの調査成果をもとにすれば、弥生時代から中世や近世にいたる集落の歴史変遷に一定の見通しを得ることができる。今回の発掘調査成果は、とりわけ大蔵司遺跡の南東部分の様相を明らかにしたといえる。

真上遺跡では今回の発掘調査が初めての本格的な調査である。ここで得ることのできた成果とは、拡幅工事起業地内という限定された範囲内のものであり、調査地の外にも遺構は面的な広がりを持つことが十分に予想される。この調査成果のみで、遺跡の全体像を言及することはできないが、可能な範囲で真上遺跡の変遷を辿っておきたい。

第１節　大蔵司遺跡（図３・10－１、表１）

大蔵司遺跡の調査成果は以下の４点のようにまとめることができる。

１　古墳時代以前については、今回の調査成果では包含層出土の遺物１点（図10－１の弥生土器の甕）のみである。

昭和53年に高槻市立埋蔵文化財調査センターが実施した、大阪府立芥川高校の体育館とプールの建設に先立つ発掘調査によって、遺跡内で最古となる弥生時代後期の住居が、図３のＲ（表１の２）地点で検出されている。この地点の現況の地盤高は海抜24.5m付近であり、今回の調査で弥生時代後期の甕が包含層から出土した、大蔵司遺跡第４調査地区のそれは海抜24.0m付近である。両地点の遺構面の地盤の比高差は約1.5mある。1955年撮影の航空写真（図版扉）をみれば図３のＲ地点の周辺は、条里割り地形に沿って正方位の地割りが保たれており、地形的にみて洪積段丘の下位面の縁辺部であり、地盤は安定しており弥生時代後期には集落が営まれたものであろう。対する第４調査地区の周辺は、乱雑な地割りである。この乱雑な地割りの部分とは、すぐ東側を南流している真如寺川の氾濫原にあたり、同時期には地盤が安定した状態ではなかったので、遺構及び遺物包含層も形成されなかったものであろう。出土した弥生土器の甕は、表面がやや磨耗した状態であり、二次的な堆積である可能性が大きい。

２　真如寺川に近い第４調査地区では、古墳時代の遺物包含層が存在することが判明した。その他の調査地区には包含層が残っていなかった。

先に述べた昭和53年に行なわれた府立高校内の調査で、古墳時代前期の遺構が検出されているのは、図３のＲ（表１の２）地点とＢ地点（表１の９）である。Ｂ地点では、弥生時代後期から古墳時代前期までの土器が出土した溝が検出され、この溝は埋土を上下に分け、下層から

弥生土器が、上層から古墳時代の土器が出土している。R地点は先に見たとおり弥生時代後期の住居があり、それらとは少し離れた場所に古墳時代の住居がある。これは、弥生時代の後期から古墳時代の前期まで、集落が継続していることを示していると考えれば、溝の埋土も同様にとらえられるものである。

遺跡周辺の段丘地形の利用と低地側の開墾状況は、古墳時代の前期ではあまり変化がなかったことを示すものではなかろうか。第4調査地区で見られる堆積層のうち、真上遺跡の成果で検証してきた、中世の耕作土と考えている灰色粘土層の下には砂礫層が堆積しており、さらに下の暗灰色粘土層が古墳時代の耕作土である可能性があるといえる。同時代においては、これまでに考えられていた耕作地の広がる範囲よりも、さらに南側に広がっているといえるのではないだろうか。

古墳時代以降、飛鳥・奈良・平安時代については、遺構や遺物といった考古学的資料を得ることがなっかったので、今回は触れることはできない。周辺の調査では奈良時代の掘立柱建物が図3のT地点（表1の16）から検出されており、前時代の遺構を切り込む形で柱穴が存在し、集落は位置的に同一の場所を選んでいるが、時間差がありその継続性は考えにくい状況といえる。

また、同時代の遺構としては、溝が図3のU地点（表1の5）で確認されている。この溝からは多量の木製品である祭祀具、木札、食膳具が出土しており、大蔵司のムラが祭祀を取り扱う重要な役割を持っていたことを示すものである。平安時代のピット群は図3のK地点（表1の13）で検出されている。建物としてのまとまりは見られないようであるが、遺構の密集具合から判断するなら、ここは当時のムラの一部分ととらえるべきであろうか。

これらを総合してみた場合、段丘面上に展開する集落はこの時期に、従来では地理的な条件に制約されていた活動範囲を、支配者階級層と関係をもつことによって得た力により広げたと考えたい。

3　調査地区のほとんどは、近世段階で潅漑により耕地として開墾されており、中世の水田耕作を確認した部分は、真如寺川に近い第4・6調査地区であった。

中世の鎌倉時代以降となると、今回の調査でも第4・6調査地区では水田の畦を確認しており、先の時代に広がった耕地のさらなる拡大が進められた時期とみてよいだろう。この第4調査地区では、同時期の耕作土を覆う洪水層が確認されているので、大蔵司一帯は古墳時代以降に水害による被害を受けた地域であることが判明した。古代末の平安時代の集落が、それまで踏襲されてきた図3のR地点を離れて北西へ移動するのは、これも一因となっているのであろうか。

4　今回調査対象となった調査地区の地山層は、砂か礫を主体としたものであり、さらにこの砂礫層を掘り下げた所見から、これらは扇状地地形の河川堆積物であることが判明した。

一方、既往の調査地の地山層は、粘質土、砂質土、土といった表記がなされている。黄灰色から褐色系の色調を呈しており、すべて洪積層と考えられるものである。このことはすでに述べたように段丘面と扇状地の差を反映している。大蔵司遺跡の南東部分の扇状地地形に耕地が形成されるのは、中世の鎌倉時代以降であり、近世段階に入るとほぼ全面に広がったものと推定できる。

第2節　真上遺跡

真上遺跡の調査成果は以下の3点のようにまとめられる。

1　真上遺跡では竪穴住居をはじめとして、弥生時代後期の遺構を確認したことによって、同時代の集落が存在していたことが判明した。集落の広がり方は大蔵司遺跡の場合と同様に地形的な制約から、一定の場所に弥生時代以降中世までの各時代ごとのムラの展開が見られるが、それぞれは必ずしも継続的なものではなかったようである。

真上遺跡の弥生時代から平安時代までの遺構には、第4・8調査地区に存在する第3面で確認した遺構があげられる。この遺構面は弥生・古墳・飛鳥・奈良・平安までの各時代が複合していたために、遺構のすべての帰属時期を判別することはできなかったが、出土遺物から遺構の時期を判断できるものが各時代ごとにいくつかある。これらを基にして遺跡の変遷を述べる。

真上遺跡で最古となる弥生時代後期の遺構は、第4調査地区の竪穴住居と溝、第8調査地区のピット5がある。大蔵司遺跡で同時期の遺構が確認されている地点[1)]から約300m離れており、そのほぼ中間に南流する真如寺川をはさんでいる。現段階では、隣接するムラという位置関係にあるとする以外は不明で、今後の調査によって真上集落の資料が増加すれば、弥生時代後期の真上遺跡も詳細が明らかになると考えられる。真上遺跡の集落立地については、大蔵司遺跡の場合と同様に地形的な制約と真如寺川の形成する氾濫原が、大きく影響を及ぼしているといえる。周辺の地形は、北および北東側に高槻丘陵が取り囲む。弥生時代後期に台地部分の端に安定地を選び、低地側にある真如寺川の氾濫原に耕地を求めたものと考えておきたい。大蔵司遺跡にも、同時期には同様の動きがあり、これは弥生時代後期における集落数の増加という現象と規を一にするものであろう。

続く古墳時代の遺構には第4調査地区の土坑4があり、後期に属する。弥生時代後期の遺構とは時間的空白があるが、村落としての占地理由は前時代と同様であったと考えておきたい。

奈良時代には、真如寺川から西側に約30mの図3に示す大蔵司遺跡U地点に同時代の溝があり、その溝は祭祀に利用している。真如寺川の氾濫による河川堆積物が扇状地地形上の川の両岸に自然堤防を形成していたのであろうか。ならばすでにこの時期には大蔵司と真上の間に、真如寺川の自然堤防が高まりとなって存在し、両遺跡を隔てていたと考えることができる。

真上遺跡第４調査地区の第３面と、先に推定した真如寺川の自然堤防までは約100mとなっていて、そこには当然、耕作地も自然堤防の近くまで広がっていたと考えられる。

真上遺跡の奈良時代と平安時代の遺構には、それぞれ土坑や柱穴、ピットがある。集落としての占地理由は前時代や大蔵司遺跡と同様であろう。ただし、隣接の大蔵司遺跡では平安時代の遺構が離れた場所で密集していたのに対して、真上遺跡内では、奈良時代と平安時代の遺構が場所を移ることなく密集しているという状況を確認した。安定した地盤の平坦地部分が狭かったのだろうか。

２　中世の耕作土は洪水層に覆われている部分と、複数の耕作土が重なる部分に分かれる。水害による耕作地の放棄と、耕作継続の差は小真上庄の安堵に影響していると推測できる。ここでは以下のａ～ｅにより、14世紀に安堵された高野山金剛三昧院領の小真上庄を検討する。[2)]

ａ　中世における洪水の影響とその時期

中世の耕作土が洪水層に覆われていることを確認した調査地区は、大蔵司遺跡の第４調査地区と真上遺跡の第６・７・10・11・12調査地区である。これは真如寺川から東側約200mと西側約50mの範囲である。このことから真如寺川は中世の洪水で左岸側へ大きく氾濫したことがわかるとともに、同じ左岸側でも、第３面（古代の遺構面）がある第４・８調査地区は、冠水していないことも理解できる。この第４・８調査地区では、近世や現代の耕作土のすぐ下から第３面を確認しており、この第３面と中世の耕作土や第２面（耕作に伴う足跡が残る面）との間には約0.5～1.2mの落差があり、洪水は第３面を持つ高まりには及んでいない。このことから中世の洪水によって被害を受けた範囲は、第３面を検出した部分より西側から南側にかけての部分であったといえる。なお、洪水による堆積層は除去されることもなく放置されていたようであり、近世の耕作は他所からの客土により行なわれていた。大蔵司側の洪水による影響も同様であったと考える。中世の耕作土から出土した遺物の年代は、概ね12世紀後半～13世紀前半にかけてのものであり、以後の時期の遺物は含まれていない。洪水の発生時期は13世紀後半以降と推定される。

よって中世の耕作土が洪水層に覆われていた範囲と洪水の時期は、第３面を検出した部分より西側から南側にかけての部分で、13世紀後半より後に発生したと考えられる。

ｂ　中世の耕作土が嵩上によって複数重なっている範囲

中世の耕作土が複数重なることを確認した調査地区は真上遺跡の第１・２調査地区である。遺物が出土しない耕作土層もあったが、洪水により覆われている灰色粘土層を鍵層とすると、同層より上位にある耕作土層には14世紀以降の時期の遺物を混じえている。これらは13世紀後半以降に発生した洪水の影響を受けず、客土により嵩上して耕作を続けたことを示す。この耕作土層に混じる遺物の年代により、おおよそ洪水の発生時期を13世紀後半から14世紀前半まで

の間に絞り込むことができる。

c　中世の耕作土が嵩上によって複数重なっている範囲の小字名とその周辺の小字名[3)]

中世の耕作土が複数重なる範囲の小字名は「庄奈幾」である。「しょうなき」あるいは「しょうない」から訛った当字であると考えれば、荘園の内側を意味する「庄内」と連想される。周辺の小字名から荘園に関連している字名を持つ区画を探すと、隣接の東側及び北東側に広がる区画には「庄司庵」があり、さらにこの区画（字名「庄司庵」）の北東側に隣接の区画にも同じ字名がある。「庄奈幾」の区画からみて南東の区画は「安ノ内垣内」となっていて、庄司の住居があった地域ならびに庄司が直接把握する住民の住む村があることとなり、これらは条里地割りの南北２町方画を占地し、「庄奈幾」の区画は方１町区画を北西の角から南西の角を結ぶ対角線で区切った北東側にあり、その南西側は「買田」という字名である。字名「庄司庵」が２区画あり北東側にある区画は、谷筋の部分を含む範囲で条里地割りの方画ではないが、取水口となる様で現在でもこの谷筋を通る水路がある[4)]。これらの字名があるのは、すべて『高槻市史』に想定されている真上庄の範囲であって[5)]、北東端付近となり、大字真上の内側である。

d　小真上庄が安堵された時期の真上庄の動向

『高槻市史』によると小真上庄が安堵されるのは建武元（1334）年で、高野山金剛三昧院領として後醍醐天皇の親政によるものであると理解されていて、真上氏との関連も推定され真上庄の一角あるいは隣接地と比定し、真上氏からの寄進の可能性についてもふれている[6)]。真上庄庄司であった真上三郎左衛門入道（父・真上政好）と真上彦三郎資信（子・真上政房）親子は元弘三（1333）年に足利尊氏らの倒幕軍勢が六波羅探題を攻撃したときに、六波羅探題北方の北条仲時にしたがって戦っている。六波羅勢が光厳天皇を擁して近江に落ちのび、近江国番場宿で軍勢が自害したときにこれに殉じており[7)]、小真上庄が安堵される前年には真上氏は庶子家にその後継ぎを託すことになったのである。真上氏庶子家が後を継ぐことを建武政権から安堵されるのは1334～1337年の間とされているので、この時期は小真上庄の成立時期と重なる。小真上庄の安堵とは真上親子の自害と、真上庄を覆う水害による耕作地の減少が、微妙にからみあっているということがａ・ｂ・ｄのことから推定される。

e　建武政権により安堵された小真上庄の位置

『高槻市史』では史料に乏しいとして、小真上庄の位置や詳細な動向については触れられていないが[8)]、真上遺跡の発掘調査の成果を基にし、そこに『高槻市史』の資料を加えて検討すると、以下のように考えられる。

14世紀前半に真上氏は、その本拠地である真上庄のなかに真上城をもち、本屋敷（高槻市西真上所在の笠森神社周辺に比定されている）を西側に置いて[9)]、地頭御家人を統率する地位を得るまでに強大化していた。

これは真上氏が庄内の雑務に加えて、幕府の政治を執行する役目を担っていたわけで、庄域を離れていることがしばしばあったと理解できる。

ここで先にみた真如寺川の洪水を考えれば、真上庄内に洪水による被害が発生するということは可耕地が減少して、荒地が増加した状態の庄園になったであろうことを容易に想像させる。

さらに足利の軍勢が六波羅を襲い、近江において真上氏親子が殉死するということがあり、これらの事柄がほぼ同時期にあったとすれば、耕地の少なくなった庄園の領主が亡くなるということであり、この庄園の後を継ぐ者が出現するまでには数年を要しているので、この間に小真上庄が安堵されたというのは、真上氏からの寄進という形を取りつつも半ばは、割愛のような状況をもって真上庄の庄域内に別形態の庄園が成立したのであったと考えたい。

真上庄域の北東端部分で、庄園の設定を推定させる小字名を持ち、潅漑水系も別形態であると考えられる地域があって、しかもその地域内では中世の耕作土を洪水とは無関係で、洪水以降も嵩上を客土によって行い耕地として使用しているとなれば、これらの庄園を推定した地域には、小真上庄を比定することができるのではないだろうか。

今回の真上遺跡のなかでは、第１・２調査地区の小字名が「庄奈幾」であり、その場所にはかつての、小真上庄の耕地が広がっていた可能性があるといえるのではないだろうか。

３　近世には耕作地が全面的な広がりを持つようになる。このことは大蔵司遺跡においても同様である。両遺跡の近世の耕作地に共通して確認できるものは暗渠である。

真上遺跡と大蔵司遺跡の全調査地区で、近世の耕作地を確認しているわけではないが、近世の耕作土層の下にある床土層には、ほとんどの調査地区で木杭や石を利用した暗渠が確認できた。これらは主に排水を目的としたもので、溝の設定方向は、すべて地形に即したものとなっているようである。なお、調査期間中には、湧水による影響を受ける調査地区が多く存在したが、このように地盤掘削時に湧水による影響を受ける調査地区内の近世の耕作面の下には、必ず複数の暗渠が張り巡らされていたことを考えると、近世の耕作においても、湧水処理の問題は深刻なものであったことが推察される。

註）

１．図３のＲ地点
２．第Ⅰ章の註19と同じ
３．第Ⅲ章の註３と同じ
４．谷筋の一部分の公園となっている所では噴水や池の水源に利用している
５．『高槻市史』第一巻　本編Ⅰ　442・474頁参照
６．同上　525頁参照
７．同上　473頁参照
８．同上　526頁参照
９．同上　480頁参照

大蔵司遺跡第４・５調査地区出土遺物

遺物観察表（１）

挿図番号	図版番号	種類	法量 口径	器高	底径	高台径	高台高	焼成	胎土	色調	技法	備考
図10－１	13	弥生甕		残 2.4	5.0			良好	密 石英粒含む	灰白色	外面タタキ目 内面ヘラケズリ	
10－２	13	土師器高杯	12.8	残 5.0				良好	密	淡橙色		
10－３	—	土師器高杯		残 3.2				良好	密	浅黄橙色		
10－４	—	土師器高杯		残 2.3				良好	密	淡橙色	外面ハケ目 内面ナデ	
10－５	13	土師器高杯		残 5.2				良好	密	灰白色		
10－６	13	土師器高杯		残 6.6				良好	密 シャモット含む	浅黄橙色		
10－７	13	土師器高杯		残 7.0				良好	密 石英粒含む	浅黄橙色		
10－８	13	土師器高杯		残 6.6				良好	密	灰白色		
10－９	13	土師器高杯		残 8.7				良好	密	浅黄橙色	杯身内面一定方向ナデ	
10－10	—	土師器高杯		残 2.5	16.8			良好	密	淡橙色		
10－11	13	土師器皿	7.5	1.1				良好	密	にぶい黄橙色	外面ユビオサエ，ヨコナデ	
10－12	13	土師器皿	6.6	1.4				良好	密	にぶい橙色	外面ユビオサエ，ヨコナデ 内面ナデ	
10－13	13	土師器甑		残 6.9	12.3			良好	密	灰白色		
10－14	13	須恵器杯蓋		4.8	13.2	つまみ 2.0	つまみ 0.7	良好	密	紫灰色	つまみ部ナデ，かえりヨコナデ 天井部ヘラケズリ	
10－15	—	須恵器杯蓋		残 4.7	11.1			良好	密	灰白色	外面ヘラケズリ，ナデ	
10－16	13	須恵器杯蓋		残 4.4	13.6			良好	密	青灰色	外面 内面 } ヨコナデ，ヘラケズリ	
10－17	14	須恵器杯蓋		残 4.6	12.0			良好	密	青灰色	外面ヘラケズリ，ナデ	
10－18	14	須恵器杯身	14.2	残 4.5				良好	密	灰色	外面ヨコナデ，ヘラケズリ 内面ヨコナデ	
10－19	—	須恵器杯身		残 1.4		10.5	0.5	良好	密	灰白色	外面 内面 } ヨコナデ	
10－20	14	須恵器高杯	17.7	13.6	11.2			良好	密 長石粒含む	暗青灰色	外面ヨコナデ，波状文 内面ヨコナデ	
10－21	—	須恵器器台		残 4.8		脚部径 8.8		良好	密 長石粒含む	灰白色	脚部外面波状文	脚部方形孔 4ヶ所
10－22	14	瓦器椀	14.3	残 4.7				良好	密 石英粒含む	青黒色	内面ヘラミガキ	
10－23	14	瓦器椀	10.1	残 2.6				良好	密	灰色	内面ヘラミガキ	
10－24	14	瓦器椀	11.0	残 3.0				良好	密	灰白色	内面ヘラミガキ	
10－25	14	土師器高杯	12.8	残 4.5				良好	密	淡色	外面ユビオサエ，ヨコナデ 口縁端面に沈線一条	
10－26	14	須恵器杯蓋		残 4.8	12.2			良好	密	灰白色	外面ヘラケズリ，ヨコナデ	
10－27	—	瓦器椀	13.6	残 4.2				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	
10－28	14	瓦器椀	13.8	残 3.4				良好	密	灰白色	外面ユビオサエ，ナデ 内面ヘラミガキ	
10－29	—	施釉陶器椀		残 4.0		4.6	1.1	良好	密	灰オリーブ色	畳付け釉ハギ	高台畳付け胎土目痕

真上遺跡第１・２・４調査地区出土遺物

遺物観察表（２）

挿図番号	図版番号	種類	法量 口径	器高	底径	高台径	高台高	焼成	胎土	色調	技法	備考
図16－１	14	土師器皿	7.0	0.9				良好	密	橙色		
16－２	14	瓦器皿	11.6	1.2				良好	密	明黄褐色		
16－３	14	縁釉陶器椀	17.4	残 4.3				良好	密	浅黄色		
16－４	—	須恵器杯蓋		残 3.3	13.0			良好	密	灰白色	外面ヨコナデ，ヘラケズリ 内面ヨコナデ	
16－５	—	須恵器杯蓋		残 3.5	13.2			良好	密	灰白色	外面 内面 } ヨコナデ	
16－６	14	須恵器杯身	17.8	残 2.3				良好	密	青灰色	外面 内面 } ヨコナデ	
16－７	14	円筒埴輪	直径 22.0	残 3.8				良好	密	淡橙色		
16－８	—	伊万里碗		残 2.8		4.5	0.7	良好	密	灰白色		
16－９	—	伊万里碗	9.0	残 4.6				良好	密	明黄褐色		
16－10	14	弥生甕		残 7.7	4.4			良好	密	橙色	内面ハケ目	
16－11	—	弥生高杯		残 5.6				良好	密	橙色	内面シボリ目	
16－12	14	土師器甕	31.4	残 9.9				良好	密	にぶい橙色		
16－13	—	須恵器杯身	12.4	3.5				良好	密	灰白色	外面 内面 } ヨコナデ	底部回転ヘラ切り
16－14	14	須恵器杯身	14.2	3.9				良好	密	灰白色	外面 内面 } ヨコナデ	底部回転ヘラ切り
16－15	—	三足付羽釜		残 8.0		脚径 1.7		良好	密	にぶい橙色		
16－16	15	弥生甕		残 3.0	4.6			良好	密	浅黄色	内面ケズリ	
16－17	—	弥生高杯		残 7.3				良好	密	にぶい黄橙色	外面ヘラミガキ	
16－18	—	弥生高杯		残 2.1	23.8			良好	密	にぶい黄橙色		
16－19	15	須恵器壺		残 4.5		11.4	2.0	良好	密	灰白色	外面ヘラケズリ 内面ヨコナデ	高台穿孔
16－20	15	土師器皿	7.8	1.1				良好	密	にぶい黄橙色	口縁部ヨコナデ	
16－21	15	土師器皿	8.9	1.4				良好	密	明褐灰色	口縁部ヨコナデ	e 手法
16－22	15	土師器皿	13.9	残 2.3				良好	密	にぶい黄橙色	外面ヨコナデ	
16－23	15	瓦器椀	10.3	残 2.5				良好	密	灰白色	外面ヨコナデ 内面ヘラミガキ	
16－24	15	瓦器椀	12.8	残 3.0				良好	密	灰白色	外面ナデ 内面ヘラミガキ	
16－25	15	瓦器椀	15.4	残 3.1				良好	密	灰白色	外面ナデ 内面ヘラミガキ	
16－26	—	弥生甕	13.8	残 5.9				良好	密 砂粒含む	橙色		
16－27	—	弥生甕		残 3.9	3.9			良好	密	橙色	外面タタキ目	
16－28	15	弥生甕		残 2.4	3.0			良好	密	にぶい黄橙色	外面タタキ目 内面ナデ	底部穿孔
16－29	15	須恵器杯身	16.4	残 3.6				良好	密	灰白色	外面 内面 } ヨコナデ	底部ヘラギリ後ナデ
16－30	15	瓦器椀	15.5	残 3.9				良好	密	黒褐色	外面 内面 } ヘラミガキ	
16－31	—	弥生壺	19.9	残 2.7				良好	密	明褐灰色	外面ヘラミガキ	
16－32	—	弥生壺	10.9	残 4.7				良好	密	にぶい橙色	外面タテハケ，ヨコナデ 内面ヨコハケ	
16－33	—	弥生壺	10.4	残 4.3				良好	密	淡黄色		
16－34	—	須恵器杯身		残 2.2		9.2	0.5	良好	密	灰色		

真上遺跡第４調査地区出土遺物（溝その１）　遺物観察表（３）

挿図番号	図版番号	種　類	法量					焼成	胎　土	色　調	技　法	備　考
			口　径	器　高	底　径	高台径	高台高					
図23－１	15	弥生小形甕	10.7	11.2	3.6			良好	密	浅黄橙色		
23－２	15	弥生壺	11.4		4.3			良好	密	橙色		
23－３	15	弥生壺	11.8	残 4.1				良好	密	淡黄色		
23－４	—	弥生壺	17.4	残 4.9				良好	密	橙色		
23－５	15	弥生台付壺		残 8.0				良好	密	にぶい橙色		
23－６	15	弥生壺		残15.2	5.2			良好	密	にぶい黄橙色	外面 内面 ハケ目	内面ナデ痕
23－７	—	弥生壺		残 4.3	5.5			良好	密	にぶい黄橙色	外面ヘラミガキ	
23－８	16	弥生壺		残 7.5	3.9			良好	密	橙色	内面ヘラケズリ	底部穿孔
23－９	—	弥生甕	13.4	残 6.0				良好	密　石英粒含む	赤橙色		
23－10	16	弥生甕	13.8	残 6.7				良好	密　石英粒含む	赤橙色		
23－11	—	弥生甕	16.0	残 5.1				良好	密　石英粒含む	明赤褐色		
23－12	—	弥生甕	17.7	残 4.6				良好	密　石英粒含む	橙色		
23－13	—	弥生甕	14.2	残 3.0				良好	密	にぶい橙色	外面タタキ目	
23－14	—	弥生甕	14.9	残 3.2				良好	密　石英粒含む	橙色	外面タタキ目	
23－15	—	弥生甕	15.1	残 2.8				良好	密	浅黄橙色		
23－16	—	弥生甕	16.0	残 2.2				良好	密　石英粒含む	橙色		
23－17	—	弥生甕	16.8	残 6.9				良好	密	にぶい橙色		
23－18	16	弥生甕	15.9	残11.6				良好	密　砂粒含む	明褐色	外面タタキ目	
23－19	16	弥生甕	15.8	残11.6				良好	密	橙色	外面タタキ目	
23－20	16	弥生甕	11.6	残 5.4				良好	密	にぶい黄橙色	外面ヨコナデ，タタキ目 内面ヨコナデ，ユビオサエ	
23－21	16	弥生甕	12.2	残 3.4				良好	密　石英粒含む	にぶい黄橙色	外面刺突列点文	近江系

真上遺跡第４調査地区出土遺物（溝その２）　遺物観察表（４）

挿図番号	図版番号	種　類	法量					焼成	胎　土	色　調	技　法	備　考
			口　径	器　高	底　径	高台径	高台高					
図24－22	—	弥生甕		残 2.6	4.3			良好	密	浅黄橙色		
24－23	—	弥生甕		残 4.2	5.2			良好	密　石英粒含む	灰白色		
24－24	—	弥生甕		残 3.7	4.9			良好	密　石英粒含む	灰白色		
24－25	—	弥生甕		残 2.1	4.0			良好	密	淡赤橙色		
24－26	—	弥生甕		残 3.1	4.9			良好	密	浅黄橙色		底部黒斑
24－27	—	弥生甕		残 1.9	4.4			良好	密	にぶい赤橙色	外面ユビオサエ	
24－28	—	弥生甕		残 3.4	4.7			良好	密　砂粒含む	灰白色	内面ヘラケズリ	
24－29	—	弥生甕		残 2.9	4.1			良好	密	淡赤橙色	外面タタキ目	
24－30	16	弥生甕		残 4.7	3.8			良好	密	褐灰色	外面ヘラミガキ 内面ナデ	
24－31	16	弥生甕		残 4.6	4.9			良好	密	浅黄橙色		
24－32	—	弥生甕		残 4.5	5.6			良好	密　砂粒含む	淡赤橙色		底部黒斑
24－33	—	弥生甕		残 4.8	3.7			良好	密　砂粒含む	にぶい橙色		
24－34	17	弥生甕		残 6.1	3.7			良好	密	淡赤橙色	内面ハケ目	
24－35	16	弥生甕		残 8.0	4.2			良好	密	にぶい黄褐色		
24－36	17	弥生甕		残12.0	5.8			良好	密　石英粒含む	灰白色	外面ハケ目 内面ヘラケズリ	底部黒斑
24－37	—	弥生不明		残 3.2	8.6			良好	密	褐色	外面ハケ目	
24－38	—	弥生不明		残 6.3	8.5			良好	密	橙色	内面ハケ目，ナデ	
24－39	—	弥生高杯		残 6.7				良好	密	橙色		
24－40	—	弥生高杯		残 5.2				良好	密	浅黄橙色		

真上遺跡第４調査地区出土遺物（竪穴住居）

遺物観察表（５）

挿図番号	図版番号	種　類	法量					焼成	胎　土	色　調	技　法	備　考
			口　径	器　高	底　径	高台径	高台高					
図25－１	17	弥生壺	16.2	残 5.2				良好	密	浅黄橙色		
25－２	17	弥生壺		残18.8	4.8			良好	密	橙色	外面ハケ目，ナデ 内面ヘラケズリ，ハケ目，ナデ	
25－３	—	弥生壺	11.4	残 3.2				良好	密	明黄褐色		
25－４	17	弥生壺	12.8	残 4.8				良好	密	明黄褐色	外面ハケ目	
25－５	—	弥生壺	17.6	残 3.4				良好	密	橙色		
25－６	—	弥生甕		残 3.3	4.4			良好	密　石英粒含む	橙色	内面ナデ	
25－７	—	弥生甕		残 3.3	4.3			良好	密	橙色		
25－８	—	弥生甕		残 3.8	3.1			良好	密	橙色	外面タタキ目	
25－９	17	弥生甕		残 4.2	4.1			良好	密	橙色	外面タタキ目	黒斑
25－10	17	弥生甕		残 7.0	4.4			良好	密	明褐色	外面タタキ目 内面ハケ目	
25－11	—	弥生甕		残 2.6	3.8			良好	密	にぶい黄橙色	外面タタキ目 内面ナデ	底部穿孔
25－12	—	弥生高杯		残 4.2	6.4			良好	密	橙色	外面ハケ目	
25－13	17	弥生高杯		残 7.4				良好	密	灰白色	外面ヘラミガキ	
25－14	—	弥生高杯		残 6.0				良好	密	黄橙色		
25－15	17	弥生鉢	21.9	14.9	6.0			良好	密	にぶい橙色	外面 内面 } ナデ	黒斑
25－16	17	砥石	短辺 6.0	長辺 16.8	高さ 2.8			良好	密	灰オリーブ色		砂岩

真上遺跡第４調査地区出土遺物（遺構）

遺物観察表（６）

挿図番号	図版番号	種　類	法量					焼成	胎　土	色　調	技　法	備　考
			口　径	器　高	底　径	高台径	高台高					
図26－１	18	弥生壺	16.1	残 5.5				良好	密	浅黄橙色		
26－２	18	不明甕	18.0	残 5.3				良好	密	にぶい橙色	外面タタキ目	
26－３	18	不明甕	27.6	残 5.8				良好	密	淡黄色		
26－４	18	弥生壺か甕		残 4.0	5.6			良好	密	淡橙色	外面ヘラミガキ 内面ヨコハケ	
26－５	18	弥生壺か甕		残 2.3	5.8			良好	密	にぶい赤橙色		
26－６	18	弥生高杯	16.2	残 2.4				良好	密　石英粒含む	淡橙色		
26－７	18	土師器高杯	16.9	残 9.2				良好	密	明黄褐色		
26－８	18	弥生甕	14.9	残 3.2				良好	密	橙色		
26－９	18	弥生甕	21.2	残 3.3				良好	密　金雲母粒， 石英粒，長石粒含む	灰白色		
26－10	18	弥生甕	18.6	残 5.0				良好	密　石英粒含む	浅黄橙色		
26－11	18	土師器甕	19.0	残 5.5				良好	密　石英粒含む	灰赤色	外面ヘラミガキ，ヨコハケ 内面ヘラケズリ，ヨコナデ	
26－12	—	瓦質土管	受部口径 11.1		全長 残17.2			良好	密	暗青灰色	外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ，布目痕	
26－13	18	瓦質土管	受径 10.1	差し込み部口径 7.4	全長 26.6	玉縁部長 1.3		良好	密	青黒色	外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ，布目痕	
26－14	—	瓦質土管	受径 10.3	差径 7.3	全長 26.7	玉長 1.4		良好	密	暗青灰色	外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ，布目痕	
26－15	—	瓦質土管	受径 10.1	差径 7.3	全長 26.7	玉長 1.3		良好	密	暗青灰色	外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ，布目痕	
26－16	—	瓦質土管	受径 10.1	差径 7.1	全長 27.1	玉長 1.4		良好	密	暗青灰色	外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ，布目痕	
26－17	—	瓦質土管	受径 10.7	差径 7.1	全長 27.1	玉長 1.4		良好	密	青黒色	外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ，布目痕	
26－18	—	瓦質土管	受径 10.2	差径 7.1	全長 27.1	玉長 1.3		良好	密	暗青灰色	外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ，布目痕	
26－19	—	瓦質土管	受径 10.1	差径 7.2	全長 27.5	玉長 1.5		良好	密	暗青灰色	外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ，布目痕	

真上遺跡第６・７・８調査地区出土遺物

遺物観察表（７）

挿図番号	図版番号	種類	法量					焼成	胎土	色調	技法	備考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図28－１	—	土師器皿	7.8	1.2				良好	密	灰白色	外面ユビオサエ，ヨコナデ	
28－２	—	土師器皿	6.5	1.2				良好	密	赤灰色		
28－３	—	土師器皿	12.3	1.9				良好	密	浅黄色	外面ヨコナデ	
28－４	—	土師器皿	14.0	1.0				良好	密	灰白色	外面ケズリ後ナデ，ヨコナデ	
28－５	—	瓦器椀	14.6	残 4.4				良好	密	暗灰色	外面 内面 } ヘラミガキ	
28－６	—	瓦器椀	13.8	5.8		1.2	0.4	良好	密	灰白色	外面ユビオサエ後ナデ，ヨコナデ	
28－７	—	瓦器椀	13.2	4.4		3.8	0.3	良好	密	灰白色		
28－８	—	土師質鍋	43.4	残 3.9				良好	密	にぶい橙色	内面ヨコハケ	
28－９	—	陶器擂鉢		残 6.5	16.6			良好	密	暗紫灰色	外面施釉	
28－10	—	伊万里皿		残 1.2		12.7	1.1	良好	密	明緑灰色		胎土目積痕
28－11	19	弥生壺	20.0	残 6.9				良好	密　石英粒含む	にぶい橙色	外面ハケ目	
28－12	19	弥生甕	18.7	残 9.5				良好	密　石英粒含む	橙色	外面タタキ目，ハケ目 内面ハケ目	
28－13	—	弥生甕		残 4.2	4.3			良好	密　砂粒含む	浅黄色	内面ヘラケズリ	黒斑
28－14	19	弥生甕		残 4.0	4.3			良好	密　石英粒含む	赤橙色	外面タタキ目 内面ハケ目	
28－15	—	弥生甕		残 3.6	4.0			良好	密	褐色	外面タタキ目 内面ハケ目	
28－16	—	弥生壺か甕		残 2.5	3.8			良好	密	にぶい黄橙色		底部穿孔
28－17	—	弥生高杯	18.3	残 3.8				良好	密　砂粒含む	橙色		
28－18	—	弥生壺	12.8	残 4.0				良好	密	橙色		
28－19	19	弥生台付鉢	14.6	残16.3				良好	密	灰白色		鉢部黒斑
28－20	19	弥生高杯	14.8	脚部 残 6.8				良好	密	褐灰色	外面ヘラミガキ 内面ハケ目	
28－21	19	円筒埴輪		残 7.9				良好	密	にぶい黄橙色	外面ハケ目	
28－22	19	円筒埴輪		残 6.5				良好	密	にぶい黄橙色	外面ハケ目 内面ユビオサエ	
28－23	19	円筒埴輪		残 6.8				良好	密	にぶい黄橙色	外面ハケ目，ユビオサエ 内面ユビオサエ	
28－24	19	須恵器甕	17.5	残 7.7				良好	密	灰白色	外面格子状タタキ目 内面同心円文	ヘラ記号
28－25	19	須恵器甕		残 4.1	18.4			良好	密	黄灰色	外面格子状タタキ目 内面ナデ	
28－26	19	須恵器台付壺		残 5.6		12.0	0.7	良好	密	灰白色		
28－27	—	灰釉陶器	16.8	残 5.4		6.8	1.0	良好	密	灰白色	外面口縁部施釉 内面施釉	
28－28	20	土師質羽釜	23.9	残22.9				良好	密	にぶい黄橙色	外面 内面 } ハケ目	
28－29	19	瓦器椀		残 1.7		6.5	1.0	良好	密	灰色	外面ヨコナデ 内面ナデ	
28－30	20	弥生壺		残16.3	4.9			良好	密	灰白色	外面 内面 } ハケ目	黒斑

真上遺跡第９・10・12調査地区出土遺物

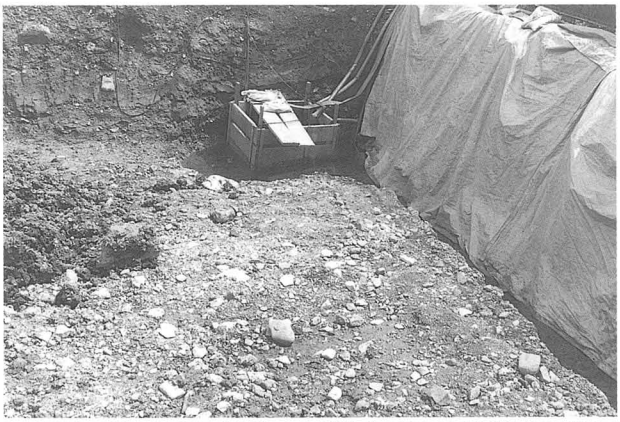
遺物観察表（８）

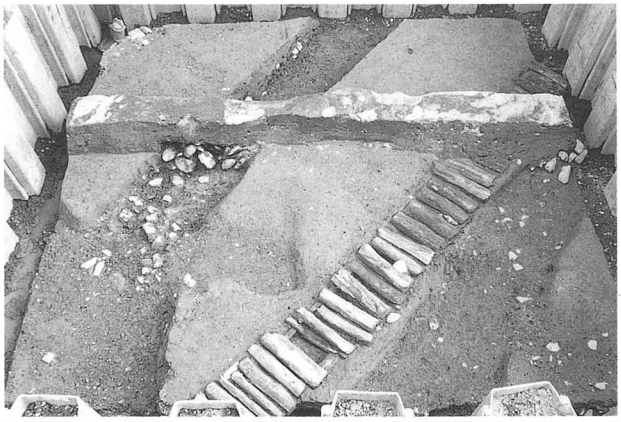
挿図番号	図版番号	種類	法量					焼成	胎土	色調	技法	備考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図31－１	—	瓦質土管	受部口径 12.1	差し入れ部口径 11.0	全長 25.5	玉縁部長 0.6		良好	密	暗青灰色	内面ナデ	
31－２	—	瓦質土管	受径 12.5	差径 10.5	全長 24.2	玉長 0.8		良好	密	暗青灰色		
31－３	20	瓦質土管	受径 12.5	差径 11.0	全長 25.7	玉長 0.9		良好	密	暗青灰色	内面ナデ	
31－４	—	瓦質土管	受径 12.1		全長 残21.5			良好	密	暗青灰色		
31－５	20	青磁碗		残 3.4				良好	密	緑灰色		龍泉窯系
31－６	20	土師質土錘	最大幅 2.3	3.3				良好	密	橙色		
31－７	20	土師器皿	11.4	残 1.3				良好	密	灰黄褐色	外面 内面 } ヨコナデ	
31－８	20	土師器皿	8.6	1.4				良好	密	浅黄色		
31－９	20	土師器皿	15.0	2.0				良好	密	淡橙色		
31－10	20	土師器皿		1.1				良好	密	灰白色	外面ユビオサエ，ヨコナデ 内面ヨコナデ，ナデ	
31－11	20	瓦器椀	12.2	残 6.6		2.8	0.5	良好	密	灰白色	外面 内面 } ヘラミガキ	
31－12	20	瓦器椀	11.9	残 4.6		4.0	0.2	良好	密	灰色	外面ヨコナデ，ユビオサエ 内面ヘラミガキ	

図　版　扉

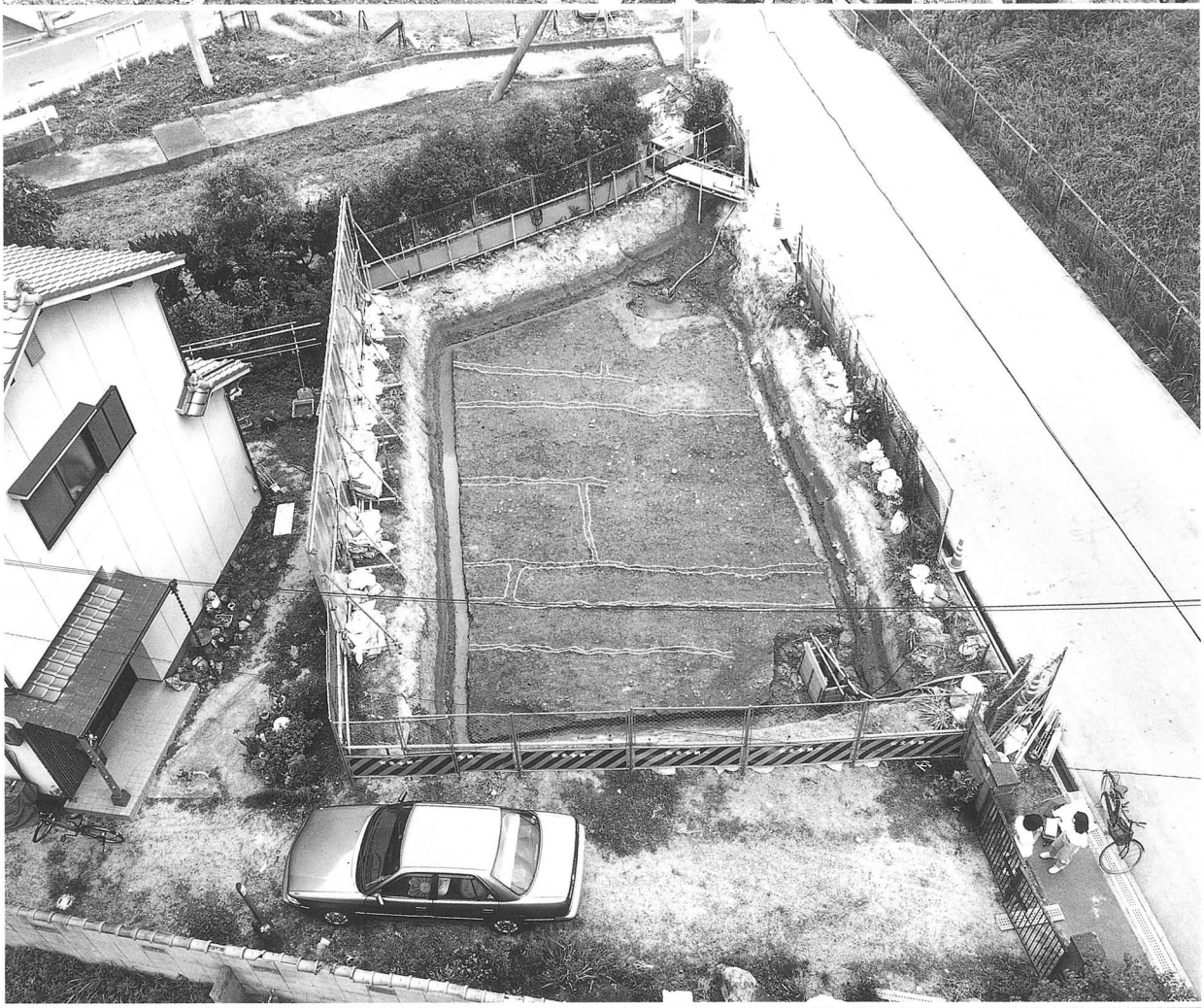
大蔵司・真上遺跡周辺航空写真（昭和30年撮影）

大蔵司遺跡

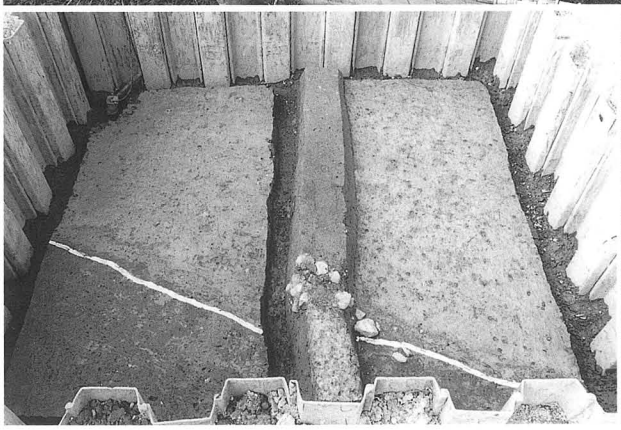




左：第 1 調査地区の地山層の状況　（北から）
右：第 3 調査地区の暗渠（北から）

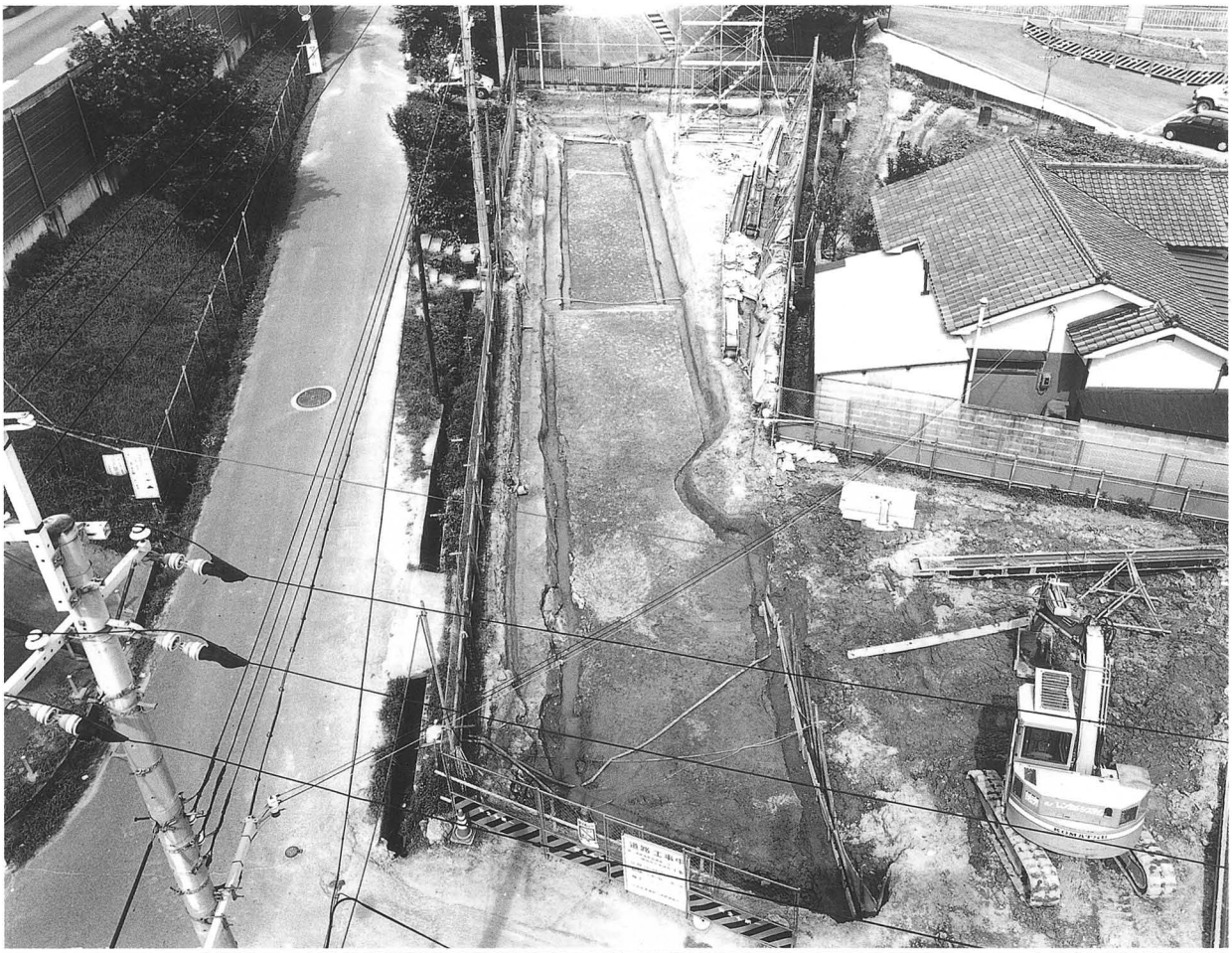


第 6 調査地区の畦（東から）

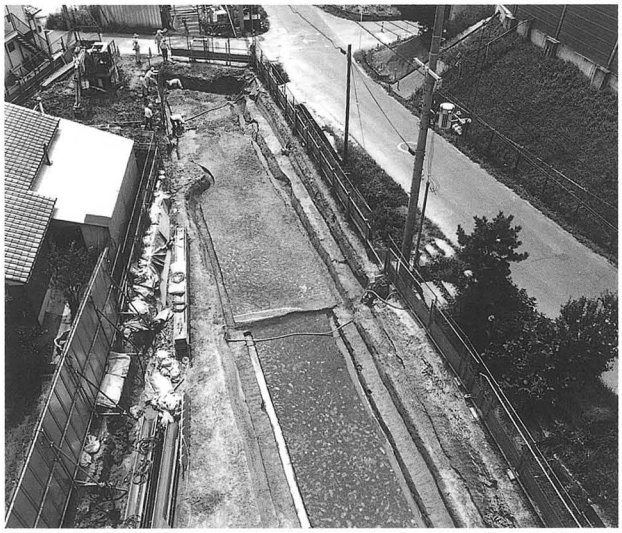


左：第 5 調査地区の落ち込み　（南から）
右：第 7 調査地区の地山層の状況　（東から）

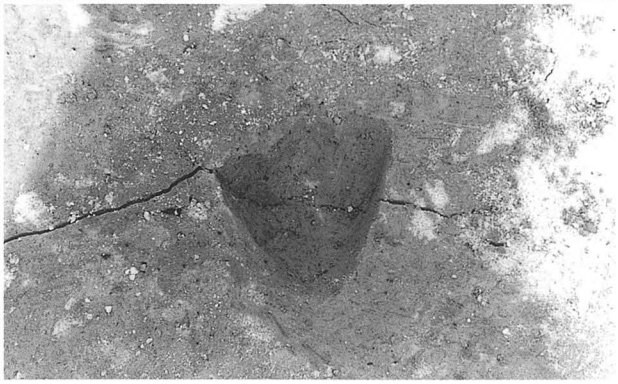
大蔵司遺跡



第 4 調査地区の畦
（西から）



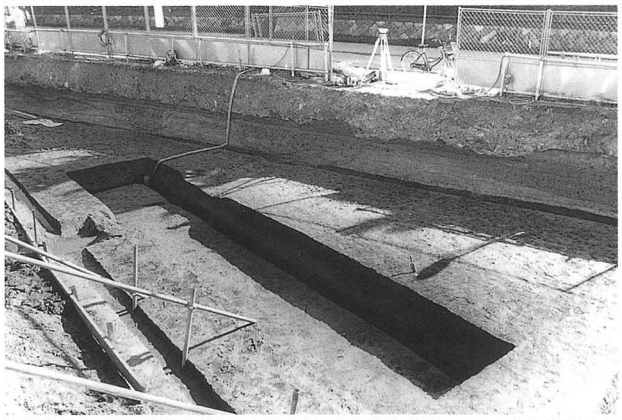
左：第 4 調査地区の畦
（西半部）
右：第 4 調査地区の畦
（東半部）



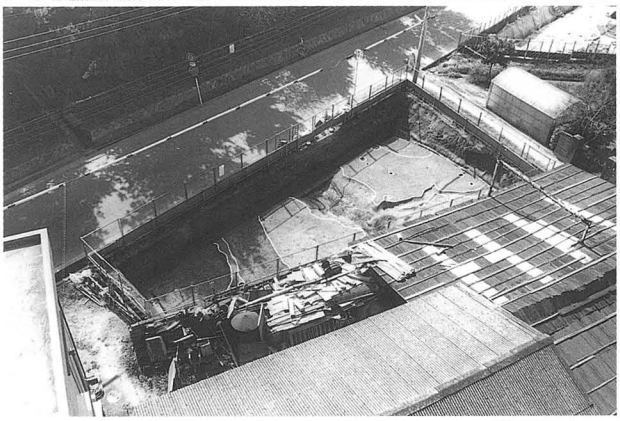
左：第 4 調査地区の足跡
（右足）
右：第 4 調査地区の足跡
（動物）

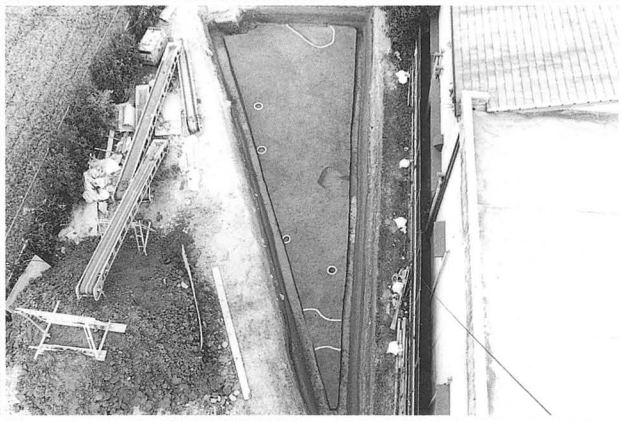
真上遺跡

第１・３調査地区の遺構
（第１面）

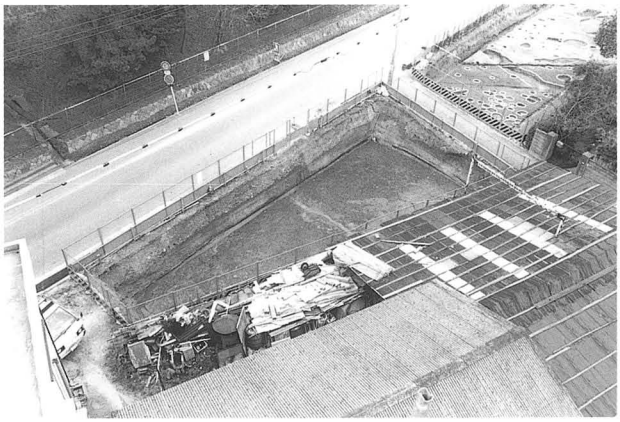


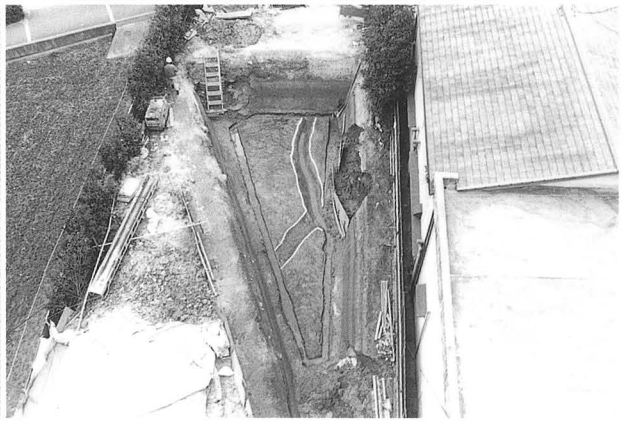
左：第３調査地区の南壁
右：第１調査地区の北壁





左：第３調査地区の遺構
（第１面・北から）
右：第１調査地区の遺構
（第２面・東から）



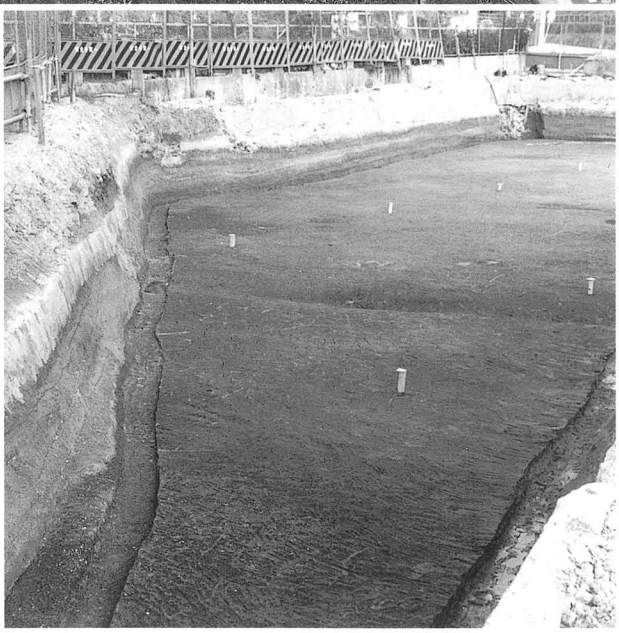


左：第３調査地区の遺構
（第２面・北から）
右：第１調査地区の遺構
（第３面・東から）

真上遺跡

第 2 調査地区の遺構
（第 1 面）

第 2 調査地区の遺構
（第 2 面）

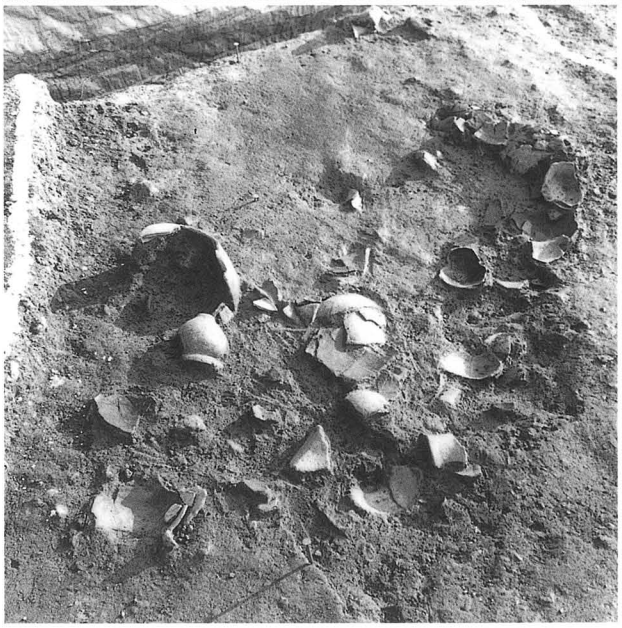


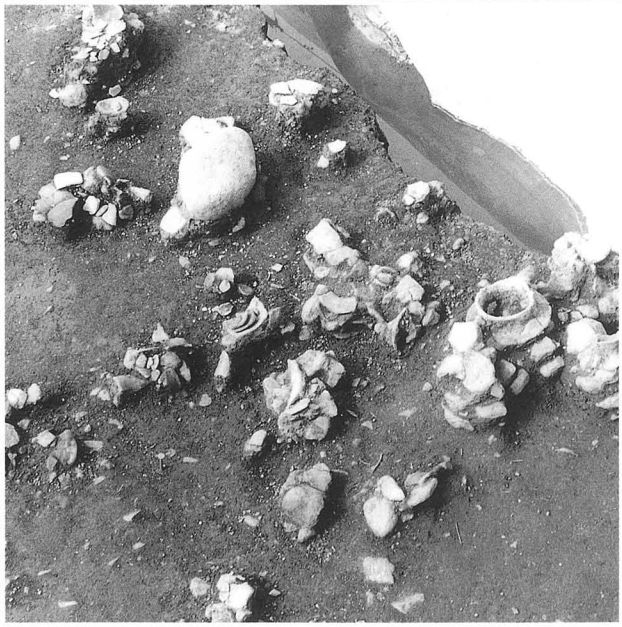
左：第 2 調査地区の
北壁・西半部
右：第 2 調査地区の
北壁・東半部

真上遺跡

第 4 調査地区の遺構
（第 1 面）

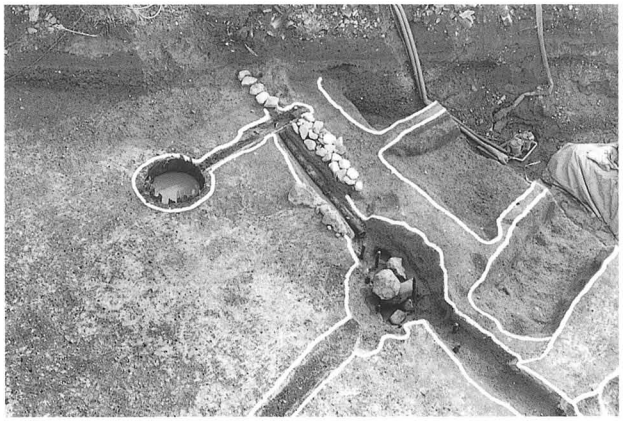
第 4 調査地区の遺構
（第 1 面・左側のみ
第 2 面）





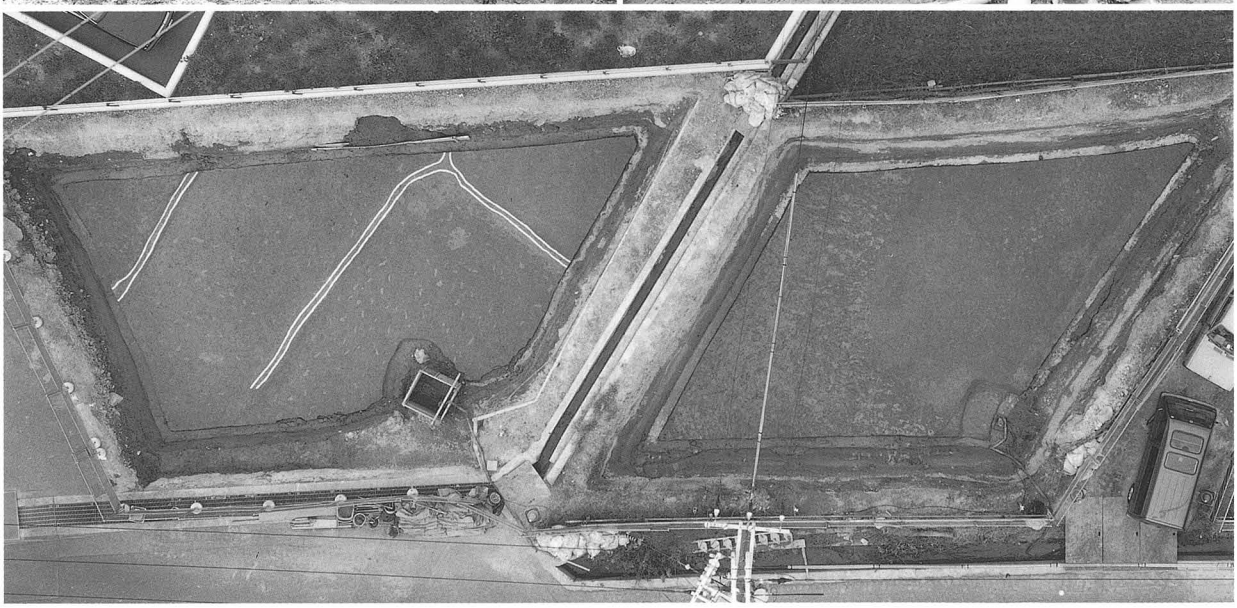
左：第 4 調査地区の遺構
（溝の出土遺物・北から）
右：第 4 調査地区の遺構
（竪穴住居の出土遺物・
東から）

真上遺跡

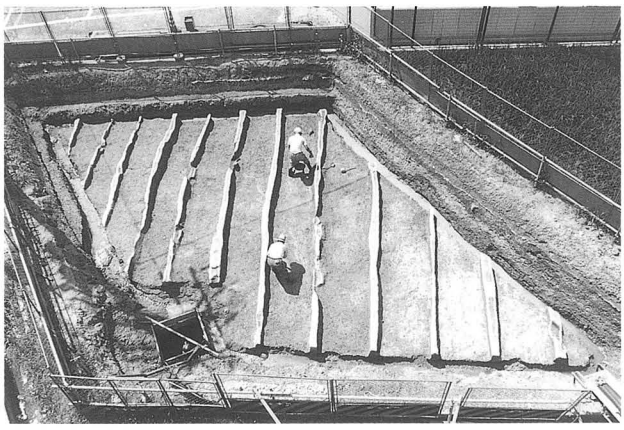


左：第 4 調査地区の遺構
（暗渠・北から）
右：第 4 調査地区の遺構
（暗渠・北から）

左：第 4 調査地区の
北壁・東隅
右：第 4 調査地区の第 1
面より下の堆積状況



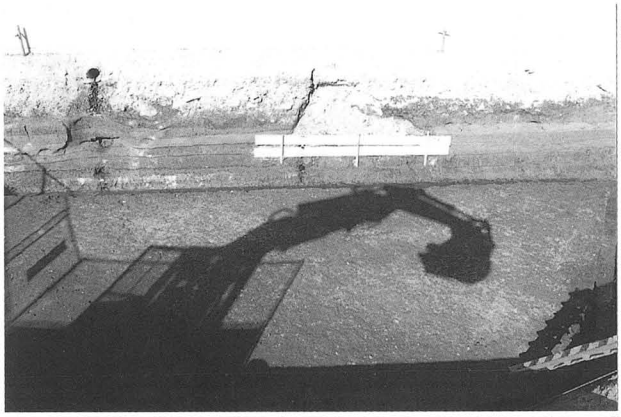
第 6 ・ 7 調査地区の遺構
（第 2 面）



左：第 6 調査地区の遺構
（第 1 面）
右：第 6 調査地区の遺構
（南西隅部分）

真上遺跡

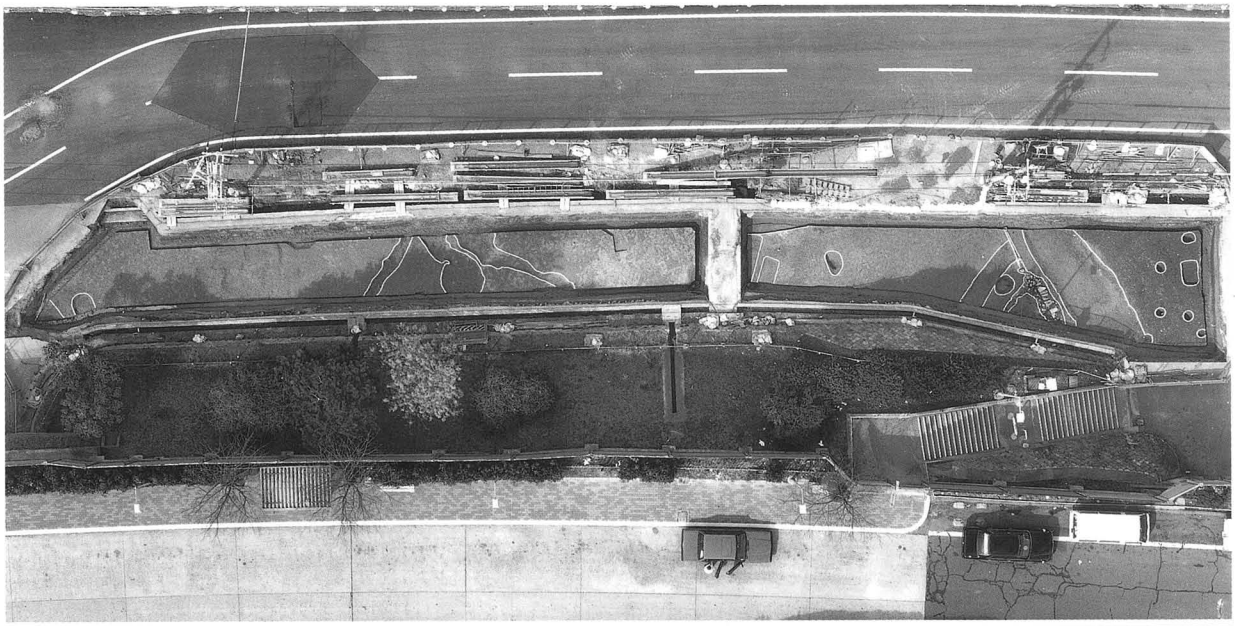
第 6 ・ 7 調査地区の遺構
（第 2 面）



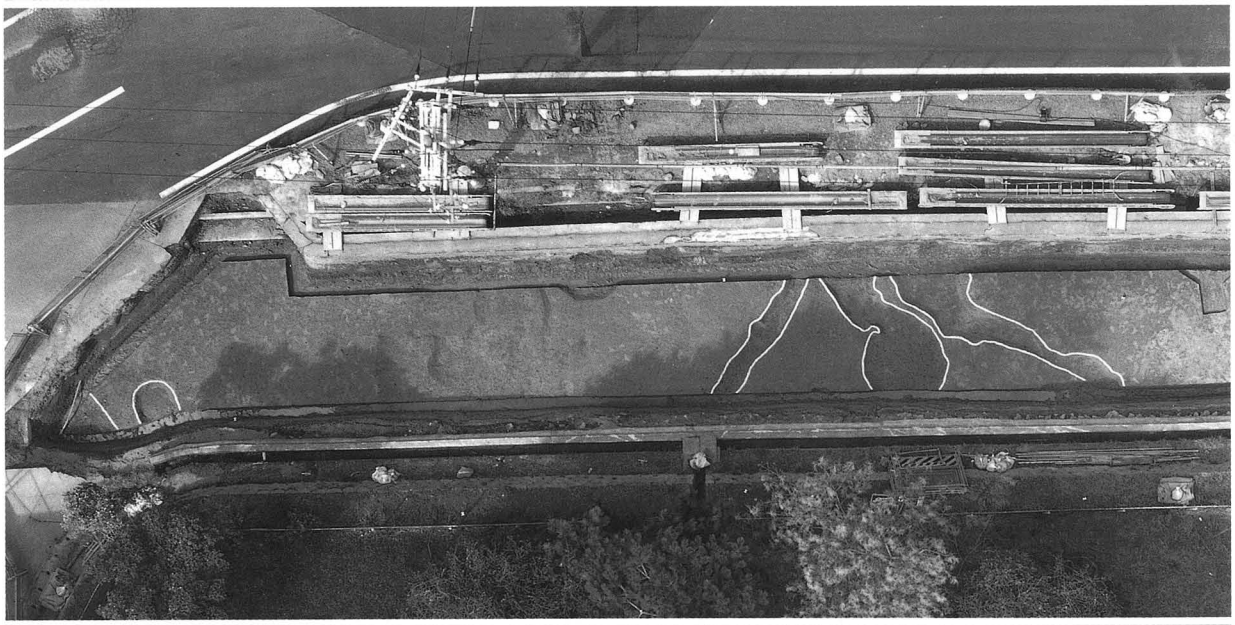
左：第 7 調査地区の北壁
右：第 6 調査地区の北壁

左：第 5 調査地区の
地山層　（西から）
右：第 5 調査地区全景
（西から）

真上遺跡



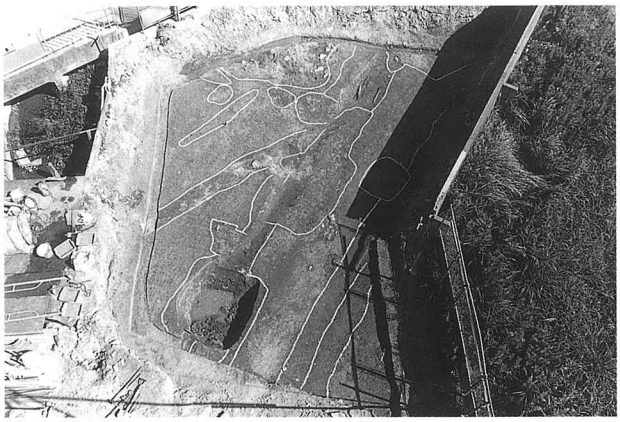
第 8 調査地区の遺構
（第 1 面）

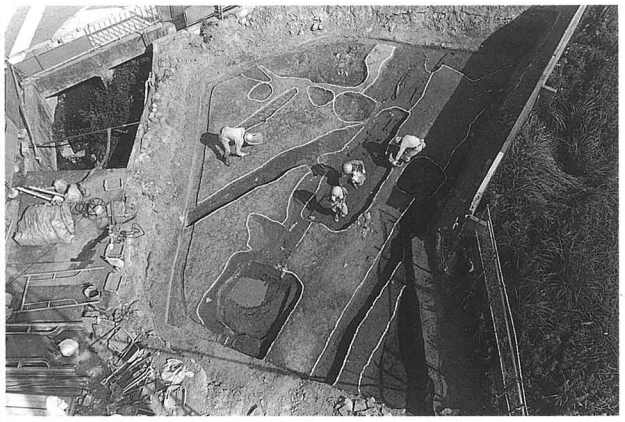


第 8 調査地区の遺構
（第 1 面・西半部）

第 8 調査地区の遺構
（第 1 面・東半部）

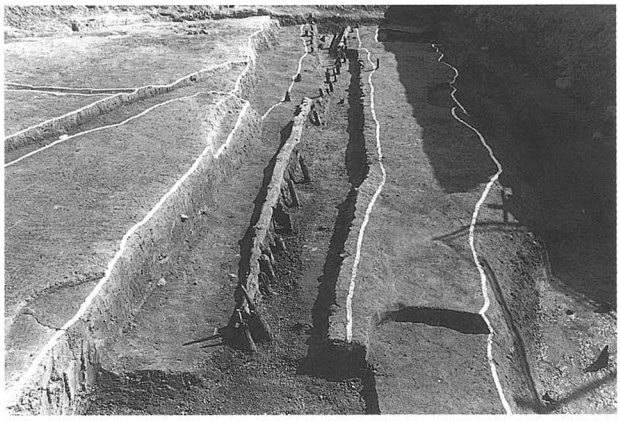
真上遺跡

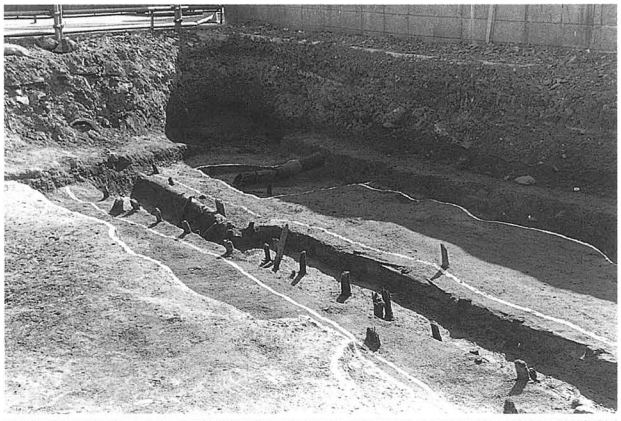




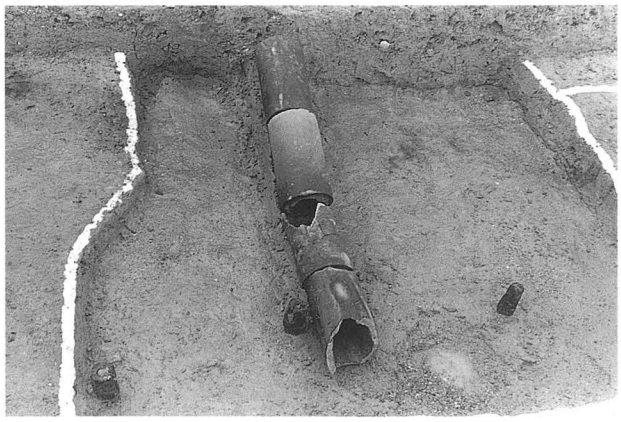
左：第 9 調査地区の遺構
（第 1 面検出時・
西から）
右：第 9 調査地区の遺構
（第 1 面での作業・
西から）

第 9 調査地区の遺構
（第 1 面）



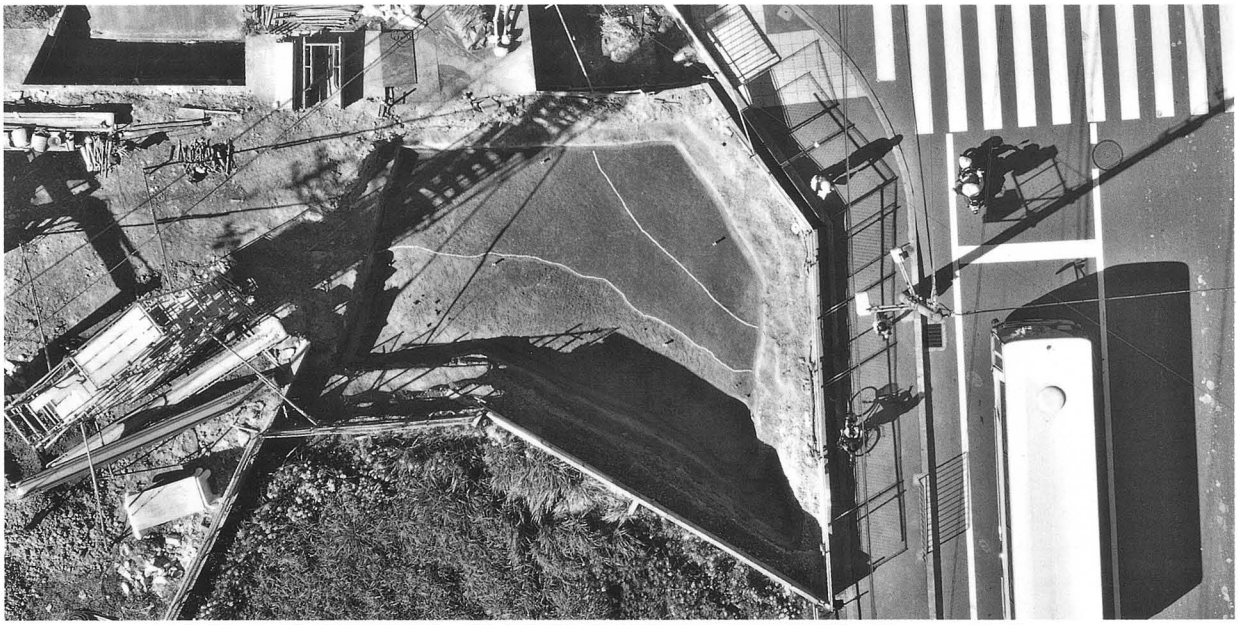


左：第 9 調査地区の溝
（西から）
右：第 9 調査地区の溝
（北西から）

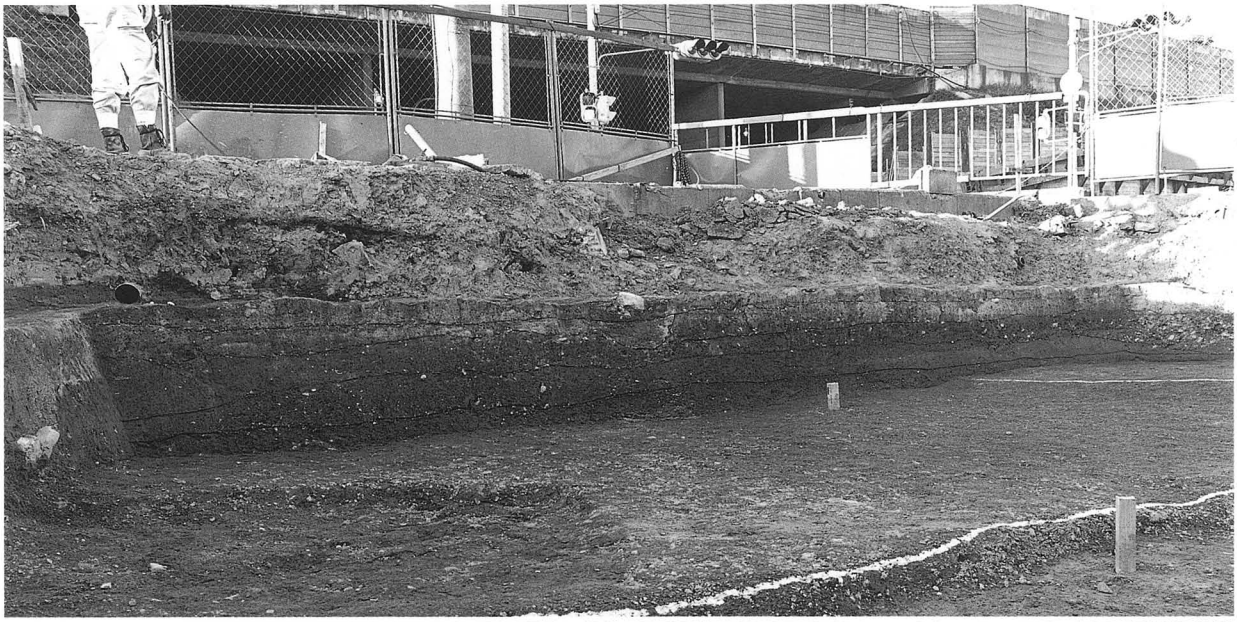


左：第 9 調査地区の溝
（北から）
右：第 9 調査地区の暗渠
（北から）

真上遺跡



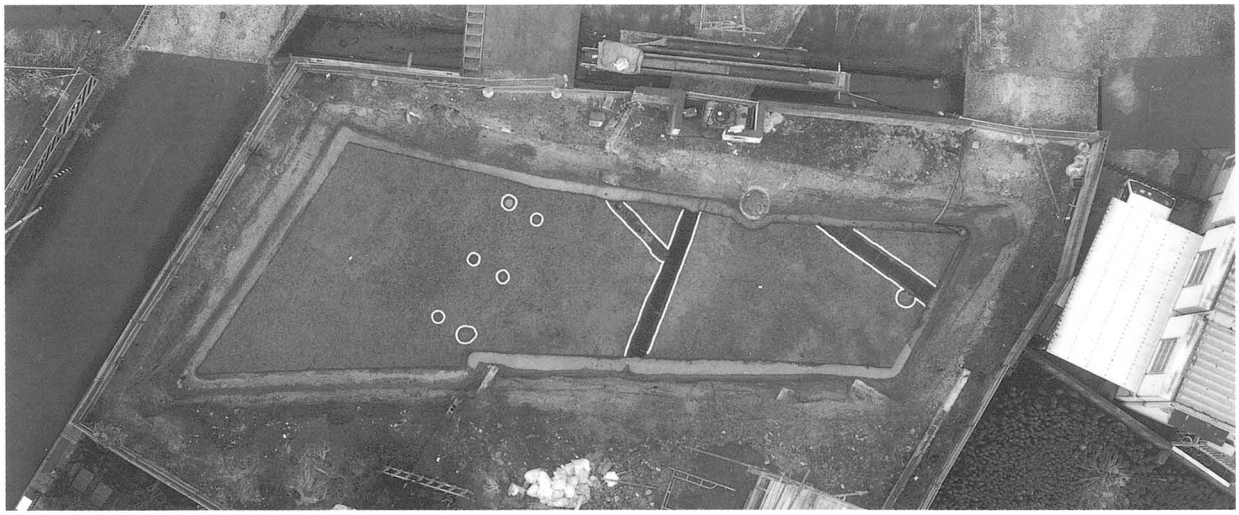
第９調査地区の遺構
（第２面）



第９調査地区の北壁

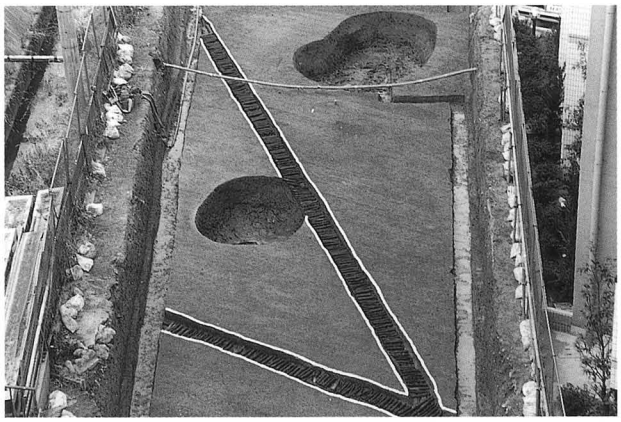
左：第９調査地区の南壁
（北から）
右：第９調査地区の南壁
（北から）

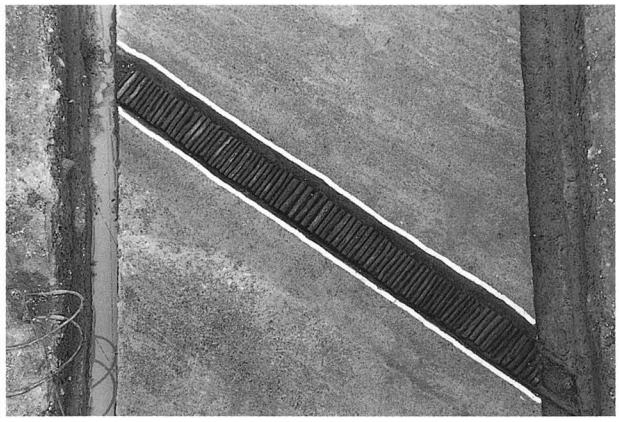
真上遺跡



第10調査地区の遺構
（第１面）

左：第10調査地区の
南壁（東半部）
右：第10調査地区の
南壁（西半部）

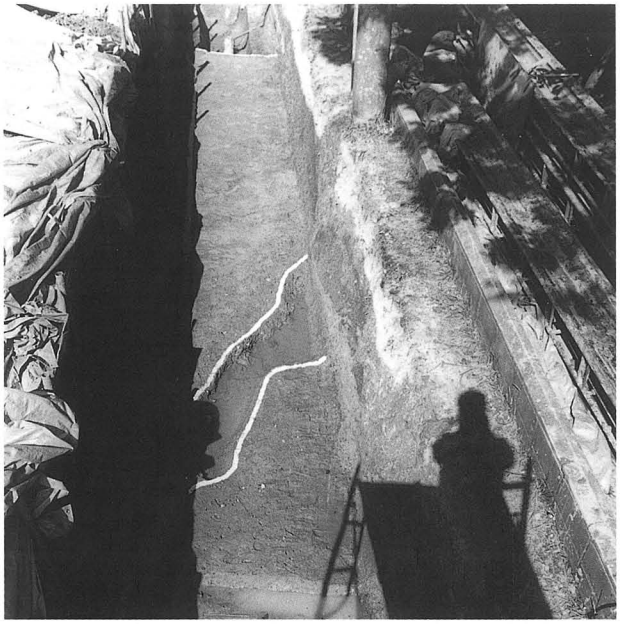




左：第11調査地区の暗渠
（東側）
右：第11調査地区の暗渠
（中央）

第11調査地区の遺構
（第２面）

真上遺跡



左：第12調査地区の遺構
（第１面・西半部）
右：第12調査地区の遺構
（第１面・西から）

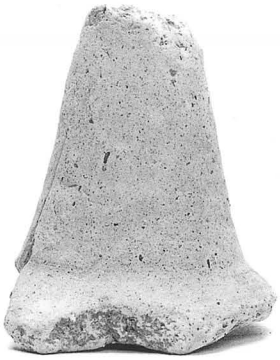
左：第12調査地区の暗渠
（東から）
右：第12調査地区の南壁
（中央付近）

図10－1

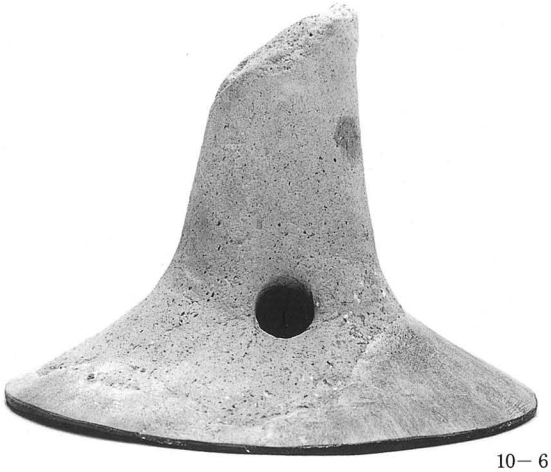
10－2

10－7

10－5



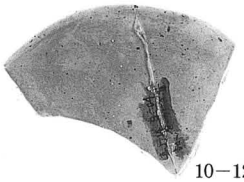
10－8



10－6

10－9

10－11



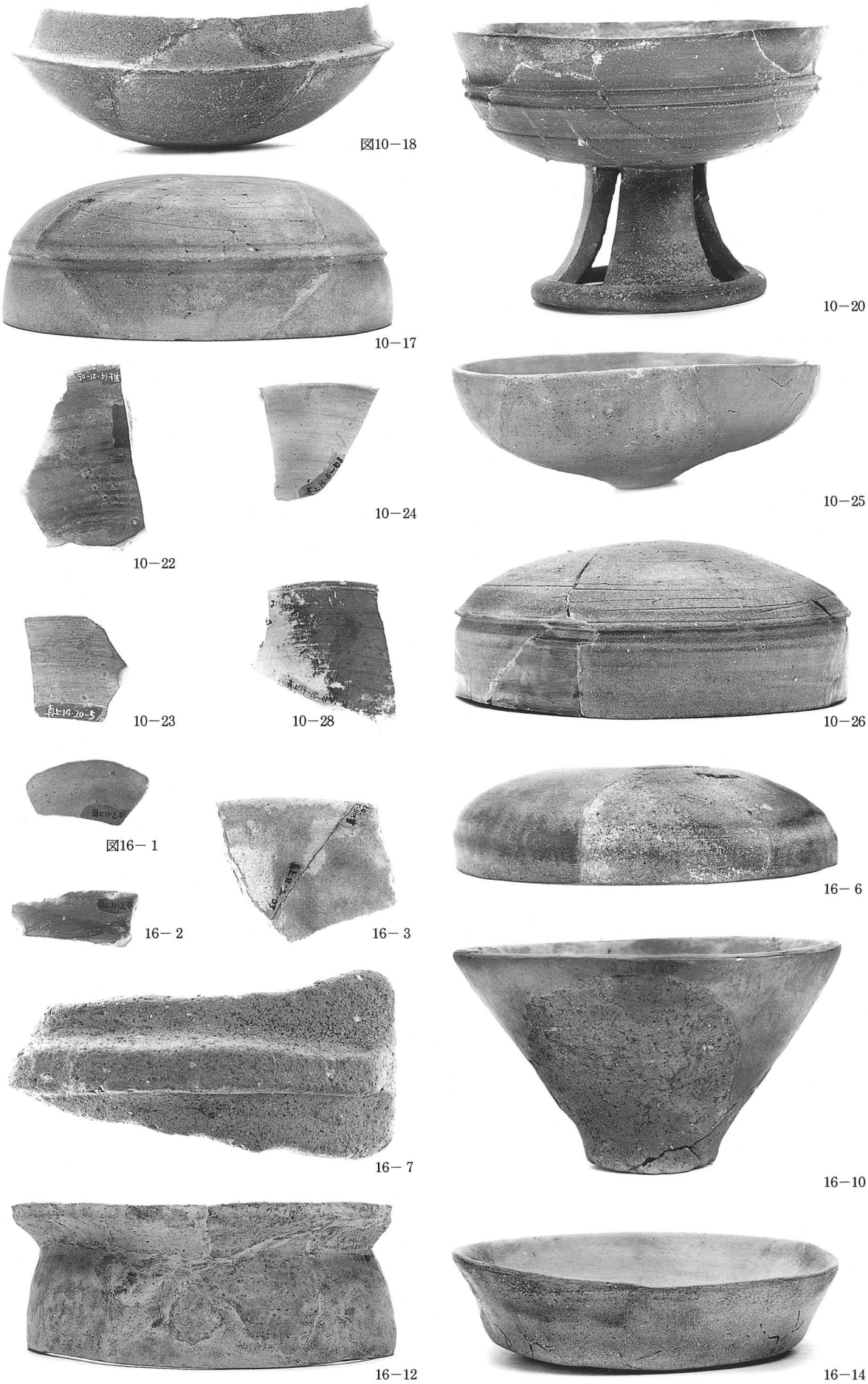
10－12

10－13

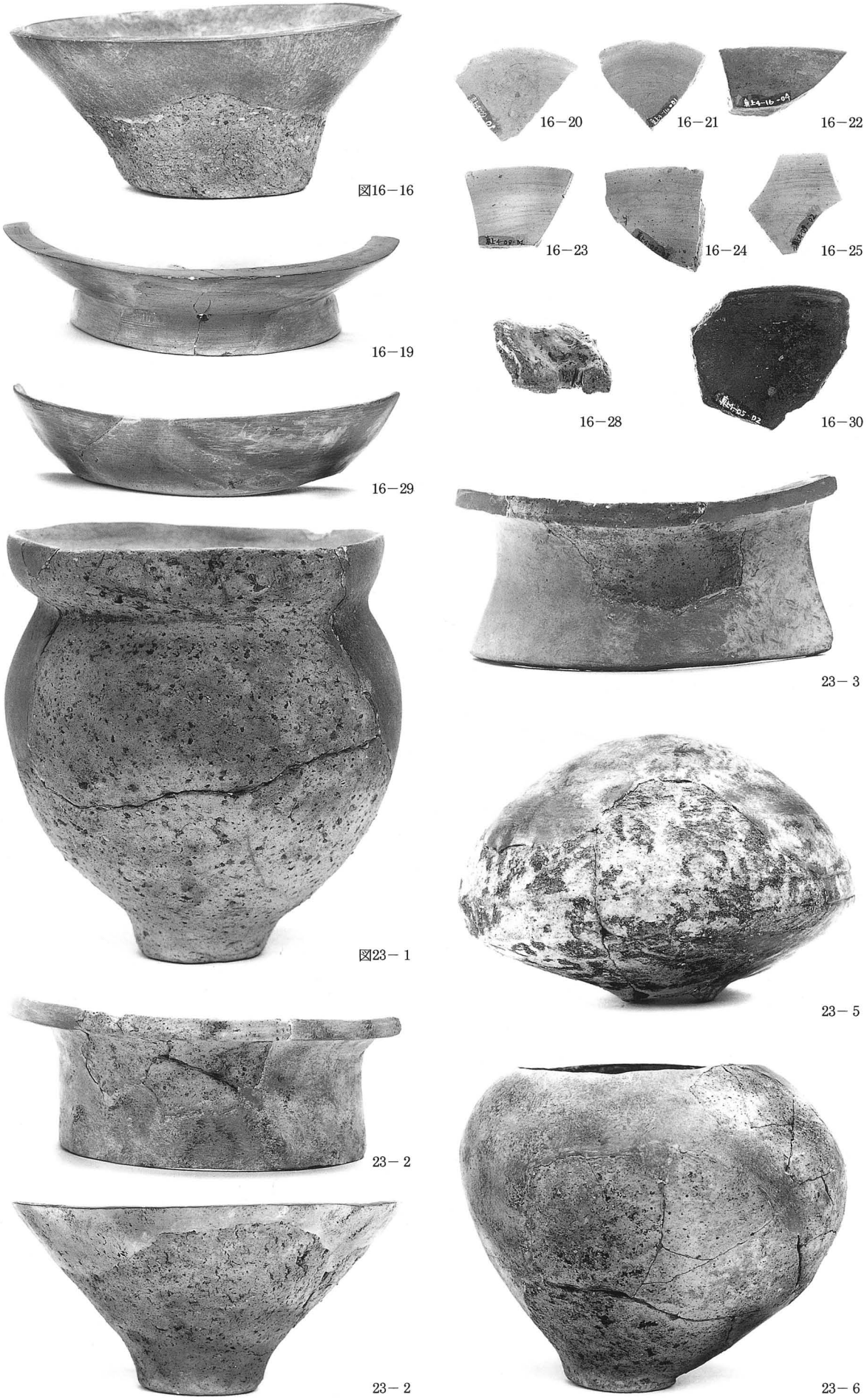
10－14

10－16

大蔵司遺跡の出土遺物（図10）



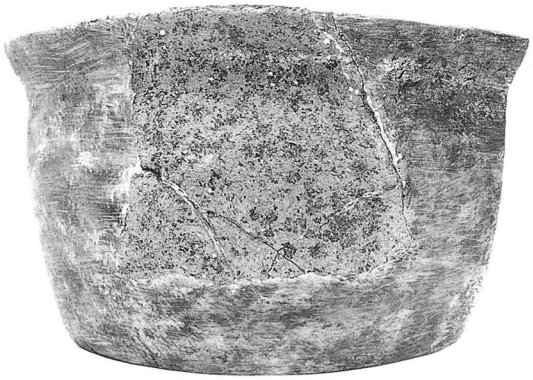
大蔵司遺跡（図10）と真上遺跡（図16）の出土遺物



真上遺跡の出土遺物（図16・23）

図23－8

23－20



23－10

23－21

図24－30

23－18

24－31

23－19

24－35

真上遺跡の出土遺物（図23・24）

図24－34

24－36

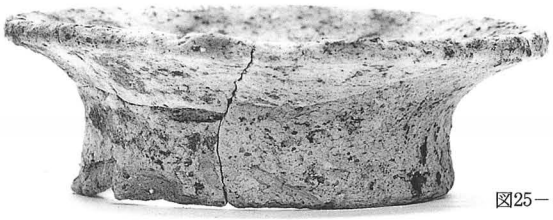


図25－1

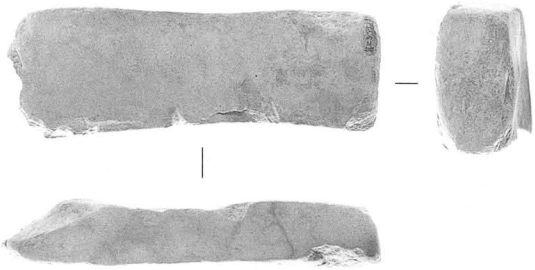
25－10

25－2

25－13

25－15

25－4



25－16

25－9

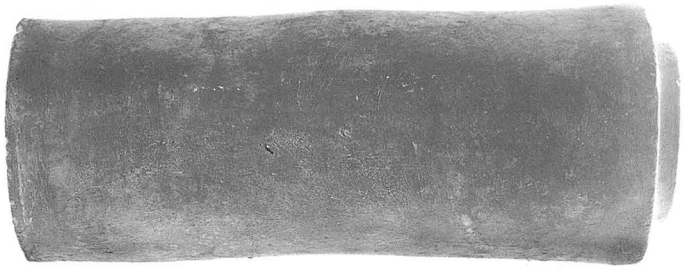
真上遺跡の出土遺物（図24・25）

図26－4

26－7

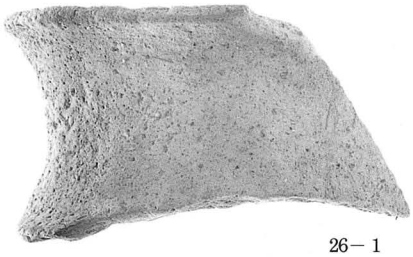
26－11

26－13



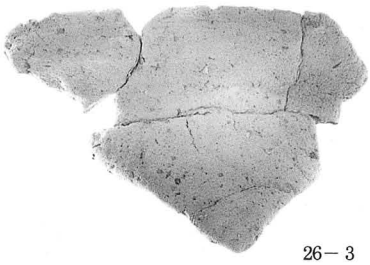
26－13

26－13

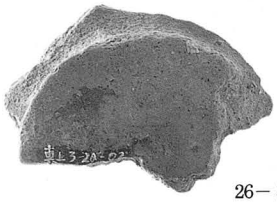


26－1

26－2

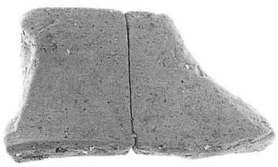


26－3



26－5

26－6



26－8

26－9

26－10

真上遺跡の出土遺物（図26）